# 中央公論

## 本號目次


口繪

帆影松濤二面

公論

◉大勢小觀三篇　兼山

◉清國の敎育事業　小林東里

◉太平洋論　篠原沼東

◉責任の觀念　背綠蔭

海外新潮

大勢

●日本と露亞亞(ニコライ氏の日露同盟論)●英領印度の國防

雜纂

●南極氷中の二千哩●雲背の流船●三分間の競爭●盲目の統計●新らしかりし時●六百年前の英國●歐洲鐵道●美人畫の泰斗

雜錄

◉南村閑話　桃華

◉細君操縦法　青柳有美

◉横井時雄氏と南條文雄氏　哄堂

◉雀舌餘談　藍川居士

詞藻

◉浮草集(數篇)●漢詩(町田柳塘撰)●青梅(坂本四方太撰)

思潮

●最後の十五分間(德富蘇峰外教篇)

評論

▲政界時事　桂内閣の前途●星亭氏の横死●政界日記(城陽政客)

▲社會小評　病的行動の源因●刺客奬勵主義の新聞●公民會の爲に惜む●梅子黄落集(里山)

▲文藝時論　新詩人に望む●劇界漫語●文壇水道の經(春潮)

▲敎育時論　新文相を迎ふ●賞杯●實業に就て●大學と海志弱行●馬翁遺書●倫理敎育●ちりづか(警醒子)

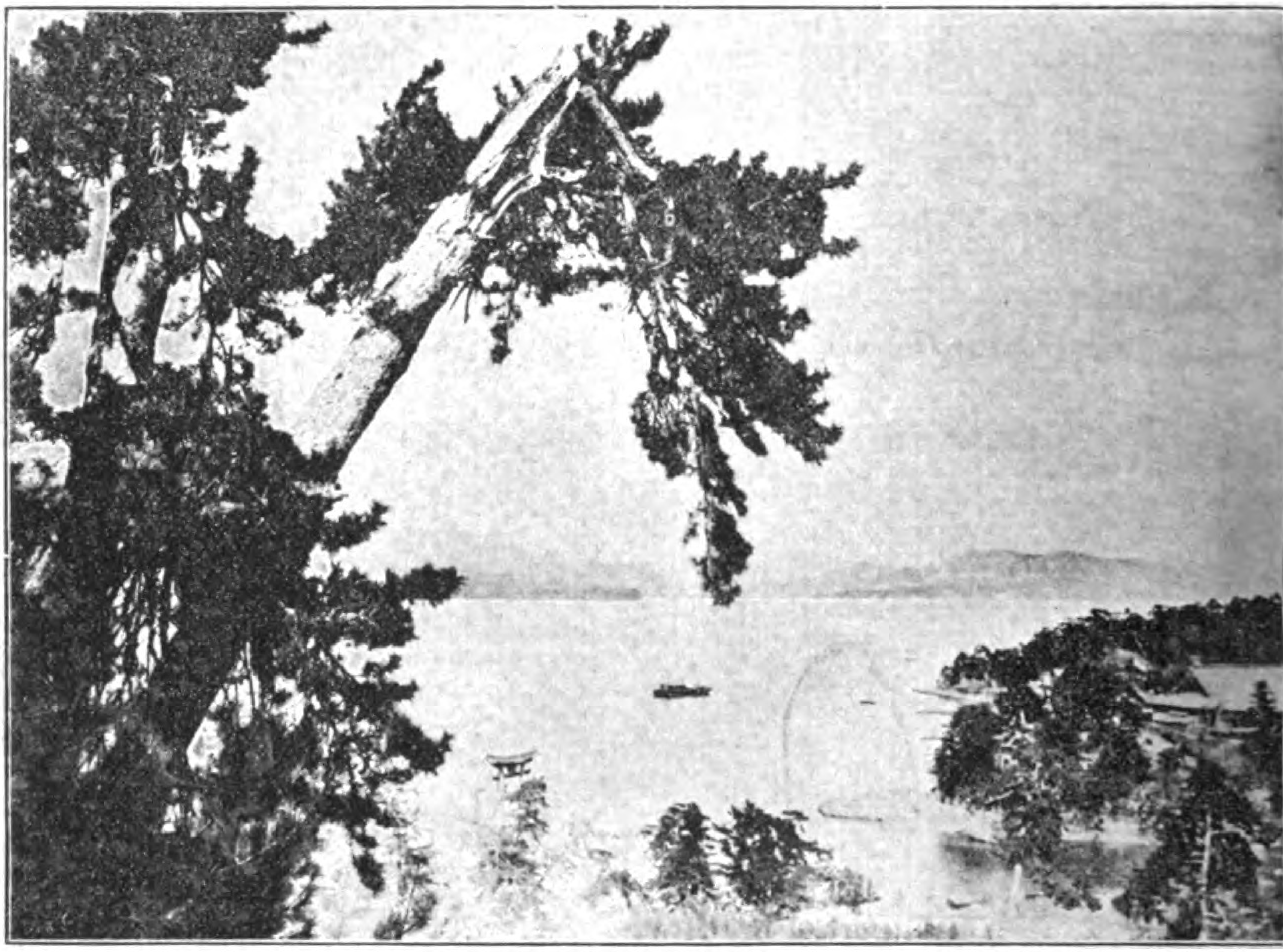
▲宗敎時言　我國學界の名譽●東京の宗敎雜誌●大學傳道●佛耶小觀●毎月通信(芝郊)

▲雜評　二十二日記　小觀生

▲讀者の文壇　三篇　短文數十篇

▲前月の出版界　(十二種)

▲彙報　▲廣告



嚴島



由井濱

N.149

中央公論　第十六年 第七號

中央公論

# 大勢小觀

## 一　我邦の社會主義者

何事も程度を察して適當の療法を施さずんば、却て其病弊を加倍するの恐れ有り、歐米の雛形を取り來て生呑活剝、細目までも直ちに我國の事情に當てはめんとすれば、思はざるの不覺之に依て生ず。

吾人は嚴肅なる禁酒主張者なり、熱心なる動物保護論者なり、風俗改良の唱道者を以て任ずるものなり、又社會主義歡迎者の一人なり、然れども吾人は我國の今日に於て、直ちに米國禁酒黨の如き運動をなすを欲せず、何となれば禁酒が社會を害するの慘彼と我と大に其趣きを異にすればなり、吾人は動物保護を主張するも、歐米と同じく動物保護會を作りて大々の運動をなすの要を知らず、何となれば我國牛馬虐待の程度猶これを爲す程に甚しからざればなり、吾人は衣食住改善の大必要を知る、然れども直ちに横町の裏店を三層の石屋とし、權助太郎作に靴帽を强ゆるを欲せず、富の程度同じからざればなり、吾人は亦社會主義の必要を認む、然れども强て貧富の懸隔、勞働者苦痛の聲をして我國の現在を以て歐米と同一なり、と絶叫するの必要を感ぜざるなり。

今後我國の製造工業益盛んにして、不幸資本家と勞働者の間激烈なる衝突を見、數十万の遊民、屈従死を待つが如きを生ずる時代來らんか、之に對し豫め適當の療法を考へ、其慘毒を避くるの方法を講ずべきは素よりなりと云へども、强て慘毒ならざる時已に慘毒なるが如く呼號し、其時期を早めんことを望むが如きは又これ一種の病的作用なり、我國の今日は僅かに資本家と勞働者の衝突未だ激烈ならず、舊時代の人情的制裁未だ消散せざる時なり、地主の小作人に於ける、雇主の被雇者に於ける、資本家の勞働者に於ける、歐米

諸國と未だ同じからざるものあり、往年米の大統領グラント我國に觀光し、世界第一下層社會に取ての樂園なりと稱す、以來二十年、我國の狀勢は非常の懸隔を生じ、駸々として恐るべき傾向に進みつゝありと雖、實際ヘンリージョーヂをして「進歩と貧困」を說かしめたる時代に比して猶同視す可らざるものあるなり、只迎へんとする近き將來に向て大に警戒を加へ、救濟の方法を講ずべきは今日の大急務なり、靜に歐洲諸社會主義の結果を斟酌して其弊害を避け、穩健なる主義を形作るべき時なり、如何にして調和を計るべきか、如何にして衝突を避くべきかを計畫し實行すべきの時なり、決して無智の勞働者を煽動し、强て悲慘の聲を大ならしむるが如き擧動を敢てすべき時に非ず、さらに況んや故らに不穩の文字を列ねて平地に風波を起さんとするが如きことをや、堂々たる經世家は宜く社會を導くべし諭すべし、煽動すべからず挑發すべからず、人情思想（ヒユーマニテリアンアイデア）を表面とし徐々に建設せられ得べき汝が理想を放擲して、最も我現時の國情に背ける民主思想（デモクラチツクソート）を何が故に眞向にふりかざせるか、吾人實に了解に苦むところとなす。

況んや此社會問題は實に世界の最大問題なり、鐵血宰相ビスマークの心血を濺ひて未だ解決し得ざりし問題なり、此問題にして一歩を誤らば、其害毒の波及するところ國家を破壞せずんば止まざらんとす、宜しく愼重に愼重を加へ注意に注意を加ふべき事にあらずや。

思ふに個人と社會の調和を計ると云ひ、弱者に同情を寄すると云ふ、其弊を除き國情に合せしめば天下何人か此主義に歸服せざらんや、古來の仁人義士が人類同胞の大義を說明し、社會改善の旗幟を飜へす、皆是れ社會主義に出でざるものなし、釋迦の佛敎を唱ふ先づ大に打破したりしものはケーストの別たりしに非ずや、耶蘇の基督敎を說く先づ攻擊したりしものは不義にして且つ富める守錢奴なりしに非ずや、要は運用の如何にあり、以て社會を改善すべく以て秩序を壞亂すべし、一身兩躰破壞を司るルードラ神たり、守護を主どるシバ神たり、心せざるべけんや。

## 二　雛形國

日本は雛形國なり、文明世界各種事物の雛形一として備はらざるは無し。

而して雛形の外何等の實物をも有せざるの國なり。

學術界に就て見よ、哲學者の雛形も一二人は有り、歴史家の標本も二三人は有り、法學理學工學醫學有ゆる百科の學、各專門の代表者悉く一人位づゝは見られ得べし、其他敎育界も然り、宗敎界も然り、政治界も亦然り、小サリスベリー、小マッキンレー、宗敎界の小ルーテル、醫學界の小コッホ、コンコードの聖人を千倍程小にせる思想家もあらん、アボン河畔の大詩人を萬倍程に縮めたりと見ゆる文學者もあらん、敎育家も有り軍人も有り、畵家音曲家乃至手品輕業師に至るまで、英米獨佛各模範國のタイプを備へて雜然として其文明流の標本を排列す、誠に奇觀なりと云ふべし。

豈獨り人物のみならんや、工業も然り、商業も然り、會社、銀行、學校、新聞、雜誌、交通機關、何物か一として小規模の見戲的雛形ならざらん。

日比谷公園は自ら稱して東洋の模範公園と云ふ、龍動のハイドパークや紐育のセントラルパークに比して十分の一にも足らざる規模を以て、猶日本流支那流西洋流の公園雛形を雜陳せんとす。

家屋も雛形的なり、衣服も雛形的なり、豈啻に是のみならんや、國民の軀格それ自ら既に人間の小雛形を示す。

申譯け計りに外面の軆裁を飾らんとするは決して大國民の資格に非ず、思ふに善惡共に其兩極端のみを比せば、我國の社會は其進歩決して歐米に對して遜色無るべし、然れども國民の多數、一國の實質より其平均點を採て價値を判せば、百等二百等、其懸隔は非常なるものならん、獨逸に入るものは曰く、小學の敎師猶我が大學講師に勝るの識見を有すと、英國に入るものは曰くホテルの番頭猶我國大紳士の氣品を有すと、雛形を以て代表せずして實質を以て代表すること此の如くに至らずんば一國健全の發達は到底望み得べからざる

なり。

## 三　代議士を海外に送れ

庄屋の古手、村夫子の變化、親分、才取り、破れ壯士の成り上り者、我國の政界はかゝる輩を以て中心たる三百代議士を形ち作る、彼等が頭に今日の學術無く、眼に天下の大勢無く、撰擧區に對する日本私黨に對する日本有るも、世界に對する日本無きが如き豈怪むに足らんや、所謂政治屋とは唯惡智惠のみ增長せしめて四六時中私利と私鬪を事とするものを云ふなり、かゝる輩に依て敎育を議せられ財政を議せられ外交を議せらるゝ我國民も亦禍なる哉。

偶ま眞面目に國事を憂ふるものあるも、世界を知らず、時代を知らず、徒らに枝末に拘泥して大局を犧牲に供す、其頑迷國を誤るに至ては則ち一なり。

かゝる輩を一掃して我國政界の中心をして一日も早く憲政の何物たるを知り、政黨の何物たるを知り、世界の何物たるを知る、政治家らしき政治家の多數を占むるに至らしめざるべからず、然れども前程猶遠し、只今日は有ゆる手段と方法を考へて現在の政治家に向て、幾分にても其識見を高上にすることを力むべきなり、セメテは愚にも付かぬ内輪喧嘩の一半丈けなりとも減殺し得ることを計るべきなり。

吾人茲に一策を獻ず、他無し代議士を擧げて海外に送り、一度世界を視察せしむる事是なり、則ち新たに代議士となりたるものは悉く公費を以て世界を一週せしむること是なり、吾人素より三百の現代議士を驅りて海外を視察せしむるよりも、三十の少壯有爲なる人物を派遣するの良結果あるを知る、然れども兎に角彼等は現今政界の中樞なり、有ゆる愚論、有ゆる妄動、千百政界の弊害は彼等を中心として起りつゝあり、若し一度ひ彼等をして世界の形勢を實測せしむることに依て、幾分にても彼等の見地を高め、世界各國政治實業の實現より、風俗の微に至るまで、我國の現狀に比較し得て、多少世界に對する我國の位置責任を自覺するあらば、其影響決して尠少に非ずと信ず、則ち我國の

位置責任を知るの時は、彼等が感情に依て國是を犧牲に供するの非を懺悔するのときなり、內輪喧嘩に國家の大方針を等閑にするを改悛するの時なり、吾人は少くとも是に依て我が政界愚論と妄動の一半を減却し得べしと信ず。

一人五千圓の視察費、三百人百五十万圓、貧乏國の貧乏經濟としては輕からざるの負擔なり、然れどもこれ僅に巡洋艦一艘の代價にあらずや、年々政界を腐らすが爲に撒き散らす莫大の買收費や、賄賂に比して効果決して同日に談すべからざるなり。

本年に至て一時に勃興せる公德問題と云ひ、諸種風俗に關する問題と云ひ、實業奬勵の問題と云ひ、皆これ世界博覽會を見物して歸りたる人士の巴里土産と云ふを聞き、或は現に某々政客が世界一週の歸後大に政治的行動を改めたるを實見し、此感特に深し、希くは吾人の此議を以て徒らに奇嬌の辭を弄するものとなす勿れ。(柔山)

# 清國教育事業の現在

余は余が專門の調査に多忙なりし故を以て充分なる教育上の視察を試むるを得ざりしのみならず僅に清國一部の教育施設に止まり全部に亘る評論をなす能はず然れども試に其見たる處によりて全般を推度し得るものと假定し聊か其實況を述べ且つ處感を陳せんとす。

小林東里

清國の教育事業は大凡左の如く區別することを得
第一、歐洲人の手になれる教育、第二清國政府及清國人の手になれる教育、第三日本人の手になれる教育

## 第一、歐洲人の手になれる教育

嘗て自國の國旗を他邦の砲臺に樹て、以て壯觀としたる彼等は、今や寧ろ平和の間に威勢を敷き、利權を占むるに若かずとし、嘗て砲彈雨下の間を往き自ら勇將を誇りたるもの、今は數條の規約に萬年の勝敗を定め、一言の容喙に無限の權利を占むるに若かずとなすは、正に現時歐米各國の採用する政略なり、果して彼等は此政畧を以て清國に臨み現在及將來に於ける商工業の利益を獲收し、遂に事實の占領を了へんとするものゝ

如し、

而して彼等が此平和的侵略主義の先發隊となり、奇功を奏するものは何物なるかを問へば、平和の冠冕を戴き天使の福音を干とせる宗教的教育者なり、陸より河より僻地を厭はず邊境を撰ばず、靜に淸人に迫り細さに人情風土物產を視察し、之を自國に報導し、しかも後軍の誘導者たらしめたるものは彼等なり、かくて適宜の地位を撰び、先づ壯嚴雄麗なる敎會堂を建立し、自己の根據を堅め、次で學校を興し教育的慈善を施し、更に後軍を招き同士を聚合し、居留地成り、領事館設置せられ、遂に歐洲の市街を形成するに至りてや、昔て教育したる淸人は喜んでその市街に來り、彼等の爲めに働き、彼等の爲に衞護し、彼等の爲めに資本を投ずるなり、淸國に於ける歐人の勢力は偶然に成立せざるを覺ると共にその根底の確實なるに驚かざるを得ざるなり。

抑も現在に於ける歐人の教育は漸次に進步し自ら二つの區別を見るに至れり(一)、主として歐洲人の子弟を教育する爲めに便宜なる教育を施す學校(二)、主として淸國人の子弟を教育する宗教學校

(一)、に屬するものは上海の西童書院(Public School)の如きものにして、之れ以上の教育に至りては獨立したる學校若しくは宗教學校内にその設備をなし、教育を完成するに遺憾なからしむるの便あり、近來此種の學校にて規模益大となり中にも上海佛蘭西學校(French School)の如きは五百餘の生徒を有し、各國の子弟の入學を許せり、(二)に屬する宗教學校にして尤も力を致せる國は佛米にして英獨之に次げり、此部類に屬する學校は、大小其數極めて多く到處之を見ざるはなし今單に上海及南京兩市のものを擧ぐれば

上海
- 獨逸學院 German School　　佛蘭西學校 French School
- 西洋女學堂 Institution of the Holy family　　育嬰所 Nursin Home
- 西童書院 Public School　　英華書院 Anglo Chinese College
- 金寓學館 Shanghai Collegiate School　　聖若瑟女學堂 ST. joseph's Institution
- 聖約翰書院　　法文公書館 French School
- 中正書院 Anglo chinese College　　格知書院 Polytechnic Institution

南京
- 滙文書院 Nanking University　　益智書院
- 女學堂　　醫學館 MedicalSchool
- 婦人學社　　幼童館

抑も淸國に於ける歐人の敎育は彼等に取りて著大なる奏功をなし、少くも左の如き利益を感受しつゝあるものゝ如し

一、歐洲人の清國に居留するもの子弟の教育を學校に託し相當の年月に相當の教育を受けしむるが故父兄たるもの子弟の教育に對して何等の心配を要せざると

二、歐人の清國商工業に從事するもの先づ學校教育に依りて必要なる資格を作り生長の後直ちに自家の經營に從事せしむるの便あると

三、無月謝若しくは相當の補助を與へて教育したる清國人は克く本國即ち清國と被教育國なる外國の言語文章を解するものなるが故ボーイにコンプラドーに或は貿易媒介或は資本融通の機關として商工業の利得を占むると

思ふに清國に於ける歐人の教育は設備漸次に整頓し、各國の語學校として亦殖民學校として之等の卒業生は將來清國商工業上の重大なる勢力の獲得者たると余輩の疑はざる處なり

第二、清國政府の設立即ち官立に屬する學校

其數至て少くしかも高等教育(清國として)に偏せり、目的とする所官吏の養成にあるが如く、從て之に入學する子弟も官吏の子弟若くは富家の子弟に限らるゝ傾きあり、之等の學校に屬するものは上海の南洋公學廣東の格知書院、同文館漢口の兩湖書院、自强學堂南京の格知書院等なり、經史詩文に重きを置き各國の語學若しくは稀に理科數學の一部を加ふるものあり此他軍事上の教育には南京に水師學堂、陸師學堂あり、武昌に將辦學堂(日本式の操練を授くるものにて士官學校なり日本の大尉三人教官たり)武備學堂(獨逸式の兵操を授く獨人二人教官たり)あり實業上の教育には武昌に工藝學堂農務學堂(吉田、美代の兩農學士教官たり)あれども不振にして僅に存ずる有樣なり(農務學堂工藝學堂は張之洞氏の私費を以て設立せるものなれとも等く官立と見做す)私立に屬するものにして尤も弘く行はるゝものは吾國舊時の寺小屋風の學堂にして、市街は勿論村落に至るまで其數多し、謂ふまでもなく不規律不完全の教育にして三字經千字文幼學詩篇四書五經の素讀及習字の外殆んど授くるものなし(有福の子弟は教師を自宅に招き一定の時間に之等の教育を受くるものあり)此他に半官半私の學塾あり、一定の學科により一定の學生を教育するものにあらずして一つの登用試驗場に外ならず、たゞその試驗監督官が時々受驗者の疑問に答ふる便利を與へをれり、此種類に屬するものは凡そ一省の首府必ず三四若しくは五六あり、たとへば南京の文正書院、鐘山書院、鳳地書院、尊經書院の如き之なり。

要するに清國人の手になれる敎育は殆んど陳腐に屬し、下層者は以て文字を解すれば足れりとし、上級者は官吏の登第試驗を以て唯一の目的とし、科擧登用の弊風全地を捲き以て今日の惰落頽敗の重因をなせり、然れども敎育上一縷の火明を認むるものあり、そは總督その人の意見により、或は自然の必要により、或は外人の敎育的社會的感化に依り、清國敎育上の施設に稍々喜ぶべき變遷の端緖を開きつゝあること之なり、科學經濟地理天文等の新學科を加へたるが如き、或は日英露の語學を授くるが如きは即ちその例ならん、尙近來清國學制の非點を論難し、切に科擧の弊を論ずる青年各地に起り、現に余が廣東にて見たる新聞の如きは「與友人論建學堂書」なる論文を掲げ科擧の制を廢し人材一途に出づるの要を說き 日本の制を採り小中大の學校を設立するの急務を論ぜるものあるを見たりき、ともかく清國現在の如き沈淪退步の原因は要するに敎育の不整理に基くものにして、苟しくも將來の發展を期するには是非とも敎育革新の力に依らざるを得ざる事、清人と云へども漸く自覺するものあるに至れるなり

第三、日本人の手になれる敎育

此時に當りて同文隣邦の親みを有する吾日本人の施設に屬する學校は果して如何なるものぞ試に左に掲ぐる處を見よ

上海本願寺學堂、

日本居留民子弟を敎育する學校にして現在生四十名、小學校敎員二名之を擔當し、長崎縣の敎科書を採用せり、經費は本願寺補助金の外居留人民の寄附金よりなれり。

福洲東文學堂、

清國官吏若しくは學者富者の子弟にして現在生七十名、本科二年豫科一年、日本語、譯文、文典、地理、歴史、數學、英語、軆操等を科せり。

經費は年十二圓の月謝の外日清間有志者の寄附金よりなれり。學校の創立は明治三十一年九月、創立者は何れも土地の名望家にして內閣學士陳寶琛、船政局長沈翊清、候補知府孫葆瑨、江西知府劉學恂外五名校長中西重太郎氏、敎官桑田豐藏氏外清人二名、第一回の卒業生七人中三人は日本に三人は臺灣に留學し他の一人は新聞記者となれり、

福洲の地日本が外國に不讓與を特約したる國なりことに臺灣に接近し彼我格別の關係を有する處なり本

校は實に此要地に興り漸く隆盛の端緒を啓けり余は切に同校が將來健全なる發達をなし日本語學校の活模範とならむことを希望して止まざるなり

厦門東亞書院

清國商家の子弟多し現在生五十名、修業年限三ヶ年、學科は日本語、英語、漢文、數學、經費從來二圓なりしが臺灣總督府より補助を得るに至りしより目下無月謝、寄宿舍の設けあり食費三圓、校長長瀨鳳輔氏、教授來原慶介氏外清人二人、本校は創設後日尙淺きを以て未だ結果の見るべきものなしと云へども、志願者定員を超ゆるの有樣にて殊に補助を仰ぐの結果標本器械も稍整頓せり、思ふに福洲東文學堂と共に將來有望の日本語學校となるならん、

南京本願寺東文學堂

清國官吏の子弟多し現在生三十名あり、修業年限五ヶ年にして内二年を普通科とし三年を言語科とせり、經費は毎月一圓の月謝の外本願寺補助に依る、寄宿舍あり食費二圓五十錢、職員嵜圓城岩崎藁の兩氏外二名

此他蘇杭二洲に本願寺の設立せる學校各々一あるを聞きしかども之を見るを得ざりきたゞ前述のものと大差なきを推度するのみ

世の清國問題を言ふもの、事新しげに分割と言ひ保全と云ふもかくの如くならしめたるもの何人なるかを一考せよ、遼東に兵を動して世界の嫉妬を亨けたる日本人は正に其人なりしに非ずや、各國假りに事實の分割をなし吾れ之を不可とするも彼等、何等の痛痒をか感ぜんや、かゝる空論の定まる曉きは歐洲各國已に事實の占領を終へ吾れ獨り傍觀するの愚を學ぶに過ざらんのみ、蓋し之を言ふもの今の實際より推測し得らるればなり、若し苟しくもかゝる大勢に定まるべきものとせば吾國の志士たるもの宜しく奮興し對清政策上大に頭を惱ますの時ならずや、然り吾人の如き無能者も亦正に此政策に對して考慮するや切なるなり、何を以て昔日の屈縮を伸長せんか、歐米の平和的侵畧主義に倣ひ鐵道布設の權を得んか、郵便事業を支配せんか、運輸機關を獨占せんか、鑛山採堀權を掌握せんか、顧みて現實を見れば已に人の得る處に歸し、たゞ一つの平和的事業の教育のみ稍々吾人を待つもの〻如し、此一の教育事業必ずしも吾人を失望せしむるものにあらず、蓋し吾國の威勢を彼の地に敷き、信任を彼の地に博し、彼等の資本を利用せしむるものは實に此教育を

措いて他にあらざればなり、然らばその教育の實權を握るの方法は如何にすべきや、之れ次に起る問題なり、茲に於て吾人は幾多の說なきを得ず、たゞ顧みて吾國の現狀を考ふれば、その希望の寧ろ空論に屬するを恐るゝなり、即ち實行せられ得べきものを記して世の識者に諮はんとす

一、外國語學校特に支那語學校（現に東京にあるが如きもの）を上海に置く事

完全なる教師を得らる事、學費經濟なる事、（現今清國中等學校の食費三圓內外なり）、學生は支那語學の研究の外實地に清國の事情に通する便ある事、清國以外の外國語を完全に修め得る事等の利便あり。

二、現在の日本語學校に補助を與へ、更に設備を完全にし、行く〳〵清國の小中學の模範學校をも之を設立する事

從來同文會の補助若しくは本願寺の補助あるも、小額にして充分の設備をなす能はず、ここに完全なる教師を得ざるが如し、清國人の利益は已に本文に言へり。居留民の希望も亦茲にあり。

三、上海に完全なる殖民學校を設くる事

一項に屬するもの目下同文の設立ありと云へども吾人は更に外國語學校の清國移轉を主張するのなり

以上は吾人が實地踏査の上に於て見聞しいさゝか感じ得たる考案に屬す、一言世の識者に問ふこと爾り。

# 太平洋論

篠原沼東

海は人をして無限の感想を起さしむる者也。平穩鏡の如き時に於ては、如何に其寬廣の量を慕はしむるか。怒濤山の如き時に於ては、如何に其進取の氣象を學ばしむるか。されば海上貿易を以て、單に營利一偏と見るは一概なり。染み易き自然の感化は、利益に加ふるに勇力を以てし、智慮に加ふるに、大膽の德を以てするものなり。是れ古來海濱の人民が、內地の人民に比して、活潑進取の氣象に富み、同人種ながらも、遂に能く獨立自治の國民たりし所以なり。彼の文明發生地は、埃及、および西亞細亞の平原なりしも、其發達地は、却て其海濱なる、フィニシヤ、希臘にてありき。若しくは又、新大陸發見以來、先じて文明の域に進みたるは、海面に接したる西欧羅巴にして、先ぜられて列强の背後に落ちしは、露國なりき。これ皆な海上交通の便否と、思想の感化とに依らずんばあらず。是れぞ

ヘーゲルの所謂、水は一致の徳を有し、唯山のみ分離せしむる所以にてあるか。

熟々國勢變遷の歴史を察ずるに、國家の運命は、總じて海上貿易、即ち海上權の獲得に懸れるが如し。地中海、及びバルチック海の歐羅巴に於ける、亞剌比亞海、及び印度洋の西亞細亞に於ける、黄海、及び日本海の東亞細亞に於ける、苟も文明の幼兒は、何れも皆な、海なる母の恩惠によつて、哺育せられたり。別言すれば、第十五世紀の末葉に至る迄で、亞細亞、亞弗利加、歐羅巴の文明は、各内海に沿ふて成長し來り、殊に泰西に於ては、地中海を以て中心とし、バビロン、ニチベ、アンチオック、チエルサレム、カイロー、アレキサンドリア、カーセーヂ、ローム、コンスタンチノープルの名都、其沿岸に羅列するを見たり。而して中世以降、亞細亞、歐羅巴の交通、漸く頻繁となり、支那文明の結果たる羅針盤、印行術、火藥製造法の西傳し、遂に十五世紀の終りに迫んで、コロンブスの西大陸發見、ワスコデガマの亞弗利加廻航となり、地中海上の全勢、漸く此に一段落を告げ、伊太利の勢力は轉じて、西歐羅巴に移り、西班牙、葡萄牙起り、和蘭起り、英佛代つて其權力を占め、計らずも文明は、大西洋を渡りて、亞米利加に達し、所謂内海時代より、大洋時代となりぬ。爾來十八世紀の後半期に至る迄で、大西洋は西洋文明の中心たる事、恰も地中海の古代史、及び中世史時代に於けるが如く、ロンドン、パリ、アムステルダム、ニユーヨーク、ボストン、フヰラデルヒヤの諸盛都起つて、大西洋兩岸を賑はせり。然るに十八世紀の後半期、キヤプチンクツクの探險航海以來、世界文明の中心點は漸次大平洋に移らんとし、現今の時勢見米國は、早くも其充溢せる國力を擧げて、權を此洋上に恣にせんとし、布哇を併し、ヒリツピンを服し、キユベ、ポートリコをも領し、腕を東亞に伸すの踏石たらしめ、ニカラガ運河の開鑿を待つて、一大雄飛を遂げんとせり。北方の尚武國露西亞は、西比利亞鐵道により、歐州と東亞とを連結し、其尾端をウラヂヲストツクに定め、之れに依つて、大平洋上に打出で、支那海、日本海、及び米國との運輸交通權を掌握せんとせり。米人ブルークスアダムスは、其近著に於て云へらく「世界帝國の忠心は定住的のものにあらず、其時運につれ、常に他に移動し行くものなり。米西戰爭の結果は、其中心を米國に輸たしたる事、恰もウオートルローの戰爭が、世界の中心を、佛國より英國に移し

たるが如く、マニラ、サンチアゴの戰は、英國より之れを米國に移したり。何となれば、英國は著しく其生產物の減少を見たり、而して其國民の食料は、之を米國に仰がざる可からず、結果として、英國の外國貿易も、所謂過午の日光に終る可し。獨逸の如き、近時頗る優勢となり來れるも、其地位に於て、財源に於て、到底世界の中心たる能はず」と。而して尙ほ其最後に於て、警告して曰く「露國にして若し益々勢力を得、中部支那に於て權力を占むるあらんか、世界の中心は、遂に米に來らずして、却て東亞に趣く可し」と。多少浮誇の言を免れずと雖も、兎にも角にも、時運は此等二大新興國に向つて、歸集しつゝあるや疑なし。殊に吾人は米國を以て、其最も多望なる、最も恐る可き幸運兒として信ずるなり。若夫れ中心一度米國に歸し、權を太平洋上に恣にするに於ては、日本は如何なる態度を取る可きか、濠米亞三大陸間に介立せる日本は、將來如何なる方策に依て、之れに對せんとする乎。これ豫め研究し、着手し置かずんばあらざるの、最急要務ならざる乎。

太平洋は、東は南北亞米利加の海岸より、南は大洋洲 Polynesia 諸島に及び、西は東部西比利亞、支那、日本、暹羅、東印度、蘭領印度より、濠洲沿岸に延長し、世界中、最富最貧の國によつて限界せられ、黃白兩人種は、之に由つて互に相接近し、相競爭し、而も將來の運命を、此洋上に決せんとせり。而して此大戰場に打ち出づる爲めには、既に數條の鐵道、北米大陸を橫斷し、中央亞細亞を貫徹すべき大鐵道も、亦將さに敷設せられんとす、加之、米西戰爭の終結以來、米國はフヰリッピンを領有するに至りたるが爲め、全速力を以て、ニカラガ運河を成功せしめ、之に依て、ワシントン政府と、領地との間に、迅速なる交通の路を開かんとし、英國も亦、クレートンブルワル條約に於て、ニカラグワ運河の、米國の手中に落つるを防止しあるに關らず、今や寧ろ、全く之を米國に與ふるも、なほ之が速成を欲するものゝ如し、是れ亦英國が速に此と通じて、太平洋に出顯せんとするの志を見る可く、若し將來、英米同盟の成るの日あらんか、其根據、恐らくは此に存す可き也。

千八百八十八年の報告により、斯くも列國の着目しつゝある太平洋が、如何なる貿易上の價値を有するかを示さんか、知るなきものは、殆んど其豫想外なるに驚惑す可し。

## 亞米利加大平洋面諸國

| | 輸入 | 輸出 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 智利 | 一三,000,000磅 | 一一,五00,000 | 二四,五00,000 |
| ボリビア | 一,000,000 | 三,000,000 | 四,000,000 |
| 白露 | 二,000,000 | 三,000,000 | 五,000,000 |
| イクエードル | 一,五00,000 | 二,000,000 | 三,五00,000 |
| コロンビヤ、メキシコ、中米、 | 一0,000,000 | 一二,000,000 | 二二,000,000 |
| 合衆國中大平洋面諸州 | 一三,000,000 | 一七,000,000 | 三0,000,000 |
| 英領コロンビヤ | 一,000,000 | 三,000,000 | 四,000,000 |
| 合計 | 四0,五00,000 | 五三,五00,000 | 九三,000,000 |

(以上は唯外國貿易額のみを示せるもの沿海貿易額は之を詳知し得ざるも其額亦少からざる可し)

## 布哇及び、オーシアナの表面に羅列せる群島。

| | 輸入 | 輸出 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 布哇 | 一,五00,000 | 三,五00,000 | 五,000,000 |
| サモア | 八0,000 | 六0,000 | 一四0,000 |
| フヒツー | 二五0,000 | 五00,000 | 七五0,000 |
| ニユーギニア | 五五,000 | 三五,000 | 九0,000 |
| 比律賓 | 五00,000 | 二七0,000 | 七七0,000 |
| 蘭領東印度 | 一六,000,000 | 二五,000,000 | 四一,000,000 |
| 牡念島及び其附近群島 | 二,000,000 | 三,000,000 | 五,000,000 |
| 合計 | 二三,六三五,000 | 三六,六一五,000 | 五九,二五0,000 |

## 濠洲殖民地。

| | 輸入 | 輸出 | 合計 |
|---|---|---|---|
| ニユー、サウス、ウエルス | 二一,000,000 | 二四,000,000 | 四五,000,000 |
| ビクトリア | 一四,000,000 | 一六,000,000 | 三0,000,000 |
| クインスランド | 七,000,000 | 八,000,000 | 一五,000,000 |
| 南部濠洲 | 七,五00,000 | 八,000,000 | 一五,五00,000 |
| 西部濠州 | 六,000,000 | 四,000,000 | 一0,000,000 |
| タスマニア | 一五,000,000 | 二,000,000 | 三,五00,000 |
| ニユージーランド | 七,000,000 | 一0,000,000 | 一七,000,000 |
| 合計 | 六四,000,000 | 七二,000,000 | 一三六,000,000 |

## 極東方面の諸國。

| | 輸入 | 輸出 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 支那開港場 | — | — | 七三,五00,000 |
| 香港 | — | — | 一0,000,000 |
| 日本 | 二三,000,000 | 一七,000,000 | 四0,000,000 |
| 朝鮮 | 一,五00,000 | 一,000,000 | 二,五00,000 |
| 東部西比利亞 | 三,000,000 | 二,000,000 | 五,000,000 |
| 暹羅 | 四,五00,000 | 六,000,000 | 一0,五00,000 |
| 佛領印度支那 | 五,000,000 | 六,五00,000 | 一一,五00,000 |
| 海峽殖民地馬來半島 | 四一,000,000 | 三五,000,000 | 七六,000,000 |
| 緬甸、英領印度 | 九0,000,000 | 一一0,000,000 | 二00,000,000 |
| 合計 | — | — | 四二九,000,000 |

(右の内支那開港場外に艀を以て輸送する貨物、日本及び海狹殖民地の沿海貿易其他ヒンドスタン及び其英領緬甸間の貿易額を除く此種の貿易額概算二億磅)

以上を概括し、實際計算せらる可き、大平洋面の貿易額、並に沿海貿易概算額。

大平洋面の貿易額。

| | |
|---|---|
| 南北及び中央亞米利加太平洋面諸國 | 九三、〇〇〇、〇〇〇磅 |
| 大平洋內群島及び諸國 | 五九、二五〇、〇〇〇 |
| 濠洲 | 一三六、〇〇〇、〇〇〇 |
| 西大平洋岸及極東諸國 | 四二九、〇〇〇、〇〇〇 |
| 小計 | 七一七、二五〇、〇〇〇 |

沿海貿易額概算。

| | |
|---|---|
| 太平洋西亞米利加 | 六〇、〇〇〇、〇〇〇 |
| 太平洋內諸島 | 一〇、〇〇〇、〇〇〇 |
| 大平洋面亞細亞 | 二〇〇、〇〇〇、〇〇〇 |
| 小計 | 二七〇、〇〇〇、〇〇〇 |
| 總計 | 九八七、二五〇、〇〇〇 |

斯かる事實よりして見ば、大平洋面の海上貿易額は、毎年殆んど十億磅の、多額に上るものと云ふ可し。而して印度、日本、濠洲諸國は、今や着々發達の歩を進め、支那、西比利亞、朝鮮、及太平洋面亞米利加諸國は、久しからずして、急速なる進歩を來す可ければ、過去五十年間の進歩は、固より驚く可きも、今後百年の進歩は、更らに其豫想に躊躇せしむ可し。

加之、大平洋岸は、世界人口の最富なる所なり。所謂十億の人口、其一半以上は、此一大湖水に包含せらるゝ也。現今大平洋西岸の人口を擧ぐれば、左の如し。

| | |
|---|---|
| 太平洋沿岸北亞米利加 | 一一二、〇〇〇〇 |
| 太平洋沿岸中央亞米利加 | 一八八〇、〇〇〇〇 |
| 大平洋沿岸南亞米利加 | 一〇〇〇、〇〇〇〇 |
| 濠洲 | 五〇〇、〇〇〇〇 |
| チセアニヤの群島 | 四六〇、〇〇〇〇 |
| 英領印度其他の屬領 | 二九〇、〇〇〇〇 |
| マレー半島シヤム其他 | 八五〇、〇〇〇〇 |
| 佛領印度 | 二二〇〇、〇〇〇〇 |
| 朝鮮 | 一五〇〇、〇〇〇〇 |
| 東方西比利亞 | 六〇〇、〇〇〇〇 |
| 支那 | 四、〇〇〇、〇〇〇〇 |
| 日本 | 四五〇〇、〇〇〇〇 |
| 合計 | 六、六一五〇、〇〇〇〇 |

人口の巨多は、貿易市場の巨多を意味し、市場の巨多は、列國爭奪の所以を來たす。曾て地中海、印度洋上に於て、互に海權を爭ひしもの、今や漸く、大平洋上に打出でつゝあるは、自らなる勢なりと云ふ可き也。殊に歐州の政治家、既に其內部に於て、爭奪の地なきに窮したるの折柄、此形勢を看取したるが爲め、大平洋海權の問題は、意外にも、彼等が近き將來に於ける、死活問題と豫定せられぬ。再問す、四邊澎湃たる我海國民は、如何なる方策に依て、此難關に當らんとするか。

頃日說をなすものあり、曰く、侵略主義を取る可し、

敵國撲滅主義を取る可し、而して遂に、兵をセントピートルスブルクに操出す可しと。大言、壯とす可く、快とす可し、熱し易く、冷え易き、火山國民の、最も偉とするの說なり。されどもこは、冷靜なる頭腦を以て、國家百年の大計を慮らざる可からざる、今の日本に於ては、全く不合格の說なり。何となれば、これ耒を棄てゝ、大砲を用ゐんとすればなり。平和的膨脹に依らずして、武力的、破壞的膨脹に依れば也。英國の殖民に成功せしは、其主義、平和的、商業的なるに在りき。西班牙の失敗せしは、武力的、刼略的なるに在りき。ペンは彼れに依て、ペンシルバニヤに成功し、豐公は之れに依て、志を朝鮮に得ざりき。島田沼南、其成敗の所以を說いて曰く、平和の移植は、家族的發達あり、勞力尊重の美風あり。而して侵略的膨脹は、漂泊人種を增加し、他人勞力の精果を掠奪するの惡習あり。永年の競爭に於て、一は人口增加せずして、財力縮まり、一は人口蕃息して、富資殖す、之れ其盛衰成敗を來すの理也と。至言慮る可きなり。加之、これを社會進化の上より推するも、殘獰血を好むの動物は、之れ自滅の動物なり。豹虎の榮えざる、鷲鷹の增殖せざる、即ち其所以を知り得可し、人類豈に獨り此理を免れ得んや。惜むらくは我日本は、古來武力的歷史に富み、平和的歷史に至つては、絕えて見る可きなし、之れ我日本が、此上なき好地位にありながらも、依然、三千年間の小日本たりし所以なる乎。

武力的膨脹、果して國是とす可からずとせば、策は竟に平和的膨脹に在るか。然らば如何にして其目的を遂げ、權を大平洋上に得んとするか、少くとも人後に落ちざらんとする乎。吾人は先づ其刻下の急務として、速に左の二要件の實施を促すもの也。

(一)日本海に於ける通商港を保護す可し。

明治三十二年、條約改正の擧あるや、從て其貿易港の不足を告げ、遂に明治三十二年七月、勅令を以て、二十二港を開き、更に通商港とせり。然るに開港に關する規定中、此等の各港は、滿二年每の輸出入貨物の價格、五萬圓に達せざる時は、閉鎖するの規定あり。吾人は其意、地方人民をして、其業に勉めしむるの奬勵なるや、將又斯かる小額を以ては、唯々經費を要して、將來の目的なしと云ふに在るか、未た分明ならざるも、兎にも角にも、斯かる條項の附帶せらるゝ以上は、滿期日を以て、斷行せらるゝや明かなり。然るに今や、二十二港の狀况を見るに、清水、武豐、四日市、下關、

門司等を除くの外、日本沿岸に於ける、濱田、境、宮津、敦賀、七尾、伏木の六港、及對島の鹿見の如きは、若其斷行の日に於ては、何れも存續覺束なきもの也。而して其期日は、最早一兩月の間に迫れり。

元來日本海は、政治經濟上に於て、中央と相隔離し居たるを以て、稍もすれば、世の注意を引かざらんとせしも、今や彼れは、我航權の一大勢力を有する所、而も其對岸に於て、西比利亞あり、朝鮮あり、殊に近年朝鮮は、新に幾多の開港を設けて、對外貿易に應じ、露國は亦西比利亞鐵道に甘せず、東清鐵道の落成を急ぎつゝ、露韓貿易の盛を期しつゝあり、斯かる上に於ては、日本海は決して、從前の儘にて打置かれ可きにあらず、鋭意貿易の發達を計り、通商港の繁盛を計り、遂に日本海上の覇權を、失はざらんことを計らずんばあらず、これ清韓貿易に對する、必然の要務ぞかし。

既に必然の要務たり、然るに今其開港の條項に基き、濱田以下六港の、閉鎖を見るの不幸あらんか、恰も天女の羽衣を奪はれたる如く、日本海上に於ける我通力、即ち通商權力は、立ち所に損失せらる可ればなり。よしや、一旦撰定せられたる六港の、見當違ひなりとするも、未だ通商港としての設備、不充分なるが上に、僅々二ヶ年の成績を以て、其港の將來を判ずるが如きは、早計も亦甚しからずや。吾人は想ふ、右六港は、行々東洋貿易の中心を引寄するに於て、到底存せざる可からざるもの(政府亦斯く信じて撰びしなり)なりとせば、一度廢して、更らに再び起さんよりは、寧ろ今に於て多少の不振を忍び、將來の發達を計るこそ、是れ所謂、屈して伸ぶるの良策にあらざるか。政治上よりするも、果た貿易上よりするも、以上七港は、斷して閉鎖す可きものにあらず、彼等の閉鎖は、即ち我が東洋貿易の閉鎖なり、從て日本貿易の閉鎖なり、されば吾人は一方に於ては、盛に本邦國民の移住して、支那居留地の草萊を開くと共に、又一方に於ては、我大藏省の、斯かる謂れなき附帶條項を撤去し、七港の存續を計らん事を切望するもの也。

(二)中米、南米に一大市場を設備す可し。

國土は狹隘(豊饒なれども)なり、人口の增殖は夥多なり、到底殖民事業を、盛にせざる可からざるは日本なり。而して又之れに依て、遂に成功せんとするものは日本なり。今日の人口四千五百萬を以て、十四萬二千五十方哩に分配すれば、一哩二百九十六人の割合なり。而して近年五ヶ年間の增加を見るに、年々殆んど四十萬、

乃至五十萬なり。斯かゝる勢を以て進み行かんか、今四千五百万は、十年後に於ては、五千萬、六十年後に於ては其二倍、即ち約九千萬人となるの理なり。現今に於て既に過多ならんとするもの、况んや五千万人に於てをや、况んや九千万人に於てをや。之れをしも、尙ほそのまゝに放任し置かんか、所謂民其所を得ず、國其弊を受くるに終らんのみ。されば我が日本に於ては、獨り海上權を取得するに於てのみならず、內政整理の上に於ても、盛に海外移民を計らずんば能はざるの國也。

然らば何れに向つて移住す可きや、如何にして之を奬勵す可きや。

新大陸が、其好移住地なるは云ふも更らなり、其北米に於ては、合衆國は其面積、我に二十倍するも、人口は我が二倍にも足らず、邦土豊に、天産に富み、特に工業の勃興、近時頗りに盛なるを以て、來住者を待つ頗切なり。加ふるに、北米太平洋岸一帶の地は、我が不二峯に等しき峻嶺あり、瀨戶內海に勝るの多島海景あり、天の橋立あり、松島あり「ロッキー」山あり「フレザー」河あり、其壯景、其美觀、まさに此地を相して行宮を營み、我が　皇上の幸を願はまほしき程なり。誰れか奮て此土に一大市場を設け、此一大快事を遂げんとはせざる。

されども若し、北米は事業權力、已に歐州人種に歸し、我國人の其權勢を振ふに、不便利なるを氣遣ふものあらば、然らば南米中米に於て移殖す可し。富源未だ全く開かれず、人煙稀疎にして、寧ろ外來人を歡迎せざる可からざるの地なり、而して現に、其地の主人顏なるものも、多くは西班牙、若しくは南歐ラテン人種にして、勢力、躰力、財力に於て、決して我移住民の難敵手にあらず、進で業を起すに易し。

中米は、全躰に土地肥沃にして、新舊兩世界に知られたる、植物、穀類、一として適應せざるはなく、麥、大麥、燕麥、玉蜀黍は、高地にも生ず可く、綿、砂糖、ココア、米、カフヒー、煙草、乳香、バルサム、胡麻、藍、ヲレンヂ、レモンの類は、驚く計りに繁殖し、山林には美麗にして堅硬なる材木、及び染料木に富み、鑛物には、金銀、銅鐵、鉛、亞鉛あるも、其採出の法宜しきを得ず、空しく採掘の日を待ち設けつゝあり。就中「ガテマラ」市の如きは、海面を拔く五千呎、年中殆んど春の如き氣候にして、最暖期とも云ふ可き、三四五月に於ても、僅に華氏七十四五度を上下するのみ。

夜間亦清凉、頗る身を養ふに適すと。

南米も亦一帶に、土地沃壤なるは云ふ迄もなし。世界中西印度を除くの外「エクエドル」より出づる程のココアは無し。此外、ゴム、コヒー、シンコナ樹等に適し、ペトロリウム油に富み、石炭其他の鑛物を包藏せり。同地の標本とも云ふ可き「エクエドル」は、概して干濕宜しきを得、肺病は其高地に於ては、全く知られざる空氣なりと云ふを見ても、如何に其氣候の、身體を害せざるかを知り得可し。

兎にも角にも、斯かる増殖力ある人口を以て、斯かる都合好き移住地あり。若夫れ、移民の事盛に行はれ、一大市場の設備せられ、我國籍に屬する船舶が、帆を擧げ、烟を吐き、大平洋面を往復し、之を保護せんが爲めの軍艦は、常に六七艘づゝ、威勢よく大平洋上を、縱横するの日あらば、之れ正に日章旗が、星旗を壓倒したるの日なり、大平洋海權の一半が、日本國民の手中に歸したるの日なり、而して遂に我日本が、世界商業の中心、世界政治の原動地たるの日なり。壯絶、快絶豈に豫想に堪えんや。

日本國民、已に此大方針を國策として立たん乎、然らば如何なる方法に依て、此れを奬勵し、成功せしめんとするか。

政府の取る可き政策に二あり。

(一)教育上より、殖民的思想を養成す可し。而して高等小學に於ては、主として南米中米等に關する、地理の智識を收得せしめ、中學に於ては、此等の熱帶中帶國に生活する、方法、及び其産物、貿易に關する智能、幷に殖民事業に成敗したる、諸國の方策、歴史等に就ても、成る可く了得せしめ置くを要す。

而して又其一方に於ては、今の地方幼年、中央幼年學校を全廢し、其不生産的人物の養成に代ふるに、日本殖民學校を設置す可し。而して其殖民に關する地理、歴史より、日本國民が、彼地に於て起す可き事業を敎授し、武斷的、島國的思想を一洗して、平和的、殖民的、膨脹の思想を養成す可し。之れ其對内方策也。

(二)大平洋の群島問題に關しては、勉めて其權利を失はざらん事に注意し、石炭貯蓄所を設置するに怠る可からず。英國の佛獨に勝りしも玆に在り、海上の覇王と呼ばれしも此に在り、宜しく日本國民の、忽にす可からざるの要務なり。

而して更らに一方に於ては、南米中米に向つて、領事を派遣し、然らざるも、半官的外交委員の、派出をな

すに勉めざる可からず、而して盛に該地の事情、變動の報道に注意せしむ可し、之れ其の對外方策の概要なり。

以上は獨り政府の取る可き方策なるも、國家の事、もとより政府の獨力に一任す可きものにあらず、民間に於ても、進んで之れが補助の責に當らざる可からず、而して其なす可き事業に二あり。

(一)私立商工業學校、及び殖民學校を設立す可し。殖民と商工業との關係は、今更ら此に云ふ可くもあらず、殊に本邦の如き、商工業學校の最も缺乏せる國に於ては、猶更らの事なり、而して殖民學校の必要は、再び此に說明の要を見ず。

(二)彼地に於て、一大商社を起す可し。即ち民間の資本家が相聯合して、一商社を設立し、兩米と我國との間に於ける、通商貿易に從事せまほしきなり。其事業としては、自由移民を移入せしむるも可なり、契約勞働者を移住せしむるも可なり、或は會社自ら兩米の地に企業するも可也、何れにもせよ、此に其移入を計ると同時に、會社自ら貿易事業を經營し、保護の船舶をして、徒勞ならしめざるを要す。而して政府も亦、此會社の發達を計らんが爲めには、該會社の所有に係る、船舶の航海里數に應じて、航路補助を國庫より與ふるを適法とす、而して時運の進步に連れ、我國の大平洋上に覇たるの時に於ては、之れをして、荷蘭印度會社たらしむるも可なり、英國東印度會社たらしむるも可なり、そは唯國民の技倆次第なりとす。

如此く、一方には政府の獎勵あり、一方には私人の熱心あり、而して遂に、兩米及び北米に於て我勞働者を見、我移住者を見、我國人の商社を見、事業を見、此事合して海上權獲得となり、政治上の一勢力とならば、之れ實に海外の新日本、即ち所謂平和的膨脹の成功にあらざる乎。

以上之を要するに、國運は東より、西に向つて循り來れり、而して其運命の決戰場は、即ち大平洋となれり。然るに今其國運循環の衝に當り、權を大平洋上に一攫せんとするものは、即ち北米合衆國なり。而して亦地利上より、氣候上より、果た人口增加の上より、起つて彼れに對抗す可き、天祐あるものは日本なり。其天祐に乘じて、其運命を掌握せんと欲せば、必らずや先づ、内商工業の盛を計ると共に、更らに殖民事業を盛にし、一方に於ては、日本海の貿易港を保護すると同時に、東洋貿易權を取得するに勉め、他方に於ては、

南北中米に殖民の奬勵をなすと共に、此に一大市場を設けて、大平洋上の覇權者たらざる可からず。英の史家シーレーは、英國の膨脹を論して云はく、吾人が亞米利加を占領したるは、其虛空に乘じたるが爲めにあらず、他國よりも多く、殖民者を輸送す可き船舶を有せし故にもあらず、固より亦他國の占領より横奪したるにもあらず、唯吾人は移殖の事業に於て、競爭者を有したり、或關係に於ては、吾人よりも一着を先じたる競爭者、即ち佛國を有したればなりと。縱ひ本邦に於ては、殖民上と定めたる競爭者なきも、將來國運の決戰場裡たる、大平洋上の商權獲得に於て、一大競爭者を有せり、那れよりも正さに一着を先じたる好敵手、合衆國を有せり。是れ吾人が深謝すべき天惠の一にして、亦將來心强く活動す可き所以也。縱ひトーマス、アルノルドが、歐米人種は、世界最後の歷史的人種なりと云ひけんも、國勢は常に定住なるものにあらず、其昔亞細亞に發したる文明は、歐州文明を啓發し、更らに米國に移轉し、再び亞細亞に向つて來復しつゝあり。而して今や、紀元以前に於ける世界の恩人たる、十五世紀に於ける中興の恩人たる、亞細亞人種にして、三度起つて、二十世紀に於ける世界の恩人たらんものは、我日本の外、他に何國の存す可きや、責任は重く、時運は向ひ來れり。吾人は敢て大言せす、唯望む、平和的膨脹を計れ、而して徐かに急げよ、深き水は靜かに流るゝにあらすや。

# 責任の觀念

## 日本社會の一大缺點

菅　緑　蔭

日本社會の現狀を以て、之を歐米先進諸國の實際に照し、事細かに之が比較を爲して、一々其缺點を數へ來らば、其箇條たる、甚だ多くして、殆ど際限なかる可しと雖も、而も吾人が今日に至り、特に日本人、隨て亦我社會一般の缺點として、第一に指摘せざる可からざる所のものは、日本人は未だ甚だ責任の觀念に乏しき事是なり。言ひ換ふれば、日本人は未だ其の自ら從事する所の業務に向つて甚だ不忠實なる事是なり。乞ふ吾人をして、己下少しく此點に就て、論究する所あらしめよ。

蓋し個人集つて社會を組織すると云ふ、其所謂社會なるものは、亦恰も個人其者の如きものありと云ふも可

なり。今夫れ近く吾人の一身に就て之を云はんに、吾人各自の身躰には、其全領土を支配するに、所謂精神なる主權者あり、以て一身の上位に居て、常に心身の萬機を主宰し、而して之を補佐するには、眼、耳、鼻、口の四局あり、四局各々其職責を異にして、互に相侵す事なし。例へば目は單に物を見て、聲を聞かず、耳は單に聲を聞て、香を嗅かず、鼻は單に香を嗅て、味を辨ぜず、最後に口は能く味を辨じ、亦能く物云ふを知つて、餘事に及ばざるが如きを初めとして、其他腹部の呼吸、消化、及び分配等の事を宰り、手の能く物を取り、足の能く遠近に往來するが如き、是れ實に吾人一身に於ける構造、組織の大畧なると同時に、社會に於ける萬般の事も、亦甚だ能く之に類するものあるを發見す可きなり。

然るに官と民とを問はず、朝と野とを論ぜず、我國今日の有樣は、果して人躰に於ける耳目鼻口等のものが、各々其職責を守りて、共に々々一身の安寧幸福に資する所あるが如き者ありと云ふ可きか。即ち今日上は政府の總理大臣各省の長官を初めとして、下は民間に於ける會社、銀行、學校、新聞社、其他大小一切の人事に當る人々に至る迄、果して能く各自其職責を重んじ、其職務に對して熱心忠實なると共に、自他互に相侵すの失態は之なきやと云ふに、吾人は事實大に其の然らざるものあるを信ずるものなり。

今少しく之を語らんに、例へば我日本を於ては、今日に於ても、尙彼の大工、左官等職人社會の如き、彼等は或は日を期し、或は月を約して、人に雇はれ、報酬を定めて、人の仕事を引受けながら、其職務に對しては、甚だ不忠實にして、或は茶を飲み、煙草を喫し、或は空談雜話の中に、貴重の時を費すが如きは、殆ど普通の事として、誰一人之を怪むものなきのみか、男女の奉公人、政府の役人、及び會社員、銀行員、扨は學校教員に至る迄、唯々表面形式的、或は一應申譯的の仕事は之れ爲さんも、眞に其職務を以て自己の天職の如く感じ、其職務の中自ら人間相當の樂地あるを發見するもの丶如きは、甚だ稀なりと云ふ。(甚しきは出勤先にて圍碁將棋を弄ぶものさへあり)况んや彼の政府の大臣、民間の社長、校長抔と云ふものをや。彼等は其地位高ければ、高き丈け、其經歷古ければ、古き丈け、益々無責任の舉動を演じ、或は又空威張の言行を敢てして、却て自ら傍聽に向つて得々たる者あるが如し。而して是れ豈政界に商界に、學校に家庭に、我

社會到る處として之なきはなきの弊風なると同時に、亦我日本社會に於ける一大缺點に非ずして何ぞや。吾人は信ず、此缺點にして今後漸次矯正されざる限りは、官紀振肅、冗費節減、外資輸入、學校增設、社會改良、公德養成、及び家庭改良等と云ふも、畢竟無益なり、即ち今日の急務は先づ此大缺點の一大改良にあることゝを。

之に反して、西洋諸國の人は如何と云ふに、彼の國人は地位の上下、職務の如何に論なく、各自能く其職責を重んじ、例へば官海に於て、長官、次官已下、諸多の役員は、各々其職權の範圍内に於て、事を爲し、啻に自ら其職務を忽にせざるのみならず、亦他の職權に立入りて、叨りに干渉左右の嫌あるなく、時としては政黨に新陳交代ありて、諸省の長官に進退あるも、其進退は唯長官のみに止まりて、其れより已下常置官吏は、固より之に預からず、依然其職務を執つて、今日は猶昨日の如しと云ふ。單に官海に於て然るのみならず、上は諸會社の役員より、下は日常の雇人、門番、小使、給仕等の輩に至る迄、各自其役前を守りて違はざるは、文明諸國の美風にして、併せて彼等諸國が政治に商業に、學問に技藝に、其他社會萬般の事物が、日に月に駸々進歩して止まざる所以なり。

加之、這般の事たる、元唯社會國家の大問題たるのみにあらずして、小にしては亦是れ人間成功の秘訣と云ふも可なり。故福澤先生、曾て余輩に語つて曰く、

昔から今日に至る迄、能く人を評して、彼の人はどうだ、此の人はこうだ抔と云ふも、其評論たる、實際に於ける事實の百分の一をも盡したるものに非ずして、其實の九十九迄は、終に人の耳目に觸るゝことを得ずして、唯俗に所謂椽の下の力持になるのだ。併しながら此椽の下の力持と云ふ事は、甚だ大切なのである、其次第を述ぶれば、例へば茲に人あり、其人今や人才を得て何か大に之に任ぜんとする其場合に當り、被撰者の人物如何を知るの法は、其外面の修飾は强て之を問ふの必要なく、寧ろ深く其内部、即ち所謂其人の椽の下を探究するのが、一番近道である。何故なれば此椽の下、即ち裏面の行狀こそ、最も能く其人の眞價を定むるに足るが故である。即ち右の次第であるから、人、就中今日の青年輩が、人の見ず知らざる其時に於ても、靜かに勉强し、辛苦すると云ふ事は甚だ必要である、決して無益でないのみか、古來人の信用を得て、大に世に用ひられ

たる人は、十中八九皆此法に依つて成功したのである」と。

箇單なる此一話、亦以て「職務に忠實」なる僅に五文字の、如何に深長なる意味あるかを察す可きなり。

之を要するに、人の職業に於けるは、恰も家の大地に於けるが如く吾人は、之に依て活き、亦恰も耳目鼻口の身体に於けるが如く、吾人は之に依て以て社會に盡し、國家に報ふる事を得るのみならず、亦實に各自の健康を保ち、品行を保ち、更に亦智識を進むる所以の道なるを知らば、一身の爲、國家の爲、吾人は須く其の自ら從事する所の職務に向つて忠實ならざる可からず。然るに、前述せるが如く、我日本の現狀、未だ大に其の然らざるものあるは、吾人の甚だ遺憾とする所。是れ吾人が聊か茲に所感を記し、敢て廣く世人の贊同を求むる所以なり。



# 海外新潮

## 海外大勢

### 日本と露西亞

ニコライ氏の日露同盟觀

「ヤポーニア、イ、ロシア」即ち「日本と露西亞」なる一書、露國に行はる、著者はエピースコープ（大僧正）ニコライ、即ち我が駿河臺の日本希臘教主宰の手になれるもの、彼は奈何に日本を觀察せるか、試みに之を讀むに、日本の歴史、日本人の性情、其政治思想、宗教感化、及び今日の文明を致せる源因等説來て精細、流石に日本を了解せる氏の筆たるを感ぜしむ、思ふに氏は此書に依て日本の長所美所のみを本國人に知らしめんとせしものならん、其の露國同盟論の如きは淺薄平凡を免れず。

劈頭日本の新文明を以て「適當の年齢に達したる嗣子が親の遺産を讓り受けたるが如し、空拳にて他國民の辛苦に成れる文明を讓り受けたり、然れども之を讓り受くるには適當の歴史と素要無るべからず」と、喝破し、神武以來の歴史を説き、日本には希臘羅馬の如き奴隷制の無かりし事、他國の侵略を受けざりし事等が、國民の自賴心等を陶冶せる事を述べ、佛教と儒教を日本化せることを述べて曰く

日本は他國宗教の長所を採れり

若し夫れ佛教を消化せざりしならば日本人は恐くは事業に冷淡無感覺

なる印度人に化成せられしなるべし、若し夫れ儒教に耽溺せば、日本人は想ふに懦弱昏鈍、昏昧なる支那人に髣髴すべし、當時日本固有の神教徒よりこれら外教没入の狀を見るときは、其の缺急なること善走のアヒルレス（希臘の有名なる善走者、猶ほ支那にて飛廉と云ふがごとし）が熟路、坦道に就て疾走するの想ありしならん、而るに日本人は其の佛教徒たると儒教徒たるとを問はず、外教の勢力此くのごとく放縦なるに拘らず、毅然として卓立し從來、固守確執する所の日本的精神を捨てざるなり、謂ふ所の「ヤマト、タマシ」は依然として日本人の脳裏を離れず、善く佛教と儒教の教義を取捨折衷するを得て、苟も國民に利ありと認むるものは之を斟酌採擇したりしかば、實に自家精神の新鮮なる作用を失はず、蓋し日本に於て佛教の數派に分れ、或は佛教の儒教及び神教と相ひ混ぜるを視るときは少なくも日本人が此の關係に於て靈活なる日本的精神を運用するの意を見るに足るべし、然りと雖も佛教は異教中の最も深遠なるものにして、而して儒教は道德哲學中の最も高尚なるものたるは亦之を記臆せざるべからず、故に一方より言へば日本人が仁愛、孝悌、方正、謙譲等の德性を涵養自得したるは職として此の二教に左右せられたるに由らずんばあらず、一視同仁、貧富平等の思想を養成したるが如きは佛教の然らしむる所、溫柔恭敬の擧止を薫陶せられたるは儒教の助くる所、特に其の智育に於ても佛儒の二教與つて大いに力あり。

と、これより華族の制度、士族の現狀、各國との關係、日本人が採長補短の實例等を擧げて、露國との關係に說き及ぼして曰く

## 日露の親交ならざる可らざる所以

總て日本に於て企圖せらるゝ事業は固より締盟各國に利益あるべけれども、我が露西亞は絶東に於て日本と國境を犬牙相ひ接し居れば、今後の交通上其の便益を得ること特に多かるべし、日本と露西亞はなほ發達幼稚にして氣力同じく新鮮なり、將來世界の歴史上に於て二國共に尤も有爲の企望なかるべからず、日露は地形上、何事業を起こすも將來必ず相ひ扶持し、相ひ幇助して後始めて兩國を利益を完全にし得べし、敢て睽離孤立、其の心を貳にし其力を分つべからず

日本は海國なり、想ふに此れ將來の英國ならん、日本は邦土の地積狹少なるに比し人口の衆多なること比類少なし、而して國民の氣質剛毅英拔なれば將來其の工業を發達し、商業を增進するや知るべきのみ、而して四面みな海洋に環繞せらるゝにより、船舶を製し植民地を開き、以て本國の利益に備へざるべからず、左れば日本は英國を始めとし他の瀕海諸強國と競爭し敢て彼等に一籌を輸し彼等に後れを取るを欲せざるべし、

露西亞は之に反して海上貿易も殖民地もなき大陸國なり、左れば自國の富貨を生産し内地の工業を發達するため、將來幾多の勤勞を要すべきや實に容易ならざるなり、特に海外貿易及び殖民開發に關しては幾百年を經て初めて英國と相ひ上下し相ひ歩驟すべきや實に言ひやすからざるなり、我が露西亞と日本との間に交際親密なるときは、彼我の長短を交換し得て雙方の利益は計るべからざらん、日露彼我の間は將來何事にも同心協力して以て宇内の大勢に當らざるべからず、見よ我が露西亞と英吉利とは國民の意氣、氷炭相ひ容れず、終始相反目して仇敵視し居れり、一旦隙を開くことあらば兩國の間に邦土の存亡に關する鏖戰を交ゆるの已むを得ざるに至らん、又我が露西亞の墺地利に於るや彼はカトリック教の精神を以て我はグリーキ教の心意を以て相互に分離乖背し永く相ひ投合調和することなければ是れ亦旗鼓相見ゆるの時あらん、我が露西亞の英墺兩國に對する關係夫れ是くのごと

し、翻て英國の日本に對する關係を見よ、英國人が日本人に恩惠を布き、利益を與へたることは學術上、貿易上固より淺少にあらず、而れとも英人は到底最後まで日本人の歡心を得ること能はざるなり、何ぞや、夫れ人類の此の世界に處し交誼を通ずるや外形、虛飾、手を握り肩を拍ち笑語懽娯の以て能くする所にあらず、乃ち苦樂相ひ共にし、憂患相ひ分ち恩愛信義を以て之を終始渝らざるに至りて始めて能く交を厚ふし永く祉福を享有すべきなり、左れば一個人の間に於ても一國民の間に於ても心交を以てするに非れば永く其恩愛を保つべからざるや、蓋し疑を容るべからず、英國は此點に於て欠くるところあり、露國は大に此點に注意せざるべからず、即ち布教說教の職務を帶びて日本に露國正教を宣布し日本と心交を堅ふせんとする傳教師は亦重要なる政事上の勢力を有すと云ふべし、

終りに自家の立脚地より斷案を下して、日本には羅馬教新教皆適せず、日本人の氣質は我正教を布くに適せり、此正教の廣布は日本の福祉を增進し日露の關係を親密ならしむる唯一のものなりと結言せり。



日露の今日

（米國シカゴクロニクル抄出）

## 英領印度の防禦力

英國陸軍の制度に關し、同國の議會新聞紙を初め其改善を唱へ不備を非難するもの益す多く、南亞北淸の實例は列國の侮慢を受くるに至れり、而して其非難は獨り本國の陸軍のみならず、英領印度に及び、其防禦力を危むもの多し、「セント、ペテロスブルヘル、ツァイツング」は獨逸軍人の批評せるもの揭げて曰く

若し今日勢力有る外國侵入軍の印度を攻むることあらんか、印度は全く其防禦力を有せざるなり、印度に於ける歲出豫算、四分の一は軍事費なり、然れども步兵も騎兵も悉く古式の銃を手にし、九個の騎兵聯隊の如き其役立つもの眞に一部に過ぎず、砲兵は全部其用を成さず、山砲野砲皆これ昔の蒼なるもの、只これ軍隊の粧飾に過ぎず、砲車の重き爲め象を以て辛ふじて運搬する如き又奇ならずや、プンジャッブ及びボンベーの兵士はやゝ間に合ふものなりしも北淸遠征の爲に弱められ、カラチ、ラングーン、マドラス、カルカッタの各軍隊恐るゝに足るもの一箇所もなく、モーゼル銃の古きを以て形式的に武裝せるのみ、ラングーン、カルカッタの海上防禦は一時間の抵抗にも堪へず、ボンベー、カラチ、は外國軍艦は何の抵抗をも受けずして平然侵入し得べく、岸上の砲は船に達せず艦上の砲は容易に市街の要部を擊碎し得るなり、之を要するに印度は全く防禦力無き國なり、

「ロンドンデーリーニユース」は印度に於ける軍制を非難して曰く

英國は印度に於て露國の南侵に對し、北方山地の反亂に對し、內地の一揆、宗教上の紛擾に對し、之を制御するが爲に七万六千の英兵と十

四万三千の土兵を配置す。これが爲めに年々一億六千万圓を費やせり、然れども見來て其組織根本的に不良たるものあり現時南亞と北清の戰爭、錫蘭、新嘉坡、海峽殖民地の護衞として三百万の土兵を印度より派遣せり、土人の租稅に依て土人自己國土の守備の爲に供せられたる兵士を恒に他國の爲のみに供す、これらの兵士は印度内地にあるも南亞北清にあるも印度の安寧秩序には毫も増減無しとすれば、印度土人は自己の膏血を絞りて無用の兵士を養ひ居るなり、年々饑饉に苦しめられ、惡疫に苦しめられ、重きが上に重き負擔を課せられて、默々たるの止むなしとは又憐むべからずや、要するに現時の制度は印度の防禦にしては、不完全極まれるものなり、其人數、其兵器、其配置、其目的、皆印度の防禦として之を見れば何の價もなきなり。

海外雜纂

# 南極氷中の二千哩（三）

## 南極冬期の初經驗、最近の南極冒險譚

先きに云へる如き極地衰弱病の第一の源因となりし、纎維有る生まの食物を欲する若しみは、幸ひに鵝鴟と海豹を獲て料理することに依て其苦痛の幾分を減ぜり、此二物の肉は如何なる調理法に依るも、到底人間の口に上ぼし得べきものに非れども、此場合はこれにても食はざれば他に療法無きなり、其臭氣と其不味は甚だ云ひ顯はすに難きも、先づ大口魚の肝油に五六個月間牛肉を漬け置き其れを鯨油にて揚げたるものと思はば餘り違ひ無き想像ならん、

七月一日明るき橙色の雲、北方の地平線上に棚引くと同時に、非常なる強風あり、雪又大に降り、船外の仕事はなし能はざりし、

仝四日、米國獨立の紀念なりとて船長は予の爲に特に祝杯を舉げ、船中へ出來得る限りの馳走をなせり、一行各自本國の祝日や自己の誕生日にはいつも船長の注意にてかゝる催ほしをなし、變化無き寂しき永き夜を幾分にても慰めんとせるなり、

一千七百時の永夜中、天氣の變化とては別にこれ無く、北方地平線に近く顯はるゝ星輝も、猶の時間には其數と其光りを減じ、南極紅は北極紅に比して其光大に薄きも、一年の中四五七八の四個月は恒に之を見られ得べし、一種の黄色氷雪に映じて云ふべからざる悲愴の景を示し、飄渺の如く亂雲の如き光塊は其極紅の上方、又は下方に毎秒其光り其形を變化して浮動せる樣、又奇觀なり、

永夜中我々の樂は只月光に乘じて氷上の遠足を試むることにて、鵝鴟を生擒するはいつも月の光りに依れり、船を距る極めて遠きところにポストを建て其上に燈火を置き、遠くより見れば星の如くに思はしめて、數日間方位の觀察者を惑はしめし如き惡戲も時に取ての一興なりき、

### 再び日光を拜す

永き夜の終りに近づかんとする頃、北方の天日中に微白を呈し來れり、それより日々今日こそは太陽を見るを得べしと寧ろ煩悶に堪へざりき、微白の空は毎日見られ得るも太陽は容易に出ず、一週を過ぎ、二週を過ぎ、其三週目則ち七月二十三日と二十四日の日中に、遙か彼方の氷丘上故國の空に當て、鈍き火の如き塊の通過するを見たり、然れどもこれまた眞の太陽にはあらず、踰へて二十五日初めて眞の太陽を瞥見するを得たり、僅に數秒時青白くして光も熱も無き太陽を見たるに過ぎざるも、

一行此時の雀躍は又筆紙の景容し得べきに非ず、これより日一日太陽の顯はるゝ時間長くなり、八、九、十の三月を超て、十一月十六日には全く夜無き永晝の時期となれり、我々の生氣太陽の長く其面を顯はすに比例して恢復し、又永夜中の如き悲むべき現象を見ざるに至れり、

十月六日の夜は寒暑針零下四十五、五、に降下し、此行の遭遇せる最低の温度を示せり

## 氷圍を脱せんとする最後の奮闘

永晝の時期となるに從ひ氷陸は所々に裂目を生じ、已に鯨魚の侵入し來るを見る、此時期を利して氷圍を脱せずんば絶望の外無きなり、種々なる出船の準備や、食慾を滿たす爲め鯨魚の捕獲や、我々の働きは實に目覺ましく、全船新しき希望と勇氣を以て滿たされたるの觀あり、

我々の豫算は十一月の終を以て此重圍を脱する最良時期と考へ、此時ペルマー群島の外邊に突出せんものと計畫せり、太陽は漸次雪を融かし、氷丘を低め、氷地を裂き、これまで氷の大陸たりし者今は方二哩計りの氷田のみとなり、所々湖水の如きものすら生ずるに至り、ベルヂカ號も數哩航行をなし得るまでに至れり、然れども只これ堅く封ぜられたるものがやゝ緩められたるに過ぎず、氷は猶遠捲きして我々の脱出を防禦せり、通路を求めんとせる有ゆる搜索と道路の自然に開かるゝ時期を待つも遂に得ず、豫期せし十一月も空しく過ぎ、十二月も又過ぎ、クリスマスも新年も只空く煩悶の裡に終れり、我々を遠捲せる氷の厚さ薄き處にて五呎有り、其厚きところは二十五呎を有す、如何にして我々は之を脱し得べきか、



第一の作戰計畫は綿火藥を以て氷を破裂せしむることにあり、ダイナマイトよりも強きToniteを多く用意せるを以て、之を實行したるも温度の低き極地にては此企ては全く無効なり、少しも爆發せずして恰も兒戯の煙火を見る如き結果を生ぜり、

茲に於て第二の計畫を考へ、先づ其の爆發せしめんとする附近の温度を高めて然る後にせんとし、石炭や其他の燃料にて零下五度まで温度を高むるを得て、爆發せしめたるに、爆發はなし得るも只辛ふじて氷田の中に圓形の穴を作り得るに過ぎず、出入通路を開くが如き大爆發は到底はなし能はず、

種々考案の後、第三の作戰計畫は太陽の光熱を利用せんとしたり、則ち黒き物体は白雪に比して光熱を吸收し保持すること大なるを以て、氷上の雪を除きて一の溝を作り、其中に水を流し灰其他黒き廢物を混じて光熱を多く保持し、之に依て其溝の部分を他よりも薄き氷となし、船を以て漸々破り進まんとの計畫なり、こは幾分の成功をなしたるも、此の時は一月の初旬太陽已に光熱の頂上時期を過ぎ、これ亦成功をなすを得ず、

我々は茲に最後の大決心を以て第四の方法に從事せり、これ素より成功すべしとは思はず、然れども徒らに死を待たんよりは萬一を僥倖するに若かざればなり、其計畫は氷の圍最も狹き部分則ち氷の地峽に運河を開鑿するなり、船を通過するに足るべき通路を鋸以て切り開かんとするな

り、最も狹き部分にて二千四百呎の距離に、厚さ五呎以上の氷を十六人の船員を以て（二人は死し一人は病む）切り開かんとす、普通の氷切りとして携へたる六提の鋸は短くして用をなさす、種々に工夫して之を用ひ、加ふるに丁字鍬、鋤等を以てし、十六人を三部に分ち、八時間づゝの交代とし夜も晝も根限り精限り力を盡したりしに、望み無く見えし大工事も死力を出せる熱心の度や更に强し、起工より五週間三十五日目に到て、遂に成功の日を見るを得、二月の十四日辛く此重圍を脱するを得たり、

何等無情の事ぞ、辛く此重圍を脱したる我々は、其後二百四十哩を航行の後、再び前路の閉塞さるゝを見更に一個月の日子を絶望の裡に空過せり、

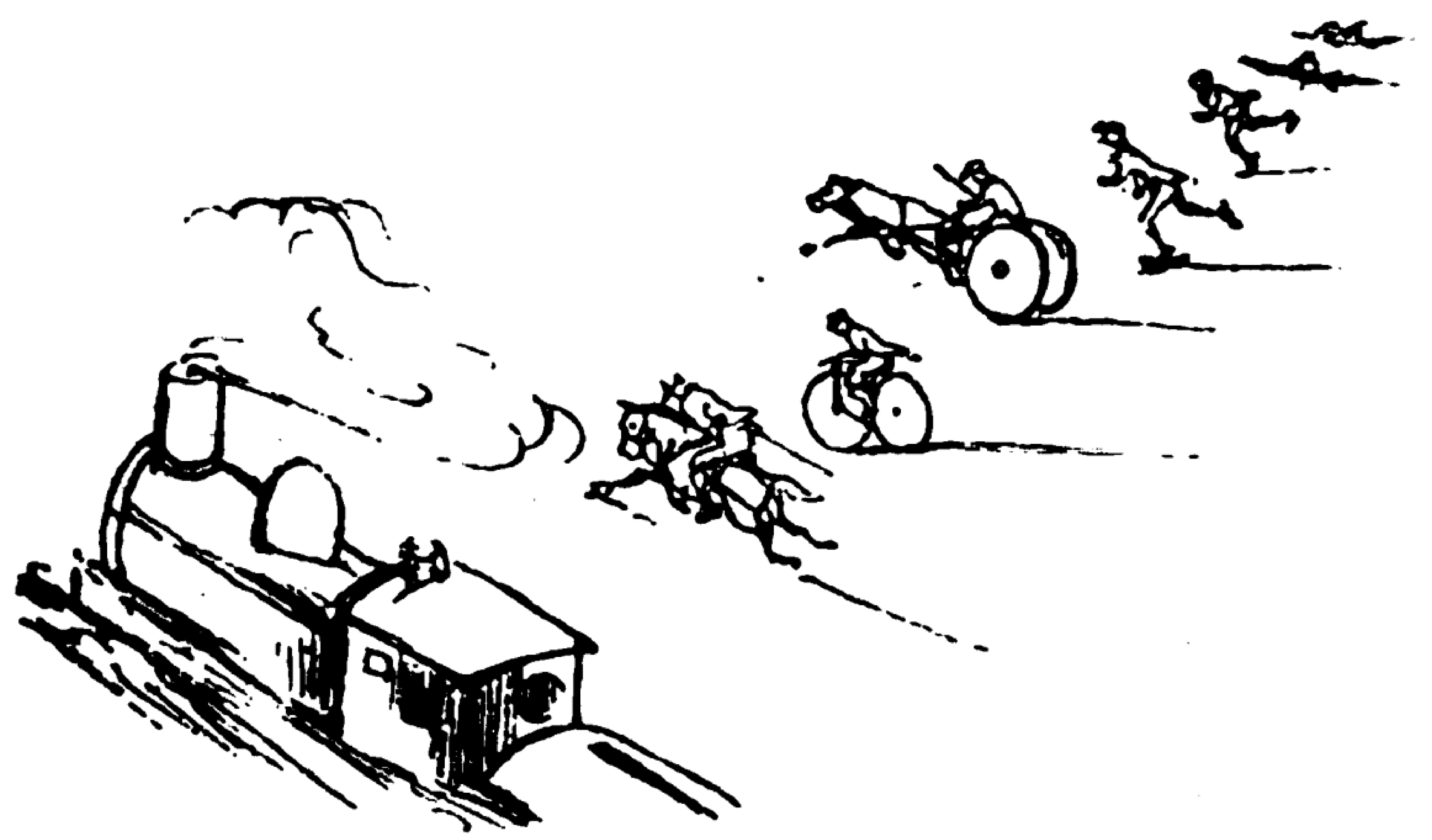
吁天祐、！一日南方の强風前路の氷山を推し、動搖を初め、一條の通路開かれ我々は全速力を以て南太平洋に接續せる完全なる海洋中に突出し玆に全く氷に打ち克つことを得たり、實にこれ三月の十四日なり、

## 歸　航

最も近き陸はプンタアレナなるを以て其れに向て發し玆に歸航の途に就けり、

我々が氷の圍を脱せしは西經百三度南緯七十度四十五分にして、漂流せしは西經八十度と百三度南緯七十度と七十二度の間にあり、三四の二ヶ月は西經九十二度二十五分（四月の二十五日）まで西方に流れ、五月より九月までは再び來路に漂ひ、則ち初めは西方に後は東方に流されたるなり、最南は三月の三十一日、南緯七十一度三十六分五秒西經八十七度三十三分三十秒にして、從來の南極探檢中最も南方に進みたるものなり、

此行、氣象生物航海有ゆる學術に新發見を齎らし、新材料を供したること實に夥し、特にラコンテ氏が從來學者の定めたる地よりマグチチックポールが二百哩東方にあるを發見し、又は從來の探檢者が陸地と思ひ種々の名を附したるところが悉く氷田にして陸地に非ざりしを確めたるが如きは、其の最も大なるものなり、學術界に貢獻せる此行の結果は專門の著書に讓り、玆に此紀行を擧る　（完）



# 世界雜話

### 雲背の蒸滊船

船を空中にやるとは未だ耳明せられず、然れども海上二哩我富士山頂と同高度に蒸滊船の往復するを見るは世界只一個處有り、則ち南亞米利加のペリユーとボリビヤ兩國間にあるチヽカヽ湖これなり、アンデス高峰の間、長さ百二十哩幅六十哩の湖水にして、九個の河流を受けて水深一千呎有り、六百噸の蒸滊船貨物乘客を載せて往復す、

### 三分間の速力比較

從來の競走中速力最も早かりし各種のものを集めて三分時間の速力を表に示せば左の如し

| | | |
|---|---|---|
| 一 | 水泳 | 二百五十一碼（一ヤード我三尺一分餘） |
| 二 | 漕舟 | 八百三十四碼 |
| 三 | 競走 | 一千二百七十四碼 |

四　氷滑り　一千九百二十碼
五　普通の馬　二千五百二十碼
六　自轉車　二千八百四十碼
七　競馬用の馬　三千零八十碼
八　滊車の最强速力　五哩

三年前英國のニューキャッスルに於て、一人にて水上四分一哩を漕ぎ、直ちに陸に上りて自轉車を同四分の一哩走らせ、亦直ちに水に入りて四百四十碼を泳ぎ、以上總てを三十分間になし得たるものあり。

### 世界の盲目

前號の本欄「新知識の專賣店」中、盲目の多き國を露國とし、千八百九十六年二十万の盲目あることを云へり、更に新しき統計にて同國盲目者の實數十九万二千人なることを知れり、則ち露帝は其國民五百人に就て一人づゝ盲目の臣下を有せらるゝの割合なり、全歐州の盲目者は三十万二千人、佛英獨伊西の五國は目明き千人に盲目一人の割合なり、統計學者は世界全躰の盲目者を合算して二百万人と算す

### 新らしかりし時發明せられし時

| | | | |
|---|---|---|---|
| 留針 | 紀元一四五〇年 | 縫針 | 一五四五年 |
| 燐寸 | 一八二九 | 新聞紙 | 一四九四 |
| 石炭(燃料として) | 一八三四 | 金貨 | 紀元前二〇六 |
| 鉛筆 | 紀元一五九四 | 鐵道 | 一八三〇 |
| 窓硝子 | 六九四 | 郵便切手 | 一八四〇 |
| 石脳油(歐州へ輸入) | 一八二六 | 電燈 | 一八七四 |
| 海上保險 | 五三三 | 寫眞 | 一八〇二 |
| 紙(支那にて) | 紀元前二二〇 | 煙草(英國へ輸入) | 一五八三 |
| 瓦斯燈 | 一七九二 | 聖書(英語へ) | 一五二四 |

### 六百年前の英國民

今は世界文明の中心と誇稱する國民も、僅に六百年前に溯ぼれば世界の最野蠻國なりし、砂糖無き國なりし、茶無き國なりし、珈琲無き國なりし、年の大部分野菜の食料無き國なりし、人間の不潔なる爲め皮膚病を以て有名なる國なりし、綿を原料とせるもの皆無なる國なりし婦人の容貌醜くして男子と區別出來ざる國なりし、惡婆の多くして憐憫を知らず、恥辱を知らず、悔恨を知らず、野獸と等しき行爲をなす國なりし、人民の生活に愉快無く希望無く、暗黑と零落を以て滿されたる國なりし、人間を相互に殺すの外他に殺すの動物無き國たりし。(Augustus Jessopp.)

### 歐州の鐵道

千八百九十九年(三十二年)の現在左の如し

| | | | |
|---|---|---|---|
| 獨逸 | 四萬〇〇六十九哩 | 露西亞 | 三萬〇九百〇九哩 |
| 佛蘭西 | 二萬六千六百九十九哩 | 澳匈國 | 二萬三千三百九十六哩 |
| 英吉利 | 二萬一千九百十五哩 | 伊太利 | 九千八百三十二哩 |
| 西班牙 | 八千四百四十六哩 | 瑞典 | 七千〇十二哩 |
| 白耳義 | 三千九百三十七哩 | 瑞西 | 二千三百九十三哩 |
| ルーマニヤ | 一千九百五十七哩 | 丁抹 | 一千九百二十五哩 |
| 土耳古及ブルガリヤ | 一千九百十二哩 | 和蘭 | 一千七百二十四哩 |

## 美人畫の泰斗コレリッヂ孃

何れの世か美人畫なからんや、美人は時と場所とに係はらず、凡て人類たるものゝ理想の一なり、時代によりて容貌の美とすべき點は異なり來れども、凡ての時代に於て、人類は理想的美人を夢みつゝあるものなり、而してそのある時代に於ける理想的美人は、その時代の畫工の筆を假りて、畫かるゝものにして、古來の美人畫を陳列したらんには、吾人は理

想的美人の時代と共に如何に變遷し來れるかを知るに足らん、ホルバインスも、バンダイクも、リヽーも、ゲンスボローも、ロムニーも、共に當時の理想的美人を描きて吾人に遺したり、而してサー、ジョン、ミレー。リユーク、フイルド。スチユワルト、ウオートレイ。サージヤント。カロルス、ヂユラン。アンヂリ等の筆に成りたる美人畫によりては、吾時代の想理的美人は、后昆に傳はり行くを得るものなり、今日歐州の風習を察するに、富裕家とか、貴族とか呼はるゝ人は、已が妻女をして、畫工の前に坐せしめ、その肖像を得て、以て客室又は接待室を裝飾し、到る處此種の美人畫は多けれども、こは美人畫と云ふべからず、寧ろ「婦女子畫」とでも命名すきべきものなれ、その時代を代表すべき所謂美人畫とは、當代にかくれなき名聲を有する美人の肖像か、若しくは畫工が想像より成る完全無缺の美人を畫ける所にあり、

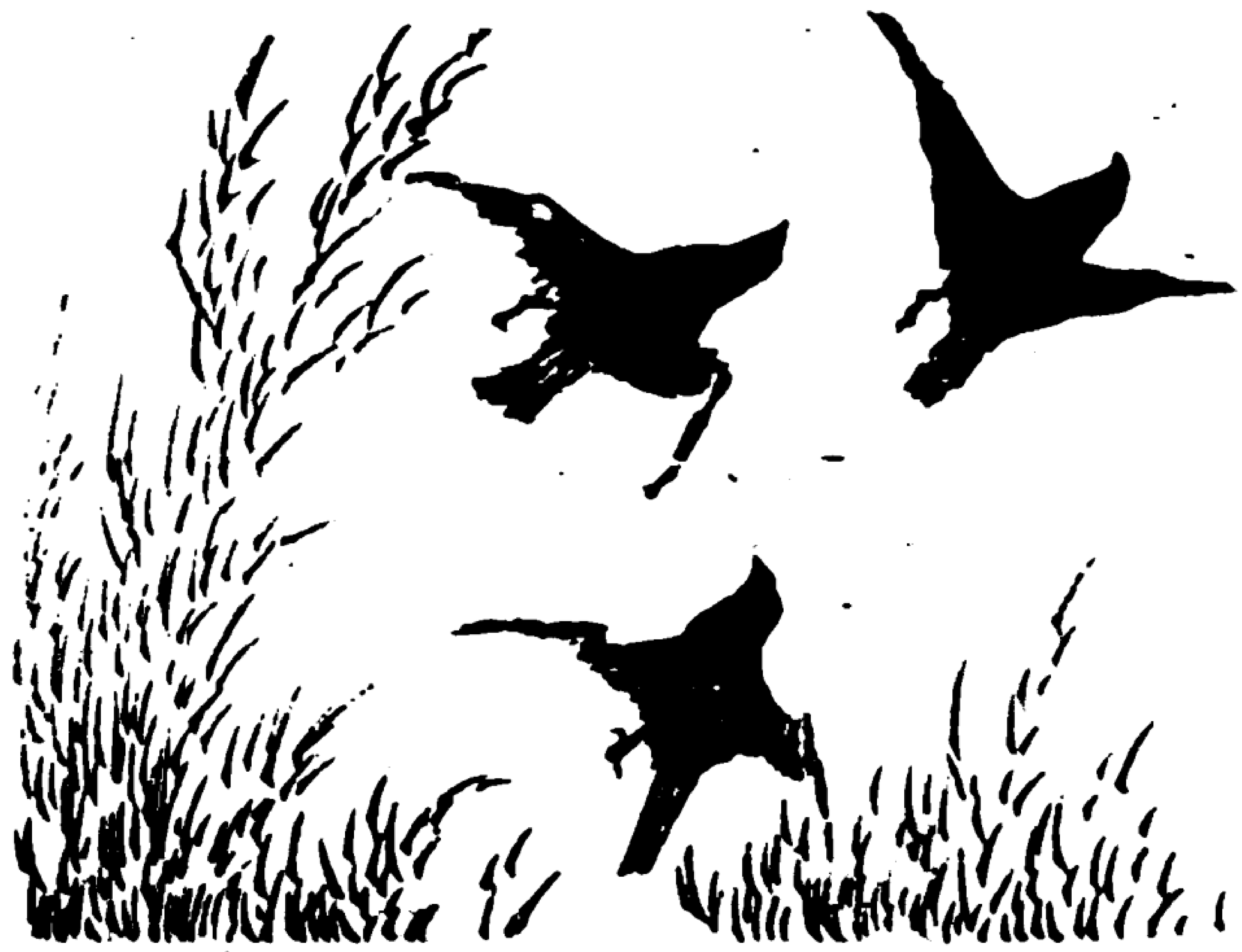
此美人畫に尤も聞え高き畫工は、モード、コレリツヂ孃なりとす、孃幼にしてスラード美術學校に入りて研鑽する所あり、時の教授ルグロ氏は名聲嘖々たる美術家なりければ、孃の得る所も亦大なるものありき、孃已に技術進みて、名家の列に入らんとするの希望ありければ、進んで美術の淵叢ともいふべき巴里に入り、尙もその業を大成せんとするの志あり、然れども諸種の障礙は孃を檢束してその志を遂くるに至らしめず、曾々巴里の名家テオドール、ルーセル氏の來りて、倫敦に住するものあり、孃就て學ぶの好機を得たり、孃が特に彩色に妙にして、陰影に纎巧なるは、全くルーセル薰陶の結果なりとは、孃自から自白する所なり、孃の畫く所は、最も輕く且つ柔かにして、而かも天眞に迫る所あり、孃は最も熱心なる畫工にしてその成功も亦遂なり、孃嘗て人に語りて曰く、「畫題に坐する人の倦怠を來すは、尤も宜しからず、時々休息せしむるに非れば、早くその輪廓を寫し取るを必要とす、余は幸に天賦の才といふには非れども、幼よりして、物の肖像を早く寫し取る事に長せり、此性質は鮮からず、余の成功を助けたるものなり」云々、

從來孃はデボンシアのオタリー、セント、メーリー、に住し、靜に居り、閑に處して、執筆に從事せしも、漸く邊土の不便を感じて、倫敦にその居を移し、ラウンデス區、ウイリアム街の、孃が勉强室（スタディオー）は實に美麗を極めたり、孃は午前の新鮮なる空氣を呼吸しつゝ、執筆し、午后はかつて業務を執らず、孃は主として小兒及美人の肖像を專門とし、自から謂らく「肖像畫の畫題は小兒に非れは婦人なるべし、男子は題目となる能はず」と、然れとも孃の畫く所の男子の肖像も、亦有名なるもの多し、日ハンチン公、日デヴオン伯、日サー、ヘンリー、ロープス、等是なり、然れともその尤も得意とする所は、美人畫なり、孃の作は、グロスヴエナー、ガレリー、グラフトン、ガレリー。及ニユーガレリー等の陳列場にて見らるゝを得といへども、その傑作中の傑作ともいふべきものは、私人の秘藏となり居りて、人目に觸るゝこと稀なり、

孃畫き了りて、心に適せるもの成るときは、之を手ばなすことを惜むといへども、既に前約ありて之を與へさるべからざる場合あり、世にこれほど悲しきことはなしとは、孃が平生の口癖なり、

孃が作中有名なるは、ミス、ムリエル、ウ井ルソン。ミツセス、エリントン。ミツセス、アーサー、ノーバス。ミス、サラ、ブルツク。ミツセス、ミツトフオルド。ミツセス、フワンク、ローソン。レツデイ、メーリー、フツパー。オノラブル、ミツヒス、レツチル、等を始め、數ふるに遑あらさるべし、共にその血色のよく畫かれ、活氣を帶ひたる所は、特に人の賞讃を博する所なり、バーナード氏の令娘モードの肖像は、（挿畫畧す）最もよく少女の性格を畫きしものといふべく、エラリーン、テリス孃の肖像は、グラフトン、ガレリー及演劇展覽會に出品せられて、

高評を得たる所とす、殊に近來、極少肖像畫を畫くに努め、象牙等に、小やかに畫きて、戀人の贈り物などに便す、その纖美且精巧なること、驚くに餘りありと、



# 雜録

## 南村閑話

### 島田南村翁の談話

桃華

▲日下部鳴鶴曾て翁に話して云ふ、予は彦根藩足輕の組頭なり、同役に某(名を逸す)と云へるあり、生來酒を嗜むこと甚し、一朝翻然志を改めて曰く、一伎一藝を嗜むこと酒を嗜むが如くんば何事か成らざらんと、以來專心小銃を習ふ、其酒を飲まんことを思ふ時は直ちに走つて銃を手にし試撃す、かくの如きこと三年、習ひ性となりて非常に射撃に熱心なる男となれり、一夜深更、寒念佛の聲を聞き豁然として銃撃に就て覺るところあり、以後百發百中決して誤らず、翌年正月、藩の打初の式に出頭して曰く、それがしも久しく何の御奉公も仕らざりしが以後は小銃にて一かどの御奉公

を中上げんと、衆皆之を意とせず、只嗤笑するのみ、其之を試むるに至て悉く的中衆を愕かしむ、最後の最も六ヶ敷き三回射撃に臨み、初發監視の役人星と呼び、第二發又星と大呼す、第三發に至て役人星と云はず、丸は何處へかそれたるが如し、某堅く信じて曰く、それがしの丸にて的中せざる理由なし、これ必ず第二發の的中せる穴と同一の穴に入りたるのみと、之を撿すれば果して二丸相重なれり、

▲此男常に曰く、寒念佛の聲にて不圖射擊の奥妙を窮めたる後は、的を狙ふに距離と云ふもの全く無くなれり、前方の的狙ふ時直ちに來て銃口に在り、的中せざらんとするも得ず、と

▲山梨平太夫法を白隱に聞き、緣薄ければ三大阿僧祇却を費やし、緣厚ければ一旦豁然として悟り得べしと云ふに至て曰く、是れ試むべしと、斷食苦思七晝夜、忽然として大悟す、其時の摸樣を語りて云ふ、以前の世界とは全く別世界の思有りと、楞嚴經に曰く、「還來見世間猶如夢中事」と一旦豁然の時の心事は誠に此の如くならん

▲天保十五年辰年、十八歳(翁)の時、初めて京都に鳩居堂主人を訪ふ、其頃の文人畫家名僧にて京都に遊ぶもの鳩居堂を訪はざるなし、賴山陽の如き幾度か其窮迫を同主人に救はれたり、有名なる鳩居堂記も其頃山陽か同主人の爲に物したるなり、今より三代前の主人にて則ち同堂の元祖なり、其時同主人の談話に「何んでも人は山を張らねばならぬ、私の如きは香具屋の久兵衞とて抹香計り賣る小商人(こあきんど)なりしも、これでは生涯頭の擧がることなしと思ひ、大に山を張り、支那の名香を眞似てヤット今の身代に成功しました、人間の成業悉くこれ山、成功さへすれば、人は山とは云はぬものなり、只注意すべきは其山を張るは眞面目て無くてはならぬ、命を捨てゝかゝらねばならぬ、宛も敵討ちの如し、要は敵の首を取るにあり、敵さへ手中に入らば自身は手傷の爲に同じく倒れても遺憾に非ず、事業さへ成功せば身は倒れても本望なりとの意氣込がなければ成功せず、と

▲又言ふ土臺のしつかりした事業を仕上ぐるには、他人へ半文の迷惑を掛けてもならずと、全主人は一生の中に牛馬の殺されんとする者を代て購ひ餘命を完ふせしめたること一万頭に及び、晩年竹生島にて放牛馬一万頭の大供養を行へり、

▲世人皆貧を恐れて借金を恐れず、故に終身回復すべからざる苦痛と恥辱を受く、借金を恐れて貧を恐れざれば横行濶歩、天下を叱咤するの時も出で來るべし、人は容易に餓死の出來るものに非ず如何に貧なればとて食物の無きまでには至らぬものなり、

▲松蔭居常人に告けて曰く、齡十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、此七年間が學問に最も大切なる時期なり、此時に學問の基礎出來ざりしものは終身ダメなり、此年齡以後の學問は其基礎に向て付け加へをなし、建て増しをなすのみと、

▲松陰の伯母に當る人より聞けり、彼の學問好きは非常のものにて寢食を忘るゝこと屢有り、伯母なる人彼れの蓬髮を理せんと云へば、いつも明日にと云て之に應せず、則ち彼が睡眠中を窺ひ竊かに元結を切り置くを常とせり、かくすれば松蔭も仕方無く「伯母樣髮を結ふて下され」とて常に髮を握りながら來れりと

▲大久保嘗て語りて曰く、予がかく參議となりて王政に參するとは決して豫期せざりし事なり、少時京師に上り、後又江戸に遊び、彼此對照して朝庭の不振を嘆じ幕府の盛大に慨しセメテ將軍を四人位とし天子の直轄たらしめたしとは其時の念願なりき、計らざりき、擧國一王政の今日を見んとは、思ふに木戸の如きも今日有るべしとは思ひ居らざりしならん、若し思ひ居しとすれば予は彼の先見に服せざる能はずと、

▲大久保又曰く、維新大業の完成は創業の人間が生存せる間は出來難し、

▲維新當時の志士と云ふものは大多數、面白半分、只愉快を買ふ爲に騷げる浮浪の徒のみ、彼等の大義名分呼はりこそ片腹痛けれ、自分の子供が病氣になつた時でも其親は心配に堪へず、飯も甘からず、仕事も手に付かぬものなり、至情は皆此の如し、眞成に國家を憂ふ

るものが、國事を靑樓騷歌の間に議するなどはホントーに國事が心配なれば出來たものに非ず、

▲何事も實地練習に非れば上達せず、昔し播州明石に一の問屋商人有り、此男公事訴訟の上手にて訴訟事の有る度此男が關係して負けたと云ふことなし、九州の船主にて此男と取引きせる者、之を聞て是非公事に勝つ秘傳を傳授して貰ひたしと云ふ、件の男問ふたとて返辭の出來るものに非ずとて笑て取合はず、其翌日件の男船主に向け十日間金子五十兩の立代を賴み、期限來れども返濟せず、船主終に怒て之を訴へたり、代官者より出頭の差紙來りし時、件の男船主を訪ひ訴訟沙汰にせるを恨み、散々に惡口し、代官所よりの差紙を取り出して、かゝるものゝ來るは我家の耻なりと寸駄々々に引裂き、代官所へなどは決して出頭せぬと放言して去れり、船主の怒益甚しく、更に逐一其暴狀を申出で、代官所の差紙を破りたることをも告げたり、役人も捨て置くべき事にあらざれば急ぎ呼びつけ之を詰問したるに、件の男不審なる顏して、恐れ多くもお上の差紙を破るなどゝは毛頭覺え無之、現に玆に所持し居り、指圖の日來らば出頭の存念なりしとて其差紙を示し、且つ云ふ彼の訴人は元來狂人にて、彼の五十兩も取引上正當に受取るべきものなりと、役人も差紙を破りたりなどゝ誣告したるを疑ひ、件の男は其儘無罪となり、船主の方は散々叱責の上狂人なりとて赦されぬ、船主の無念いよ／＼堪へ難きも如何ともせん樣無し、二三日立て件の男より前の五十兩を返却し來り、手紙にてドーデス公事の稽古は出來ましたかとの意を通じ來れり、其破りたりと見せし差紙は他の反古なりしなり、

▲これ實地演習が必要と云ふに就て思出したる昔話しなり、二十七八年の戰爭も十年西南戰爭が實地演習となりし賜なり、維新當時の戰爭は戰爭らしき戰爭に非ず、十年の役初めて西洋流の戰爭をなし、そのお蔭にて日淸戰役の大勝利を得世界に威張る樣になれり、戰勝國民の榮名を得たるは皆西鄕の恩惠なり、

▲天意か偶然か、維新前後より人力にては推し量られ

ぬ事が諸事トン／＼拍子に都合良く今日に至れり、扨て此先き幾年此都合能き時代がつゞくべきかん、

▲中村敬宇、晩年露西亞語を學ぶ、家人諫めて曰く、名已に聞へ、學既に博く、而して齡亦高し、今更露西亞語を學ぶは何の要ぞと、敬宇曰く佛敎に宿習の說有り、ドーモ眞實らしく思はる、自分が幼時神童と呼ばれたるが如きも全くそれが爲めなりしならん、今露西亞語を學ぶ再生の時の用意なりと、佐藤一齋が一息猶存す學止むべからざるなりとの語相似たり

▲余は人を毛厭ひすること多く、木戸（松菊）が度々招きたるも、彼が三本木の藝者を正室にし、賤妓宮中に緋の袴を穿くが如き惡俗を作りたるが、癪に障りて終に會見せず、又大の福澤厭ひにて、彼が楠公の死も權助が首を縊りて死んだも同じなど云ひしより、一度も對面せず、然れども人を毛厭ひするとは最も惡き事なり、木戸の如きも眞實人情に篤きよりなせる一失錯に過ぎず、福澤の如きも思ふに彼が心よりも口の方が惡き爲め、只だ余をして何となく厭な心を生ぜしめたるならん、

▲福澤の我文明開發に盡せる功は最も大なり、然れども彼れの門より出で彼の薰陶を受けたるものに一人として洒々落々胸襟を披ひて談するもの無し、皆々悧巧にして何となく氣の措ける人物のみなり、予は彼の門より出たるものに數多く接したるが皆同樣の性質が一貫せるを見る、只一人朝吹英二のみ、余の知れる中にて此習氣無し、

# 細君操縱法 （計十段）

青柳有美

（第九段）

先んずれば人を制す。是れ古へよりの訓言なり。かの種痘などいふは、皆なこの原理に因れるものにて、天然痘の來らざるに、早く先づ機先を制して牛痘を接種し、その患を防ぐなり。コッホ氏がツベルクリン其他近頃世に行はるゝ種々の血淸療法の如き、又同じくこ

の原理を應用せるに過ぎず。それ天が下には二法なく、總て唯一善神の支配し給ふところなれば、種痘と血清療法とに應用せられたる古來よりの訓言は、また之を夫婦の交情に應用して、其間に起る葛藤を防ぐの一方法となすを得べけんか。之を按ずるに、夫の多く細君に惱まさるゝところは、その嫉妬に遇ふにあり、換言すれば燒かるるにあり。そのスチあばれ出すも嫉妬あるがためなり、その御面フクらしめさるも嫉妬あるがためなり。嫉妬嫉妬又嫉妬、細君の不機嫌なるは、多くは其因を皆なこの嫉妬に發す。故に、もし玆に妻君をしてヤクことなからしむるの眞法あるを得ば、男たるものが、結婚によりて荷はせられたる苦痛の大部分は、即ち之を除却するを得べし。然り而してこの法たるや、既に述べたる如き種痘と血清療法とに應用せられたる「先んずれば人を制す」の原理を適用して、機先を制するにあり。詳しく言へば、細君より嫉妬せらるゝに先ちて、己れ自ら先づ細君を嫉妬し見するにあり。妻の嫉妬とは、概ね其夫に嫉妬心なきより起るものぞ。夫にして若し常に炎々たる焰をあげて嫉妬のそぶりを絶たず終始ヤキ居らば、其妻たるもの如何ぞ夫を嫉妬するの餘裕あるを得んや。此る有難き功德のあるものなればとて、酸いも甘いも齟みこなしたる五尺の堂々たる男子が、流石に甚助を極め込みて得意顏になり、これぞ其効驗秋葉山火難除の御守にも勝る嫉妬除の御守なると、臆面なく振り廻はす譯けにも行かず、またかゝることにて妻の貞節を心より心配するは、實に馬鹿〳〵しきことなれば、その所は兵法に所謂虛々實々の手練を用ひ、如何にも妻が仇し男に想ひを寄せて浮いた心を起しはせずやと、人知れず思ひ煩らひて心も心ならず切りに苦慮を重ね居るが如くに見せかけ、時折りは譯もなきに細君の外出して歸り遲きを叱りつけ、又ツラク衝りて其多情なるが如きを責めイヂめて見するべし。但し、これは前にもいへる如く全くの狂言なれど、恰も心の眞底より出でたるもの丶如く、巧に粧はざるべからず。然らば、これが細君たるものは、夫をヤクよりも、まづ我が頭の上に飛びかゝる火

嫉の急なるを防ぐに力めざるべからずして、夫を嫉妬し之れにスネて見せることなど、大低の女にては仲々出來得るものに非ず。却て夫の機嫌を取り、其氣を損ぜざらんとするに急はしくなり、命のまに〳〵動き働くに至るべし。昔は日本武尊の、東夷を征せんとして駿河に入るや、土賊僞り出獵を勸め、火を平野の四方に放ちて、即ち尊を燒かんと謀れり。是に於てか、尊草叢劍を拔きて野草を苅り集め、之に向火を放ちしかば、賊等却て焚死し尊は安全なるを得給ひしと聞く。此の如くにして、夫の嫉妬を先發して妻の嫉妬を防ぎ殺ろすは、是れ誠に日本武尊の向火を放てるに等しきものなり。故に、これを稱して『向ヤキ之法』といふ。

是に於てか、

・嫉妬せる如くに見せかくる事…………

とは、是れ細君操縦法の第九義なり。

（第十段）

普通我が邦に行はるゝ醫術は、皆なアロパシーと云ふ式なれども、近頃米國などにて、殊に婦人の間に流行するホメオパセーと稱ふる式あり。獨逸のハーネンマンなる人、今より五六十年の前始めて唱道せしものにて、之を健康躰に與れば、即ち今その療さんとする病を釀すが如き藥餌を服せしむるを以て、その醫療の原理とはなすなり。我が邦の人々に向ひて、その何れが最も進歩せる方術なりやと問はゞ、答ふるものは皆な後者を棄てゝ前者に就くべしと雖とも、米國の病院などにては、アロパシー醫七に對するホメオパセー醫三位の割合にて其醫局を組織するといへば、この法とて必ずしも顧るに足らざるものにも非るべし。殊に細君の不平とスネ方とを療して之を操縦せんとするには、アロパシーを離れて全くこのホメオパセーに依るの勝れには及かじ。古へより、毒を救ふに毒を以てせざるべからずとは、能く人口に膾炙せるところならずや。然るに、世の臆病なる腑甲斐なき亭主どものうちには、細君の不興氣なる顔を少しにても見るや否や、茲に天下の一大事件にても湧き出でたらんがごとくに胸騷がせ、切りに細君が澁面をなす原因の探究に急はしく、

恰もかの幇間が客の機嫌を取り損はざらんとして、戰々兢々及はざるをたゞ是れ恐るゝ如く、左より右より細君の色を察してその意を迎へ、如何にもして斜なる御こゝろを歡さしめんとは謀るなり。されど、お店は此方の注文通りじかく品物を安く卸さゞるものにや、妻の御氣色は、これによりて寸分も平かなるを得るに至らず、膨れたる面は恰もかの水面に石を投ぜし時の如く、益々輪をかけてフクれ出し、チレて荒ばれるやら、ツンとスマすやら、其御樣子は宛然女權の現化にやと拜まるゝほどにて、こなたより大事に持ちかけ機嫌を取らんとすれば、愈々益々高く止りて氣取りめさり、言葉遣ひさへ荒々しく甚だ殺風景になりもて行き、かの帆に順風を送りやりたらんが如く、ひたすらスチ方の高ずるのみにて、又これを制するの道なく、骨折り損の疲勞れ利けたるに至り、よい馬鹿を見るに至るべし。これ、いふまでもなくアレオパセーの失敗せるなり。故に以爲らく、ホメオパセーに依らざるべからずと。若し細君にして何事よりか辛氣臭き心となり、容色甚だ穩かならざるものあり、腹たゞしき樣子見せてスチるが如きことありとも、決して驚きアワてることなく、一切これに心を止めず、冷然として知らざるが如き眞似し、先方の意を迎へざるのみならず、却て逆手を食はせ、此方にても又苦き顏を作り、よろしくスチて出掛け、ツン／＼プン／＼と腹たゞしく立ち振る舞ひて見するなり。苟にも下に出て御機嫌を取り、其鼻息を伺ふが如きことあるなく、世の中にも男ヒデリのありとて女の乾照は無きものぞ何時なんどき引取らるゝも御勝手次第なりといふ斷乎たる權幕を示し、妻のフクるゝより一層フクれ、妻のスチるより一層にスチ、先方は兎ても及はぬまでアタリちらしなどして、スチ方とフクれ方との根較べするに至らば、細君どのも茲に何となく手頼少なに感じ自ら心細く、身を味氣なきものに覺えて降を軍門に乞ひ、心をスナホに入れ更へて亭主の命に聽き、しとやかに事へ勵むに及ぶべし。されば、なにか我が行屆かずしてなせる過より、妻を心持ち惡しくならしめしこととのありとて、こ

れがために態々説明辯解の勞を取りなどし、我がアカりをたてゝ其心をなだめんなどゝの淺墓なる心起すべからず。これ實に益なきことにて、たゞ妻をして乘ずべきの機會を作り、その我儘根性を盛んにし不平の火の手を強めしむるに過ぎず。諺に曰く『泣く子と地頭にはかまうな』と。然り、泣く女房にも又かまう勿れ。

是に於てか、

スネられたる時にはスネるべき事………

とは、是れ細君操縦法の第十義なり。

《結》

一概にいへば何の藝なき力くらべと思はるゝまでのみなる角力にさへ、裏表各四十八手と裏之又裏四十八手ほどの術あり、身躰の病さへ無慮四百四病もあることなれば、女の心の病は其數なかなかに廿や卅にて終るものに非ず、随て之れに投ずる藥も素より許多あるべく、細君操縦法の如き、又十義ぐらいに止まらざるはいふまでも無きことながら、一夫一婦といふは近頃以て人間の大義となる由にて、不幸か幸ひか初婚のまゝ妻に死なれしこともなく又離縁せしことなければ、未だ一人の妻より持たず。どれを種の研究なれば、此の論分論充分なる筈なし。さればとて、他人の細君を材料になどせんと勵めば、又あらぬ噂たてられて不義姦通の譏りを受け、飯の食ひどころにハグるゝ恐れあり。旁々以てかのフランシス、ベーコン以來法則發見の最捷徑として知られたる歸納論理を應用し、細君操縦の詳細なる原理を知ること難し。されば、是れまで列擧せしものゝ如きたゞ九牛中の一毛なりと知るべし。然りと雖ども、細君活動の如何は全く夫たる男子の手心一つにあることなれば、既に述べたる十段だけにても、之を能く飲み込みて消化し、自由自在に活用せば、其妻たるものゝ澁面を見ること幾分か稀なるを得て、せめては夫たるものゝ命三日を長めるを得て、庶幾くば甘き酒一杯にても多く飲むを得ん乎。

《大尾》

* * * * * *

添乳して棚にめざしが御座りや……………川柳點

# 教界の人物

哄堂

## （十）横井時雄氏（元基督教牧師）

新島襄氏門下の英才太だ尠からず、然れども横井時雄氏の如きは錚々たるもの也。

之を聞く新島氏が始めて同志社を設立するや、氏は恰も大學南校に在り、一度び精神教育の日本の爲め尤も必要なるを聞くや、大學を辭して直に新島氏の門に投したりと、依て以て當時新島氏の鼓動力の如何に强かりしを知る可きと共に氏か抱負の如何に尋常學生に秀抜せしかを見る可き也。

吾人が始めて氏の名を知りたりしは明治十四五年の候に在り、想に當時氏は滿々の信仰を懷て新に同志社を出て、其上品の風貌に加ふるに流暢の辯舌を以てし、盛に九州教界を搖撼したるもの丶如く、西國の青年僧侶にして耶蘇教の恐る可きを説くもの先づ横井某を擧げざるものなかりし、若しキリスト教の襲來にして佛教に刺激を與へたりとせば氏の如きは尤も大なる動力を供したりと云はざる可らず。

新島襄氏の死は吾邦キリスト教徒が蒙りたる一大打擊也、是に依て將に大に動かんとしたりし同志社は一時に其手足を斷絶せられたるのみならず、其數百の出身者は恰も大陽を失ふたる諸星の如く依て旋轉す可きの中軸を失し、轉、途方に暮れたる觀なき能はず、次て第二の打擊は至れり、ユニテリヤンの來れる是也、左




ながら信仰の動搖せんとするに乘し、是の如き危險なる思想のキリスト教の一派として來る、キリスト教たるもの、亦攪亂されずんば已まざる也、加ふるに保守的反動の大にキリスト教に不利なるあり、無智盲昧なる宣教師輩の跋扈制し難きあり、教内の人士稍く厭氣を生したる間に先登第一先づ「日本現今の基督教及び將來の基督教」たる大膽の著述を公にして教界を去り

たるものは同志社校長金森通倫氏なり、氏は信仰德操第二の新島氏を以て目せられたるもの也、而して今や是の如し、其影響する所蓋し尠少ならざりしならん。而して横井氏の如きも亦尤も不安を感したる者の一人なりしが如し、氏が「日本道德の革新」なる一書は氏が教界に於ける態度を公示したるものにして氏が尋常オルソドックスの徒に似ざるのみならず、却て海老名彈正氏等と日本教會を組織し、日本的基督教を建設せんとしたるが如き、又其間ユニテリヤンの講師として屢、三田惟一館の講壇に立ちたりしが如き、他の牧師傳道師の徒と頗る趣向を異にするものあり。然れどもオルソドックスの徒も氏を捨つるに忍びず、氏も亦教界を去るに忍びざりけん、氏は同志社の校長として京都に趣きたり、果然氏は同志社を改革して社員及び米國傳道會社と衝突して其職を去れり、氏が改革は同志社の維持上已むを得ざるに出でたるや否やを知らずと雖も氏にして若し新島時代の横井時雄ならしめば決して是の如き改革を企謀せざりしならん。已にして伊藤侯の政友會を組織するや氏も所謂ハイカラ黨の一人として黨籍に列し、岡崎氏に代て遞信官房長となり、伊藤内閣の瓦解と共に野に下りたれども氏が宗教界を去て公然政治的生活に入りたるは此の時に始まる。想ふに氏が前途は長遠也、此紛々飄々吹けば飛ぶ可き群政客の間に在り、氏の學問辯論を以てして造詣する所豫め知る可からずと雖ども左の一話の如き氏が今昔に於て頗る感す可きものあり。氏たるもの尙記臆するや否や。

今より數年前安塲松平等諸小楠門下の諸氏相會して氏を諭して曰く貴下は故先生の遺子なり、故先生は政治的先覺として國家の爲に盡されたるに、貴下は徒らに外教に沈醉して故先生の遺言を空しくせらるゝは太だ遺憾なり、今より宗教を去て政治界に投せられば、吾々各盡す所あるべし、如何と氏即ち大に感激し數日の猶豫を請ひ而して決然として答へて曰く労志は飽迄感戴すべしと云へとも宗教を以て政治には換へ難し、云々

## (十一) 南條文雄氏 (眞宗僧侶梵語學者)

佛門の名士として南條文雄氏の名を聞くこと茲に二十年、氏は抑も如何なる人ぞ。梵語學者として氏は實に吾邦の先覺者也、然れども今

日に於ては巳に高楠順次郎氏あり、常盤井堯猷氏あり、氏をして其一手販賣を擅にせしめざるのみならず、氏は寧ろ第二位に墮せんとするの觀ありと雖も氏の氏たる所は學術才藝の末に非ずして其人物の最も推服す可きに在り、

世の人物に於て豪傑として推す可きあり、才子として服す可きあり、爾れども吾人が氏に於ける豪傑としてに非す、才子としてに非す、實に君子人として推服する也。

氏が世間に於ける地位名聲の過半は文學博士と云へる學位の力なるは云ふ迄もあらざる也、今日こそ博士は其多きに過くるの感に耐へざれども七八年前の博士は實に難有者なりし也、爾れども氏にして若し文學博士たらず尋常一樣の眞宗僧侶たらしむるも尙氏は都下の一高僧たるを失はざるべし、而して是れ必すしも其覺束なき梵語の力に非す、其千篇一律の演說の力に非ず、實に氏が溫厚篤實、謙讓自ら守る如何にも宗教家らしき君子的言動に依らざる可らず。

## 南條文雄

想ふに僧侶となるもの、眞宗僧侶たるより難きは無し、和光同塵遂に俗の俗なるものにして畢るを常とす、殊に過渡時代の今日、必ずしも舊儀舊式に拘泥し難きの今日、能く俗に入り俗を出づ、氏の如きは尤も巧なるものと云はざる可らず、僧侶は宜しく髮を剃る可し、而して未だ氏が頭を剃りたるを見ず、僧侶は鬚髯を蓄ふ可らず、而して氏は鼻に八字鬚を蓄ふ、僧侶は袈裟衣を着すべし、而して氏は時に洋服を着け羽織袴を用ゆ、而して是れ未だ嘗て氏が僧侶としての威嚴を傷けざるのみならず是の如くにして氏の愈尋常俗僧に同しからざるを見る、蓋し是れ氏が溫厚の資謙讓の德行く處として宗教的圈域を脫せざるに依るか。

人は大谷派の時事に關し氏が平々淡々一の施爲するなきを見て云云せんとするものあり、爾れども是の如きは所謂豪傑才人に望む可く氏の如き君子人に待つは太だ誤りなるのみならす吾人は氏が却て滔々たる野心家の神輿となりて擔き上げられざるの智を稱する者也。

# 雀舌餘談

藍川居士

◎陶淵明歸去來の辭の序に、幼稚盈レ室、瓶無二儲粟一と云へる語あり、蘇東坡之を評して曰く、俗に傳ふ、書生官庫に入り錢を見て識らず、或人怪みて之を問ふに、生曰く、固より其錢たるを知れども、但其紙裏中に在らざるを怪しむのみと、此翁も平生只瓶中に於て粟を見るか、瓶に儲粟あらしむるも亦甚だ微ならん、と面白き評語なり、此と相似たる話は、余が知れる男なり、此男高等官吏にして、中等以上の生活を爲せども、窮乏甚しく、衣服調度は大概典舖にあり、されども例の贅澤三昧は止まず、四季の代り目には、必ず呉服商を呼び、好みの品質を撰定して、衣服を新調す、一日呉服商猶席に在りて、知己朋友も五六人居合せたるに、小兒は呉服物を手に取り、つく〴〵打詠めながら、父を顧みて、お爺さん、此べゝが出來たら、又伊勢屋の庫へお預けするの？、と座に在る者覺えず、失笑せんとして、急に口を掩ひ、主人の顏を見れば、閉口の體に見えたり、

◎晋の豫讓、身に漆して厲となり、炭を呑んで啞となり、其妻識らず、一友之を知るといふ事、史に見ゆれども、古今其友の名を知るもの少し、此は青芹といふものなりとぞ、東坡赤壁の賦に、客洞簫を吹く者ありと云ふ句あり、此客は四川綿竹の道士楊世昌なり、陶淵明の桃花源記中、武陵の漁夫は黄道眞と云へるもの、白樂天琵琶行中の潯陽の妓は裴興奴と呼ぶ女なりと、多く人の知らざるものなれば此に記す、

◎病の六不治といふ事、史記の扁鵲の傳に見ゆ、驕恣不レ論レ理、輕レ身重レ財、衣食不レ適、藏氣不レ定、形羸不レ能レ服レ藥、信レ巫不レ信レ醫、此六事を以て戒と爲せば、生涯禍を避け病を免るゝを得べし、實に稀代の箴言なり、然るに歷世の儒者之を知らず、摘出して人に示すもの無し、徒らに理義を高談するも、何の用をかなさん。

◎職原抄日本百官の中に、女醫博士といふものあり、此女醫は婦人科の醫師か、婦人にして醫を知るものか、

分からざれども、女子の開業醫は目下最も必要なり、濟生學舍出身にて、開業試驗に及第するもの男百女一位の割合なり、殊に婦人科小兒科は女醫を好しとす、男子にして閨閤に出入するは、甚だ宜しからぬ事なり、此頃醫師と婦人患者との間に、怪聞頻々として起るは人々の知る所ならん、せめて女醫をして男醫の數の三分の一まで養成せしめたきものなり、

◎現在日本にて漢字の讀方は非常に雜駁を極めたり、漢音呉音の區別ありて、普通は漢音を用ゐ、佛家は呉音を用うれども、彼此混亂して分つべからず、然るに生死問題をセイシモンダイと讀む居士ありとて、嘲ける坊主あれば、牽强附會をケンゴウフヱと讀む僧ありと罵る儒者あり、猶正しく漢呉の區別をなさんと欲せば、天下萬民はテンカバンピン(漢音)テンゲマンミン(呉音)五穀豐饒はギヨコクホウジヨウ、ゴコクブニヨウ、帝國議會を僧侶に讀ませれば、タイコクギヱ、此調子になれば、音讀は正しきにせよ、彼此の意思相通ぜざることとあらん、されば漢字の誤讀を彼是云ふ位つまらぬ事はなし、

◎酒食を正しく漢音で發音すれば、シユウショク、呉音なればシユヂキなり、身體手足は儒者も呉音にて讀み慣れ、其呉音たるを忘れ居るなり、正しく漢音で讀めば、シンテイシユウソク、何の事やら分らなくなる、此の如き例枚擧に遑あらず、

◎酒、首、手、母、婦、斗、狗、負、守、受、阜、牡などの字は悉く有韻に屬して、口、柳、友、久、走などと同じく、語尾を長く引かざれば正しき漢音にあらず、如何なる漢學者もさる讀方をするもの無し、また口、久の呉音はクなるを知れども、柳、友は漢音の外僧侶も知らず、要するに今日に在りては、文字によりて漢音のみ傳はれるあり、呉音のみ傳はれるあり、其間轉訛幾變知るべからず、たゞ通俗の讀み方に從ふを好しとす、

◎本田種竹は通常の詩人なれば、號も漢音にてショウチクと讀むべき筈なれども、矢張り呉音のシユチクなり、釋清潭は僧侶なれば、ショウタンと呼ぶべき道理

なれども、自らも漢音でセイタンなり、
◎清潭は其居る所を名けて、大獅子吼林と呼び、親善なる友人を國分犀東、大橋豹軒と爲す、動物園の側に住居せるだけ、一段面白し、
◎阿誰、阿嬌の阿は仄用なること、少しく詩を學びしもの丶知る所なり、植松果堂嘗て詩を作り、阿嬌の字を用ゐて、阿を平用とし、人の指摘を受け、終生詩を作らずと誓ふ、三島中洲皇孫降誕を祝する詩を作り、阿誰を平用と爲す、果堂の小心翼々、中洲の放心大膽、是れ兩者榮枯顯晦の分る丶所以なり、
◎謎語を以て詩を作れるもの古今多し、宋の張文潜の詩に曰く、

雲間趙盾益可レ畏。淵底武侯方熟眠。若無ニ一雨爲
施ニ澤。直恐三江便欲レ燃。

天邊の趙盾は夏日、淵底の武侯は臥龍なり、
◎日光及び高野の山に、佛法僧と鳴く鳥ありと聞きしが、王得臣の塵史に安陸に念佛鳥あり、鶺鴒より小、色青黑、常に一切諸佛と呼ぶと、漁洋の詩話に見えたり、同一のものには非るか、
◎鳥類の雅名甚多し、今十中の一二を擧ぐ、

鶴は仙客、山君（虎も亦山君の名あり）丹郎、逕丹使、九皐處士、羽衣道士等、
孔雀は南客、鸞友、文禽、都護、等
鷺は雪客、春鋤、獨春、蓑披貝、風標公子、狹塘女子等、
烏は黑鳳凰、鳥中曾參、等
鶯は搏黍、趣時鳥、黃栗留、凌霄君、金衣公子、等、
鸚鵡は隴客、慧鳥、辯哥、綠衣使者、武仙郎、雪衣娘、

其他鷹の書空匠者、鷗の碧海舍人、杜鵑の觀自在、白鷳の元素先生、鴿の插羽佳人、飛奴、鴨の青頭道士、啄木の采藥使、鷄の會稽公、戴冠郎、長鳴都尉枚擧に遑あらず、
◎命名の不適當なるは、此頃新聞に見えたる日比谷公園の設計案なり、無暗に壽の字と、萬の字とを振廻はして、恐悦がる處は、全く支那的なり、仁壽園は仁者は壽なりといふ本文によれるならんが、山の手邊の醫者の看板に似たり、中には二人手を携へてすしでも食ふ處と云ふ謎なるべし、即ち仁の字は二人にて、壽は壽司の壽なりと言ふものあり、粋なる考へと云ふべ

し、涵文湖、春雨橋、澄水亭、金瓢梁、なゝと來ては實に呆然たる外なし、

◎世界最も恐るべきは婦人の妬氣なり、天子の震怒を以て雷霆に比し、或は龍鱗に逆ふと形容すれども、婦人の妬氣に比すれば未だ畏るゝに足らず．唐の玄宗、楊貴妃を納るゝ時別に一寵姬あり、梅妃と呼ぶ、其愛情貴妃と厚薄無しと雖も、貴妃の妬氣を恐れて久しく相見ず、或夜玄宗眷戀の情に堪えず、近侍を遣はし、燭を滅して梅妃を迎へ、舊を話して相悲み、意緒纏綿たり、明旦近侍俄かに報じて曰く、貴妃至れり貴妃至れりと、玄宗手づから梅妃を抱へて閣後に隱し、狼狽の態を蔽ふ、貴妃突入、問ふて曰く梅精何くに在ると、玄宗曰く上陽の東宮に在りと、貴妃怒りて曰く、肴核狼藉、御榻の側に婦人の遺韈あり、夜來何人か來りて、歡醉を共にす、日方に出づ、陛下朝に臨みて、萬機を聽くべし、妾は此處に留りて、還御を待たんと、玄宗冷汗體に遍ねく、今日疾あり、朝に臨む能はずと、復衾枕に就て臥す、貴妃益々怒りて終に其第に歸る、玄宗起て梅妃を求むるに見えず、小黃門事の急なるを救はんため、私かに梅妃を扶けて徒歩東宮に歸らしめたるなり、玄宗却つて怒りを小黃門に遷し、終に之を斬ると、ア、これ何たる癡呆ぞ、玄宗初めは聰明を以て聞ゆるもの、一朝女色に惑溺して、柔懦庸愚此の如し、人生恐るべきは女色なり、而して楊貴妃の妬悍、天子の尊を視ること土偶より甚し、

◎楊と梅と寵を爭ふて相嫉むや、此一事以て知るべし、玄宗之を舜の娥皇女英に比す、鼻下三千丈と云ふべし、時人廣狹類せずと云つて、窃かに之を笑へり、蓋し廣狹は肥瘠の事なり、楊は肌膚豐滿牡丹の如く、梅は風姿清瘦梅花の如し、其性質も相反して楊は驕傲妬悍、梅は柔婉貞淑、玄宗も梅を寵する方寧ろ深かりしが楊の奸智に籠絡せられて、國家を傾覆し、二本棒の親玉となれり、玄宗をして青柳君の細君操縱法を會得せしめば、天寶の亂は起らざりしならん呵々、

# 詞藻

## 浮草集（風韻社詠草）

○　佐藤大峨

うゑ木刈る鋏のおとに夢さめて旅籠の朝を蚊帳のつめたき。

橋落ちて嫁御かへらず村長のかどの柳はなほさみだるる。

姫百合のおかきが雨にねむりけり二荒をわくる岨道にして。

○　門野三果

遠乘の自轉車過ぎて青葉しげる鎮守の杜のひるしづかなり。

あら鷲のかゞなく山の岩そばにおないたいたし姫百合の花。

まくさ刈る夏野のはづれ氷家のフラフゆらきて青あらし吹く。

○　高柴象外

清き夜の月にえたえず笛とりて同じ思ひを三たびまで吹く。

やは腕にひくき小琴をとる子なり哀れとおほせ花まもる神。

たゞならぬ星のまたゝきゆふべ見ぬ京なる君よ恙あらすな。

○　都河不老

菜の花のにほふ小道にわれ立てば胡蝶むつれて袖くゞり行く。

○　二宮野風

姉君の御墓の前にぬかづきてみなし子のうた今日たてまつる。

○　高橋翠柳

わだつみのゆふべの舟のなつかしく踏むになれたる磯の松影。

人の子のもろき涙は露の玉朝顔といはず白ぎくと云はず、

○　小池武俊

妹とわれ宿世はかなむ磯の邊に二十日あまりの月細く出ぬ。

一むらの小萩みだれて荒れ果てしおくつきどころ秋の風吹く。

思ひ餘り逝きにし妹が墓とへば秋かぜ吹きて松のつゆちる。

○　五味美德

ほゝゑめる此うつしゑの美しき人いまいづこもへば悲しも。

山の手の菜たね花咲く畑の邊に神のごとき子胡蝶追ひ居ぬ。

○　臼井學耕

森のうちによるの御神のいぶく時おほ星小星ひらめきそめぬ。

○　今井月湖

若草に牛はねむりてくねりたる柳ひともとはるかぜわたる。

○　中西松琴

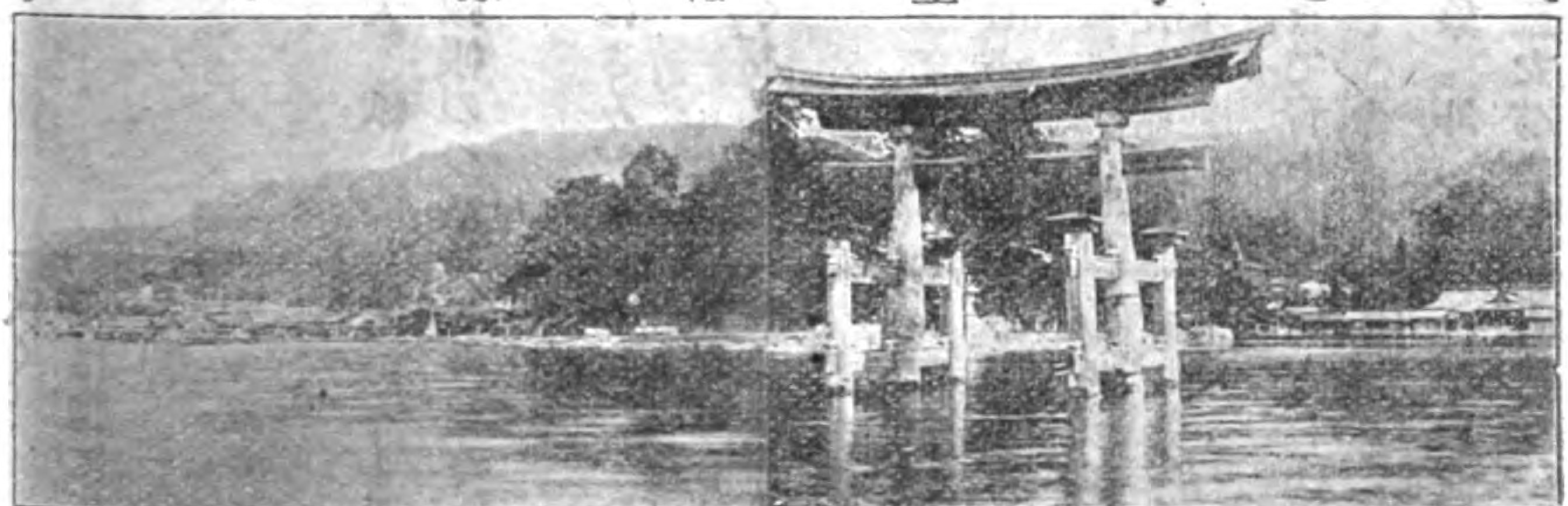
繪日傘に野茨をりそへ一人立ちて君待ちわぶる村外れかな。

○　伊藤呉風

雨はれし日よしの山の松の上に輪をかく鳶の聲のどかなり。

○　一柳直彥

修驗者の鈴のおとすなり八重雲のとはにおり居る岩山にして。



○　宮武恒樹

御神いまおりきますらんほの／＼と高天が原に雲たちわたる。

○　風間光子

蝶追ひてゆきしをとめや忘れけんベンチにのこる菫ひと束。

○　渡邊光風

つばめとぶ川添づゝみはろ／＼に柳なびきて繪日傘行くも。

横はまのみなとのよるをにぎはひて滿艦飾に花瓦斯ともる。

橋づめの柳はなれてゆた／＼に夕川ほたる瀬をわたり行く。

むらだちの葉深川蘆かぜ越えて千露もゆらに螢とびちる。

ぬば玉の暗夜しぬゝにさみだれて山ほとゝぎす庵ちかく鳴く。

幕末の遺臣世慣れず市に出て夜ごと賣るとふあやし辻うら。

（前號環枝集正誤）

小池武俊の歌初句「猫呼ぶ」は「猫呼ばふ」又人名「高柴外象」は「象外」の誤植にして其他「今井月」とあるは「月湖」の脱字也。

告國歌革新主義者

我風韻社は何人の入社も拒むことなし國歌革新に意ある者は速に來れ規則入用の者は相當郵券を添へて東京市芝區松本町四十四番地本社に

# 漢詩

◎詠白河樂翁花月草紙節一　鈴木訥堂

誰謂善知人。任賢以治國。率然爲大言。不如守沈默。
我國列聖中。延喜推至德。猶信讒人言。賢臣去君側。
西土二十朝。隆替不暫息。後人辨忠奸。區々施繩墨。
唐虞三代初。邈焉不可識。史筆之所傳。安得免指摘。
請看堯之聖。擧鯀不稱職。管蔡放流言。周公亦怵惕。
任賢非容易。忠奸難逆測。若得眞知人。堯舜無顏色。

宋神宗、夙稱聰明、鋭意求治、不御畋遊、不營宮室、而爲王安石所誤、嗚呼知人之難、堯舜猶病、俗儒容易言之、可發一笑、

◎遊晃山有作　笠原宏堂

松花落處立廻廊。憑弔無端感慨長。四海群雄悉雌伏。
三河年少總鷹揚。奔湍捲雪千峯響。老樹參天六月涼。
覇氣銷沈形勝在。只看金碧映殘陽。

句々的確、切于晃山、松花落三字殊妙、憾四海三河千峯六月、有堆垛之嫌、

◎書感

世情輕薄互相欺。罪在黃金人不知。孰若讀書尋古道。
白雲深處掩茅茨。

黃白二字、如此映帶、不陷纖巧、恰到好處、

◎湘南雜詠　加藤鷗村

嗟我文章報國難。疎才未得對金鑾。偷閑暫擬江湖客。
又被涉鷗笑冷官。

帆影晴分眼界寬。笛聲搖曳碧雲端。蓬萊定有釣鼇客。
映海珊瑚虹一竿。

浩々天風吹鬢毛。層樓百尺聽松濤。魚龍嘯處暮雲裂。
笛一聲潮乘月高。

一以穩雅勝、二以奇健勝、三以雄壯勝、三首三樣筆墨、情韻双絕、

◎四條畷懷古舊作　藍川居士

隴畝邐迤連林巒。行人停杖歎一歎。古戰場荒日之夕。
磨洗折戟仔細看。想昔妖祲蔽北闕。義娥隱耀天步艱。
車駕蒙塵去不返。南山半壁嗟偏安。忠節獨推楠廷尉。
欲誅醜類淸區寰。孔明努力不亡魏。子房慷慨難復韓。

獨木安能支大厦。隻手何以廻狂瀾。遺恨將星空墜地。猶托孤兒留守丹。鳳毛一片護龍闕。遺訓諄々銘肺肝。况有賢母相激勵。傳家寶劍犀可剸。君父之讐不共生。眦裂怒髮時衝冠。至尊何意賜國色。春閨夢裡難貪歡。慨然辭之壯且烈。此心不動如泰山。忽聞鼙皷震天地。萬馬北來紛滿關。自誓一戰决生死。階前咫尺拜龍顏。頓首奏曰臣正行。鞠躬唯慽身羸孱。鞭箠駑鈍圖報効。此行恐不期生還。君臣相見共嗚咽。袞龍衣濕涙潛々。拜辭闕下蹶然起。手揮長戟跨銀鞍。豺狼哮噉何足畏。斬人如草戰血殷。刀折馬僵猶奮鬪。萬矢如蝟身上攢。寡不敵衆眞可悲。後援不至筋力殫。一門駢首皆殉節。正氣磅礴乾坤間。弔古如意輪堂下。猶向北風哀涙彈。鏃痕留得梓弓詠。英雄心血長難乾。聖朝今日旌忠孝。祠宇新搆何巑岏。百世血食享祀典。英魂髣髴降廟壇。天定勝人不可誣。流芳遺臭異忠奸。請看室町十三代。榮華一夢同邯鄲。古塚累々鬼空餒。兎葵燕麥春風寒。

課題

## 夏夜即事

應募集蒐四十八、選錄八首

（金）　天野典學

蠟炬燒天照玉餅。朱門粉黛笑聲囂。草堂無些人間熱。飽聽松濤對月明。

寫極清涼境、以極熱鬧景、反襯、意匠殊妙、

（銀）　松本錦川

乘月微吟病骨蘇。逍遙步到小西湖。風從松頂颯然至。萬柄綠荷跳露珠。

一讀有氷壺濯魄之思、

（銅）　大山光道

黃昏睡起葛衣涼。風自長松入翠楊。一朶素馨花似雪。水晶簾外月吹香。



亦是一服清涼散、

（鐵）　都筑五山

流雲漸散五更天。庭上移床人未眠。杜宇啼過不知處。一痕殘月淡如烟。

後半飜譯古歌、平穩可喜、

（錫）　中山聳空

幾度移床恨日長。黄昏月上頓加涼。池如鏡面天如水。帶得荷香入睡鄉。

凉夜光景、宛然在目。

## 詩課題

**銷夏雜詠**（五言律、七月十五日締切）

**詠牽牛花**（五言絶、八月十五日締切）

用箋郵便はがき、東京谷中三崎町十八番地町田柳塘宛投稿

## 俳句　四方太選

### 青梅

青梅の累々として穂麥かな　暁村
青梅に誰が打付けし礫かな　秋皎
袂なる青梅すてゝしまひけり　柳家
青梅を打てばほたりと毛蟲哉　琶橋
青梅の落つる木蔭や苔清水　花徑
青梅や金魚の池の水淺き　啞子
青梅の落轉がるや雨蛙　嚴子
青梅に梅の名所の梅雨入哉　酒肋
雨勝にうみし梅の實落つるなり　南汀
青梅を鉦の上に打落とし　快雨
青梅を皿に盛りたる小店かな　木禪
朝市や青梅一荷賣りに出る　霞松
青梅を擔で賣りけり梅屋敷　一堂
青梅を窃に食ふ袂かな　鬼水
青梅を呉れし隣の女かな　輪月
青梅に虫歯をなやむ女かな　雨翠
青梅を傘で落とすや塀の外　洋々
青梅を垣に昇つて取り得たり　五里
青梅を盗みてくゝる小藪哉　久木元
青梅や裏戸出づれば麥畑　耕村
青梅も市に上りて初茄子　北軸
青梅を喰ふ女の白歯かな　乙村
青梅を袂に拾ふ女かな　一村
青梅や人に賣らるゝ梅邸　六郎
鉢植の梅の實落ちてしまひけり　吐貫
青梅を手桶に拾ひ集めけり　躅溪
窓前の青梅落つる讀書哉　仝

青梅や人住まである下館　雄濱
青梅を枝ながら切る鋏かな　仝
青梅を拾ふ叢や蛇の衣　虚靜
青梅の水に落ちには流れけり　仝
青梅のかたまる核や梅雨に入る　吾空
梅の實も賣るなる稱宜のたつき哉　仝
青梅を水に浸せし一夜かな　炎天
青梅の枝低うして懸樋かな　仝
青梅や打落す人拾ふ人　稻青
人眞似の青梅喰うて見たき哉　仝
青梅や梯子すべきの枝もなく　孝太
青梅を呉れぬ隣を悄みけり　仝

人
青梅をくらうて腹の痛み哉　吐覺

地
青梅や隱して喰ふ憂き思ひ　稻青

天
青梅の門や煮酒の香ぞもるゝ　吾空

生節　七月十三日まで
廻燈籠　八月十三日まで

# 思潮

## 最後の十五分間

「國民新聞」　蘇峰生

勝敗の决は、最後の十五分間にありとは、自個の實驗上より打ち出し來りたる奈翁の警語也。試みに端緒競爭の一事に徵して之を見るも、最後の數分間、若くは數秒間は、實に勝敗のよりて決する重なる大機たらずんばあらず。

我が困む時は人も困む時也、我が疲るゝ時は、人も疲るゝ時也。人の困疲するに際し、我一段の勇を鼓す、勝利固より我に歸せざる可らず。

（中畧）最後の十五分間、最も大切也。されど最初の十五分間の大切なるをも、亦た知らざる可らず。彼の角力を見ずや、彼の擊劔を見ずや。其の勝敗の機は、既に双方立ち上るの時に定まると謂ふにあらずや。或は人を致すと云ひ、或は先んずれば人を制すと云ふは、此の最初の十五分間の氣合を示したるものにあらざるなきを得んや。唯だ最初の十五分間のみ氣を張り、最後の十五分間に到りて、元氣索然たるが如きは、決して其の全き勝利、若くは成功の効果を收むる所以にあらず。否な時として は總ての効果さへも、最後の一敗の爲めに奪ひ去らるゝとあり。

故に始を愼むものは、終をも愼しまざる可らず。（中畧）最後の十五分間の大切なるは、單に他と勝敗の數に關するのみならず。他に頓着少き、一個單獨の事業に於て、亦た然りさ爲す。吾人の世に處する必ずしも決鬪の如く、歷然たる相手を求めて、或る時限に其の勝敗を決するが如き事

のみにあらず。別言すれば斯る際敏き場合は、甚だ少くして其の多くの部分は、相手なき、假令あるも頗る漠然たるものにして、謂はゞ我が爲さんとする所を我目から爲すに過ぎず。然も最後十五分間の警語は、斯る場合、即ち手廣く云へば、人生の總ての場合に適用するを得可し。古人の百里の行は、九十里に半ばすとは、是れ也。

最後の十五分を、最も有効ならしめんには、單に謹愼、注意を要するのみならず、亦た氣魄の雄厚なるを要す、精力豪健なるを要す。如何に小心翼々、用意周到なるも、若し其の氣餒へ根耗する時には、何事をも爲し得ずして止まむ。精力を蓄ふるは、金錢を蓄ふるが如く、濫りに之を消費せざるにあり。氣魄を養ふは、身體を養ふに滋養物を要するが如く、亦た精神的食糧を要す。氣魄は必らずしも天生にあらず、經驗と工夫と涵養とによりて、之を長大ならしむと難きにあらず。世或は氣魄なきものあらば、其人は未だ氣魄の入用を感ぜざるの人と認む可きのみ。

## 宗教上の偏見

「教育學術界」

井上哲次郎氏

宗教上の偏見は特殊の宗教の特殊性に拘泥する所から起る、ところが今日の世界の大勢を見ますれば、世界各國の關係益親密になり、人類の交際愈頻繁となつて來た以上は宗教の特殊性と云ふものは最早人類に必要でない樣になつて來た、各地方の特殊の境遇、特殊の時勢と云ふ樣なものは次第に消滅して世界各國の人類が同一の境遇に投せられて同一の時勢に支配せらるゝと云ふ樣な事になつて來た以上は特殊の宗教は必要でなくして人類一般に共通なる唯一の宗教が必要となつて來たのであります、此の時に當りて宗教の特殊性に拘泥して昔の歷史的宗教を維持しやうと云ふ事は無理なる事である、又有害なる事である、最早時勢は一變して仕舞ふて居るそれで特殊の宗教は丁度子供か身躰の未だ發達せざる時に必要とする衣服と同樣でもう無用になつて居る、モウ子供が發達して大人となつた樣なもので從前の衣服を再び着せると云ふ事は一向必要がなくして、到底適しない樣になつて居るのであるそれで今後人類の要する所のものは人類一般に共通なる合理的の宗教である、今日の哲學科



學に戻らざる宗教である、それで實際の有樣を見ますれば智識あるもの、教育あるものは會堂にも行かす寺院にも行かない、中には例外もありますけれども大抵は會堂寺院に行く必要を感して居らぬ、それと云ふは歷史的の宗教は最早彼等に必要がない、彼等は歷史的宗教に對して永遠の訣別を與へて居る、彼等の精神を支配すべき宗教は歷史的の宗教ではない、將來の宗教である、歷史的宗教は彼等に安心立命の地を與ふるに足らないものとなつて居る、それて歷史的宗教を今日信奉して居る者と云ふは比較的智識の少ない者教育の低ひものである、殊に本願寺の本堂に集る信者の如きは眞に智識の程度の低いもので、多數は百姓若くは無識の市民に限るのであるです、して見れば智識が進み教育が進めば愈歷史的宗教の勢力を失ふと云ふ事は明らかである、さうして今日の所では獨日本のみに於てのみならず歐羅巴に於ても歷史的宗教の日に月に勢力を失ひつゝあると云ふ事は決して掩ふべからざる事であるです、歷史的宗教の斯樣に衰退しつゝあると云ふことは中々に趣味のあること

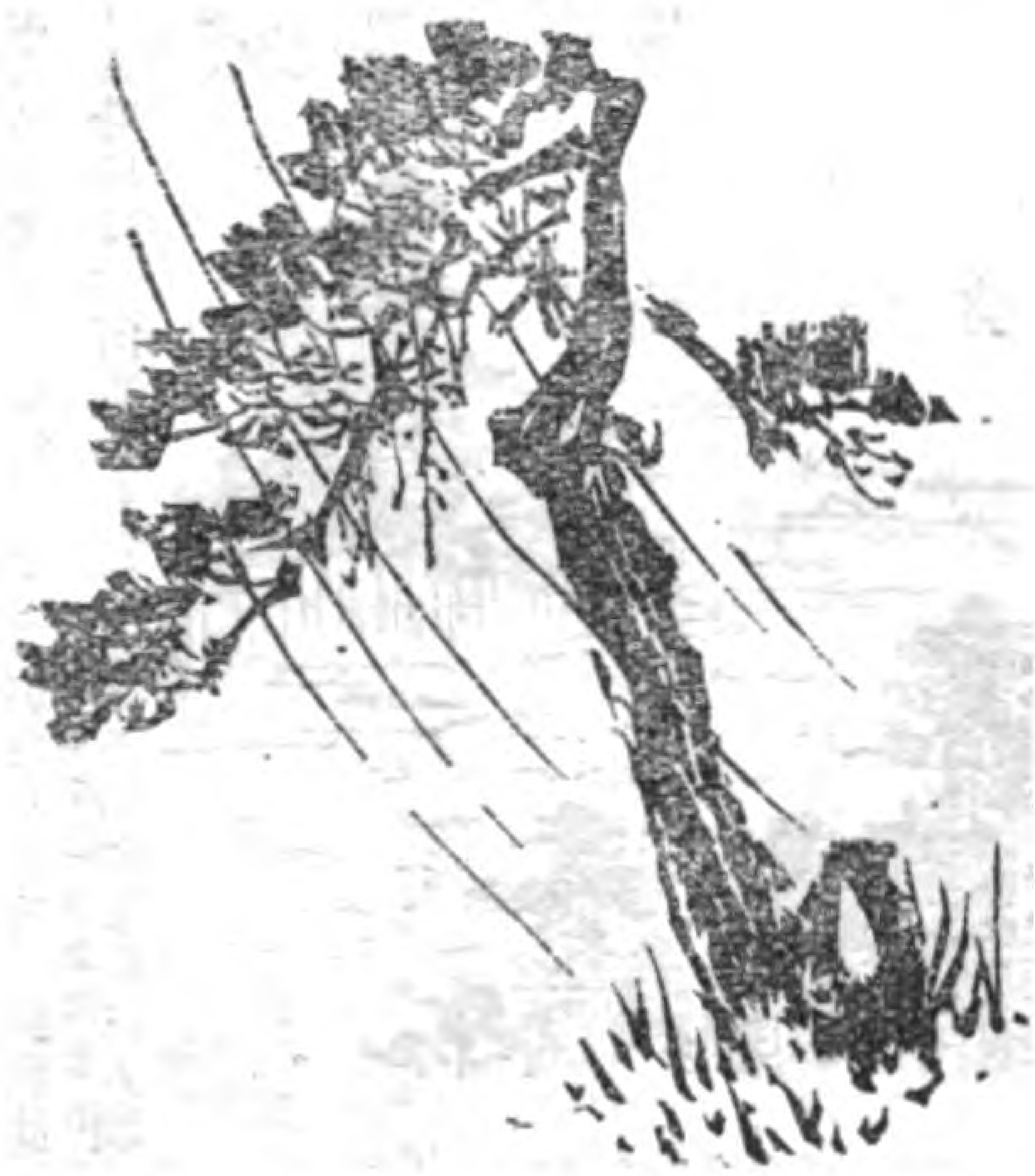
で、之等が一變して將來の宗教を生み出さんが爲めであるです、言ひ換へて見れば歴史的宗教が其特殊性を失つて特殊性を帶びざる所の唯一の大宗教に變せんとしつゝあるのである、此の宗教の一大變動を障害して居るものは宗教上の偏見である、（宗教及道德につきての談話中の一節）

## 國士の生計

「女學雜誌」記者

◉餓えて死ぬものは少なく、食ひ過ぎて死ぬものが多い。寒くて死ぬものも少なく、餘計に着過ぎて風を引き、夫から死ぬものが存外に多い。これほど衣食に窮するといふとは無い筈であるのに、實際に窮するものが多いと云は何故である。之は衣食足らずして死に至るからと言つて窮するのではなく、衣食を過して遂に死に至るの道に進めないからと云つて窮するのである。左すれば、其の窮するは、即はち助かるので、本來は喜こぶべきであるが、夫にも關せず矢張り之を悲しむもののあるは何故である乎。

◉衣食のつぎには、住居であるが、之も何程大きくしたからとて、人一人の占め得べき區域は小さなものである。大厦高樓の門内から、二頭引の馬車をきしらせ、意氣揚々として出て來る人などがあるから、ドンナ大人物かと車中を窺がつて見ると、取るにも足らぬ小人である。彼の身躰は一疊一ぱいにも足らぬ、其威光は八疊一間の外にも通らぬ、而して大キナ家を持たねばならぬのは、何の必要がある乎。



◉無論、コケヂドしには樣々のつまらぬものも入用であらふから、誰も彼も哲人達士の眞似は出來ぬ、また爲る必要もなからふが、苟しくも國士たらんとするものなどが、衣食住の事に奢るなどは、殆んど其意を了解することが出來ぬ。

◉先づ、何の爲に左樣な奢りが入用であるの乎。食物は滋養の爲だと言はれる乎、實際、滋養の爲めに飲食しては居られぬ、反つて身の害になる樣な過度の飲食ばかりを仕て居る。衣服は、何の飾になるか、衣服を飾つた爲め如何なる種類の人が感服するか、其標準を一考すると直きに合點がいく。住居に至つては、殊に其の必要がない、東奔西奔せればならぬ、吾家は國家である、吾庭は山川である、家で秘密會議が出來るでなし、多くの客を招けるでなし、大抵、實用の區域が定まつて居る、別段大きな構えが入り用な筈はないのである。

◉或は言ふ人もあらふ、萬事萬物、左樣な實用主義のみの勘定ではない、所詮は人の趣味によるのであると言はれるであらふ。然し、趣味ならば高尚なる趣味にして貰いたいものである。無關係の一私人とは違ひ、國士を以て任ずるものは、風化影響の責任を負つて居る。衣食住に奢るなどの趣味を以て自から樂しむとは、思はざるも亦た甚だしいとである。

# 洋眼に映ずる日本人

「教育學術界」　在獨　下田次郎氏

今や我國は强國の仲間入りをしたから我一擧一動は彼等の間に重きをなし、外に在る國人はもてるに相違なかるべしとは國內に居る者の考で實際は大違ひ、外國船に乘て横濱を出るときからすぐ不愉快の感が起るのである。成程日本に居る間こそ洋人もお世辭をいふけれ共一たび其地を去ッたなら何も取繕ふの必要なく、於是乎彼等の正味飾りなき評判が聞けるのである。それよりまた外國に住んで國民一般の日本人に對する思想擧動を見聞したならば夫こそいよ〳〵其の本當の判斷が分るであらう。

日本人は髭少く惣して洋人には若く見えるから我々の多くは小供視され又無論何もしらぬものと思ふから小供らしき問が發せらるゝ。通例の教育を受けた人に遇つてもよく日本には雪がふるかと問はれる。降るといふと驚く。彼等は日本はアフリカの見當の熱帶地方にあると考へて居るからである。小學校で外國地理が教へられぬのではないが日本は未だ彼等に重きをなさぬから忘れるのである。丁度日本の小學教育をうけた徴兵適齡の者に南米の地理を問ふても分らぬが如くに。誰れもロシアを知らぬものはない、英、佛、米、伊を知らぬものはない、支那を知らぬものはない、然し日本を知らぬものは多いのである。日本には電車があるか、鐵道があるか、電燈があるか、何時豚尾(ツォップ)を切つたか、此等の問は珍らしくない。我々が道を行くと支那人〳〵と呼ぶもの十中八九で日本人と云ふて呉れる者は尠ない。予は支那人にあらず日本人なりといふと不思議そうな顔をしてどちらでも構はぬではないかと云ひたげである。中には日本は日清戰爭以來獨立したと考へておるものもある。猿だといふて鐵砲擊つ眞似をする奴も居る。これで內國に在ては日本は堂々たる文明國で强國と並んで毫も下る所なしと威張散らしておる。これは樂屋褒めで見物は輕蔑嘲笑を以て觀て居る事を知らぬのである。「宇內に冠絶」すると自稱する國はこれではいかぬ。今後益國民の自覺心を喚起し各其職に精勵し富國强兵以て外人をして眞に我國及國民に對し歎賞の聲を發せしめねばならぬ。於是乎教育の隆盛を圖ることが第一の急務である。

# 師表たるべきもの無し

「警世」　松村介石氏

英人に取りて其の最第一たるべき者は蓋しネルソンならん、ネルソンはツラフアルガルの波間に戰沒したる一將に過ぎず、而かも其の『英國は各人に義務を要む』と大書したる旗章を檣頭に飜へし、勵色一番士卒を鼓舞して戰つたる跡は、遠く十九世紀を貫いて、今尚ほ英國々民の士氣を支配するものたるを以てなりと、敢て問ふ、近世我國の師表たるべきもの果して誰れぞ。勝海舟は苦節に於て師表たるを得、而かも畢竟亡國の一下臣たりしを奈何せん、西郷南洲は大度量に於て師表たるを得、而かも亦た賊魁と爲りて其身を終へたるを奈何せん、横井小楠は言論の人、行爲の人にあらず、木戸松菊は神經質に過ぎ、大久保甲東は冷酷に失し、遂にネルソンたる能はず、ネルソンは豪胆にして『恐怖』を知らず、而かも温情婦人の如く、人をして彼が爲めに死を愛まざらしめたり、其の私行には汚點の指すべきなく、其の公務には熱誠の迸りたるを見る、寔に一代の師表たるに耻ぢず、而して我國一も之れあるなし。

井上聞多が俗論に抗して意激するや、正に腸を摑み出して、之を俗論家の面上に抛け着けんとせり、是れ實に血性男子の師表たるべきもの、而

かも老來、官を私して三井の爲めに經營したる處ネルソンを距ると遠きものあり、板垣退助は嘗て自由論を唱へて、一代の風潮を捲き起したるもの、其の岐阜の途上に刺されんとするや『板垣死すとも自由は死せず』と大喝し、其容凛然犯すべからざるものありき、而かも終に今日の零落に遊ひたり、其の憐れむべきを見るも、未だ慕ふべき處を見ず、大隈重信は其の初め奸佞と呼ばれ、中比豪傑と評せられ、而して最後には思ひしよりも果斷力に乏しき機會派の一人として知られたるは、寧ろ今日吊すべきものありて存す、伊藤博文は身を大閤に比して起ち、東洋のビスマルクと稱し、憲法の起草者と誇り、近時政友會を組織するに當てや、山川曾師くの趣きありき、而かも今日は何事ぞ（後略）

## 兒童の衛生に就て

「東京市教育時報」　山根正次氏

それから私は尙申しまするのは日本の今日の人の身體の惡くなる上に於て證據立てられたるもので最も多くの病氣が傳染して居るものがある、其ものは何であるかと云ふとトラホームと云ふ病氣である、奥州の地方へ行きますと殆んど兵隊に取る所の人がトラホームに罹つて居ると云つても宜いのであります、或縣の如き一昨年參りました時に調べたときには千五百人の中に七百人が駁されて兵隊になることが出來ない、さうして其中の半分は何で有かと云ふと風俗の亂れた結果から受くる所の花柳病であります、其外のものは何であるかと云ふとトラホームパンヌスと云つて傳染する眼病でありますが其トラホームの爲に眼が白くなつて鐵砲を擊つことの出來ない人になつて居ります、其病氣が大變に日本には蔓延しつゝあるのであります、學校に通ふ所の兒童の眼に付いては最も能く氣を付けてやられればならぬ、それでなくとも學校の建築が惡い爲に光線の射入が惡い爲に近眼になりつゝあるのでありますから此トラホームに付いても最も氣を付けなければなりませぬ、學校に於ては最も之に注意されて居りますけれども父兄に於ても尙能く注意しなければならぬのであります、それからマダ學校に注意してないものがある、是は何であるかと云ふとマダ學校の中で唾壺と云ふものが備へてない痰吐きが置いてないどうか此痰吐きと云ふものは何れの學校に於ても設けて置かぬと危險であらうと思ひます、ドノ子供に肺患があるやら分らない、若し肺病の虫が板の間にでも這入つたり或は體操場にでも痰を吐きまするとこれからして大變に澤山の病氣を拵へると云ふことになる、一つの痰の中には二億と云ふ黴菌が居ると云ふことですから非常な危險なものでありますそれが乾いて散つて兒童がそれを呼吸をすると云ふことになります、

（兒童の衛生に就て講義中の一節）

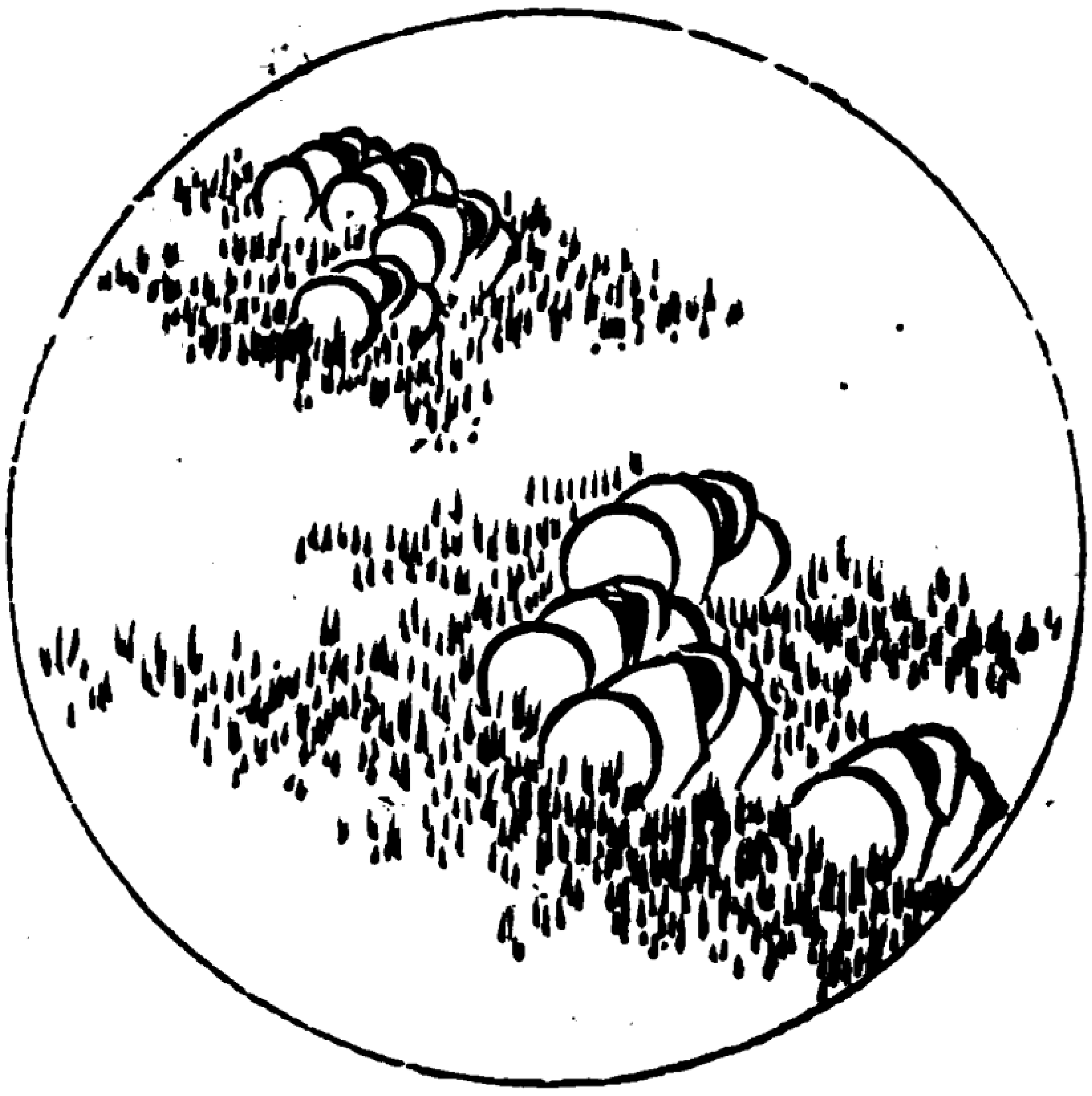
## 迷信打破と學者の責任

「六合雜誌」　記者

合理的宗教家が迷信を打破らんとすれば彼等は自教の爲にする所ありて斯く爲せる者と考へ、少しも公平なる理性より出づる議論とは受取らぬのである、宗教家が他の宗教家を批評することは何か爲にする所があるのであるから、何れも我田引水の議論であるといふ相場が極つて居るのである、

醫者が迷信打破の爲に論議することは矢張同樣の困難がある、彼等が若し迷信家の汚水を飲み、若くは怪しげなる丸藥などを服することを攻擊することあれば、迷信家は何となく醫家が自己の利益の爲に斯ることを主張するのだと感ずる樣になる、斯の如き事情の存して居るのであるから、迷信打破の局に當るのは學者が最も適當であると思ふのである

今日世間に行はれて居る迷信を打破するには何も深き學問を要することはない、唯尋常の識見へあれば充分だ、病氣の時に醫師に依らずして怪しき神水などを飲むことを批難するには別に醫學上の知識を要しはせぬ、唯此場合に於て最も必要なることは世人の信用を博するだけの地位を有すると共に、公平無私に事物を論議することの出來る人物である、これが吾人の所謂學者であつて、彼が法律家、若くは經濟家、若くは科學者たると否とに拘はらず、殊に迷信打破に關しては大なる勢力を有し居るものと言はねばならぬ、然し今日の學者は餘り迷信などといふ問題に喙を容れぬ様に見へる、若し此事が非常に時間を要し若くは困難なることであれば、吾人は必ずしも學者を責むることは爲さないが、實際困難でもなく、亦時間を要することでもない、



## 評論

# 政界時言

## 桂内閣の前途

城陽政客

意外にも桂内閣の成立を観たり吾人は敢て意外と云ふ太郎子爵の軍人として勳功赫々たるは何人も疑はざる處桂大將の政治的手腕を有するは世人の信頼する處所謂元老仲間の一人たらざるも而も長州流の後援あり軍事に政治に豐富なる識力を有し殆んど準元老株の一人たるは吾人の信認する處たり

陸軍次官として其の軍政的頭腦の明敏なるを顯はし第三師團長として其の軍事的活動の能力を示したりき而して陸相として山縣內閣に班するや挺身奮起議會操縦の難局に當り彼の咆哮しつゝありし自由黨を美事に取つて抑へ付け難なく山又山の險關を易々通過せしめたりき此の時に於てや太郎子爵は最早や一個の軍人としては観る可からず好個の軍政家として遇す可きにあらず彼は明かに政治家として機敏なる手腕を有し豐富な

る識慮を蘊蓄し自在なる活動に耐へ得るとを顯出せり當時木圭大將の將來や洋々春海の如しと唱へたるもの決して偶然にあらざりし也勳功彼れが如く手腕彼れが如く人物彼れが如きもの早晩上御一人の御信認を辱ふするに至るは必然ならんか

◎太郎將軍の地盤

然れども彼が地盤は尚未だ堅牢なりと云ふ可らず彼が政治的經驗は尚未だ成熟したりと云ふ可かず彼が堂々國政を把握し閣班に首座として其抱負を行ふの時機や尚未だ到達せりと云ふ可からず眞箇に彼れの爲めを想ふ寧ろ其時機の成る丈け遲からん事を欲せざるを得ず然るに今や突如として桂内閣の成立を觀る是れ吾人が意外の感を生じその前途を豫測せんとする所以なり。

藩伐内閣なる名稱は今や殆んど之を口にするものなく薩長内閣と云ひ土肥内閣と呼んだるは既に歷史上の章句に過ぎず曾ては薩の後進は薩の先輩に隨喜服從し長の後進は長の先輩を尊崇し土の後進は土の先輩を首領と仰ぎ互に排他自贊の確執政爭に從事し所謂藩閥政治なる名稱を聞くとありき然るに今日の狀態は如何同藩出身にして仇敵の如く爭ひ同藩の先輩を目するに政權を托するに足らずと爲し甚しきに到りては轉籍して他藩に列するものあるに至る黑田内閣に吶喊したりし山縣派は今日に於て伊藤内閣を破壞したり松方内閣を轉覆せしめたる伊藤派は今日に於て山縣内閣を切腹せしめたり長伐は長伐と爭ひ薩伐は薩伐と爭ひ紛々亂離殆んど藩伐なるものゝ形影を失したりと云ふも可。



桂首相

◎元老と其忠臣

長の先輩含雪將軍の四天王とは誰々ぞ曰く豪放なる曾禰曰く頑强なる松平曰く熟達なる清浦曰く周到なる平田、彼等四人の外尙三太刀振とも云ふべき大浦安廣等の精悍快活なるあり彼等は實に含雪股肱の忠臣なり

而も彼等は曾禰を除き他は悉く他藩出身たり殊に大浦兼武の如き身は薩藩士なりと雖も全幅の精神を捧げて長の先輩含雪將軍に隨從す何等の奇觀ぞや。長の先輩春畝侯の三家老とは誰々ぞ曰く智謀ある伊東曰く博識なる末松曰く事務的なる金子彼等三人の外鮫島の如き安樂の如き園田の如きありて常に春畝侯に隨從して忠勤を勵みつゝあり彼等は悉く長藩以外の出身なり殊に園田安樂の如き薩藩士にして侯の愛眷を蒙る恰も彼の大浦の含雪に於けるが如きは頗る奇觀と云はざるを得ず。薩の先輩海東伯の如き又西郷侯の如き孰れも其腰巾着とも云ひ大忠臣とも云ふべきは自家の藩士に非ずして却て他藩出身なりとす其外三猿伯の如き革丙將軍の如き早稲田伯の如きつら／＼その身邊を圍繞する勇將猛士を窺ふに亦同様なる情態を観るとを得可し然則今日の政界は藩伐系流を脱却して漸次擧國活動の趨勢を呈しつゝあるを観るに足る之れ豈に政界進步の徵として慶賀せざるを得んや。



清浦法相

◉木圭大將と各政黨

太郎子爵や長の先輩たり我邦の準元老たり若し夫れ藩伐政治の熾んなる時代に於て桂内閣の成立あらんか太郎子爵は悠然として長派を後援と爲し儼然として天下に臨むとを得ん然れども今や擧國一致の時代なり藩伐消滅の世の中なり彼れは斷じて長派を信頼す可からず否々却て彼の敵は長派中に潜めるやも測られざるなり。立憲政友會なるものあり未だ以て模範政黨と爲すに足らず啻に模範政黨と爲すに足らざるのみならず或は陋劣なる政黨なりと云ふも可なり憲政本黨なるものあり近時意氣悄沈何等活動の観るべきものなく蠢爾として政界に惰眠を貪りつゝあるもの丶如し帝國黨なるものあり恰も飢餓に瀕したる老狐の如く食を求め甘きを吸はんと遠吠へしつゝあり。歐州に於ける政黨政治の暗黑面のみを觀察し歸來大聲

疾呼して政黨不必要論を唱道する彼れ頑强松平男の如き其言や一顧に價ひせざる愚論なりと雖もその政黨政治の弊害を痛罵する衷心に至つては頗る同感に堪へざるものあり將來の政界は政黨不必要にあらず今後益々政黨の必要ありその發達を促し以て善良なる憲政の美果を收めざる可らず。

◉暗中の大飛躍

國務大臣の任命は天皇の大權に屬す去れど天皇は國民輿論の歸する處を明知し玉ひ乃ち多數の輿望を負ふたる政治家を以て國政に參與せしめ玉ふべし之れ炳乎として明かなる處我邦に於て政黨の存立永久滅せざる所以なり政黨を基礎とするは内閣組織の一日も忘る可らざる所以なりとす。

太郎子爵や含雪將軍の如き堅固なる根蒂を有せず春畝侯の如き大政黨を有せざるなり三猿伯の如き子分を有せず早稻田伯の如き潜勢力を有せざるなり。太郎子爵や大政黨を基礎とせず堅固なる根蒂を有せず四天王三家老とも云ふべき忠臣を隨へず凛々たる潜勢力を蓄へず正三位勳一等功三級陸軍大將子爵桂太郎と名のりを揚げ單騎二三の足輕槍兵を提げ驀然として白旗不動兵營靜など云ふ程にもあらぬ現今の政界に乘出せり何んぞ夫れ意氣の勇ましきや。



山本海相

木圭大將の内閣は超然内閣にもあらず政黨内閣にもあらずと標榜せり茲に於て政友會は愼重なる態度を執りその施政如何を監視す可しと決し憲政本黨は贊否何れとも言明せず巧に悠々たる黨勢を示せり而して彼の老狐帝國黨のみ押懸け嫁入りを爲し獨り得々として我黨は現内閣と主義方針を一にすと決議せりそも〳〵何等の滑稽ぞや縱令帝國黨員九名の味方ありとするも現内閣の勢威や決して增加せず所謂難有迷惑なるものならんか要するに桂内閣は過渡時代に於けける過渡内閣なり非政黨政治より政黨政治に轉入する過渡の時代に於ける一時の成立に過ぎざるべく其の前途や長命永續

的にあらざる也。

◉桂内閣の命脈

伊藤内閣は閣員不統一に因り破裂したりき桂内閣は閣員の統一頗る鞏固なるが故に斷じて内部より破壞せざるべし然れども從來の內閣史に徵せんか內閣の瓦解や其内部より生じたるもの三その外部より來りしもの六乃ち六に對する三の割合なりとす故に內閣統一を唯一の依賴と爲す可らざるは明白なり况んや今日の如き外部に於ける多數の敵陣嚴乎として存在するに於てをや

太郎子爵の一躍首相の印綬を帶びたるは實に過渡時代の賜なり太郎子や漁父の利を占めたるもの決して相應なる時機に相應なる準備を以て大任を受けたるものに非ざる也惟ふに機敏なる木圭大將は現內閣の命脈は永續して明年の總撰擧限り短くして本年の議會限りと自認し居らん然り吾人も亦桂內閣の前途をトするに同樣の觀察を以てす太郎子爵の大手腕を顯し大抱負を行ふべきは夫れ五年後の政界に在らん而已。

## 星亨氏の横死

今日一片の新聞號外は晴天の霹靂として星亨氏の横死を傳ふ、都下百万の人士誰か驚動せざるものぞ。

氏が今日までの行動は獨り氏に反對するもの丶憎惡措かざりしのみならず氏に多少同情を有するものも倘且つ不快を感ぜざる能はざる所なれども薄志弱行丈夫兒の精氣に欠ける吾邦多數の人士の間に於て意力强大勇往直進思て爲さゞるなく爲して遂げざるなく赤手政界を把握して優々餘力ありし氏の如きは實に比類を絶するものと云はざる可らず。



星亨氏

蓋し今回の變政界の分野は爲に一變せん也、進歩黨は此機に乘して能く、舊勢を挽回せんと欲す可く新內閣の如きは所謂政黨操縱に於て七分以上の重荷を卸したるを感せん、而して自由黨の如き板垣再び起つも林あるも片岡あるも、到底現狀を維續し能はず、政友會亦如何に變轉し去るか未だ預め知る可らざる也。

而して今や政黨訓練の要尤も急にして却て此種の力量才識に於て第一流と稱せらるゝ氏其人を失ふ國家の爲に惜まざるべからず。然れども驕るもの久しからず、氏が剛愎不遜自ら用ひ得意の潮流に乘して進て廻るを知らず、天人の激する所遂に此變に逢ふ、氏にして今少し顧みる所ありしならは夫れ或は免れ得たらん也是殊に惜しむ可く又悲しむ可き也。噫。（二十一日星氏横死の夜龍北）

## 政界日記

松翁

五月二十六日　太郎子爵は春畝侯に起つべきを勸め三年町西鄕邸に於ける元老會亦侯の再起を促す事に决す

仝　二十七日　政友會總務委員三十八會の世話役二十八の細君持ちたる和尙渡邊洪基の葬式あり藩員會葬す

仝　二十八日　元老等互に推讓し春畝起たず三猿起たず含雪亦スマシ込んで起たず玆に於て大命桂子に降る

仝　二十九日　桂子大命を拜したれど直に起つわけに行かず裏心は兇に角大に元老間に奔走就中伊侯を勸む

仝　三十日　桂子御前に拜伏して現狀を奏上し圍侯又參內すこの日召電を發し玉ひ滄浪閣の伊侯を召し玉ふ

六月一日　伊侯參內再起を辭し遂に桂子內閣組織の大任を御受けす政界ゴタ〳〵を空吹風と聞き隈伯北遊す

仝　二日　桂內閣成立す海陸は留任內相忠勝男農相東助遞相顯正子文相大藏法相奎吾竅相兼外相荒助の顏揃

仝　三日　桂內閣に對する各黨の態度愼重なり獨り政界の飢狐帝國黨は押懸嫁入りを爲し現內閣一致さ决す

仝　四日　北淸談利やゝ進捗せり小村壽太郎外相を諾し談判結了を待ち歸朝すべし現閣の適任者たる一人か

仝　五日　桂內閣は政黨を基礎とするに非ず去ればとて非政黨主義にも非ずと云ふ世人は山縣の支店と呼ぶ

仝　六日　田尻北雷檢査院長に挙られ阪谷北雷を嗣ぐ安ペン農商に眞平文部に淺田遞信に長森官房長に任ず

仝　七日　政友會現內閣に何等の關係なきを宣言し憲政本黨反對の態度を執らずコヽ一寸三方睨みさ云はん

仝　八日　北淸聯合軍指揮官ヲルデーゼー元帥來朝す國賓として朝野の歡迎盛んなり日獨和親の爲め祝賀す

仝　九日　政友會愛知支部紛擾す星享屁臨してその鎭定に從事す三四倶樂部又動搖して復黨を唱ふる者あり

仝　十日　韓國借款問題中止となり佛公使ブランシーはブランデーに勢ひを付け韓庭に向ひ四十万元を求む

仝　十一日　國民同盟會頭近衞公桂首相を訪ひその方針を叩き會員會合直に紅葉館に宴會を開く近衞と宴會

仝　十二日　東京市水道に蛭類發生し大學醫科にペスト發生す市吏員とりく縮み上り博士達ペストと嘆す

仝十三日　北淸駐兵を交迭せしめ且兵數を減員するとに决す淸帝の回鑾近きに在り平和の曙光望むを得ん

仝　十四日　含雪將軍椿山莊に春畝侯金澤の邸宅に海東伯三田莊に三猿伯小山田に各々見分を會して暗闘す

仝　十五日　憲政本黨例月に酒飲み會を催ふし隈伯一場の演說を爲す云

ふ伊藤は政黨を御し得ず蓋し一針

仝　十六日　桂大將大に元老間に愛嬌を振り蒔くとに奔走す昨は伊侯を訪ひ非伯に伺ひ今は山侯を訪問す

仝　十七日　華元帥帝都を出發歸國の途に就く北淸駐屯軍組織成り山根少將司令官秋山大佐守備長心得たり

仝　十八日　桂首相上院議員を招待し御馳走を爲す世人之を名づけて意志疏通會と呼ぶ中々如才なき振舞也

仝　十九日　福島少將北淸より歸京す桂子將軍の北京談を聞かんと爲し山伊井大西松関等の元老大會を開く

仝　二十日　桂内閣恰も手練手管に妙を得たる娼婦の如く振舞ひ各黨亦スレッカラシ粋客の如く虚實を覗ふ

仝　二十一日　この日午後三時四十分東京市參事會室に於て兇漢伊庭某突如鋭刄を振ひ星亨氏を刺殺したり

仝　二十二日　政友會總務委員會を開き片岡氏葬儀委員長末松原等委員と爲り故星氏の葬儀を盛んに營む由

仝　二十三日　明治昭代の今日不祥なる刺客を顯す政界の恨事なり政界空前の人傑星氏を失ひ邦家の大損害

仝　二十四日　歷史に殘れる星氏や明治の一大政治家さして大隈板垣諸氏を拔く事三千丈餘氏亦瞑せんかな

仝　二十五日　星氏の兇變は全國を震駭せしめ政友會員は勿論政敵さ雖もその横死を悲まざるなし追が日本

仝　二十六日　この日故衆議院議員從三位勳二等星亨氏の遺骸を高輪承敎寺に葬送す會葬者朝野數千名なり

---

# 社會小評

## 病的行動の原因

里山

今回星亨氏暗殺事件に就て、識者が我國民中此の如き病的行動の頻りなる源因を論ぜるもの、概ね左の數點に歸す

一　其事情、其性質、其利害、其大小等を分明に判斷する意志の欠乏せる事

一　暗殺を以て最も卑怯未練の行動と敎へられず、燕趙悲歌の士を以て却て社會の爲め人道の爲めにせるものと迷信せる事

一　善に非れば惡、正に非れば邪と、事物を兩極端に分別する我國人特得の欠點多き事

一　時勢の大局、風潮の根本を知らず、其代表者さへ除き得れば弊害は救ひ得べしと謬想せる事

一　これに依て己れの名聲を高め、人に知られて死にたしとの考より、大名ある人と無理情死を企でんとする事

一　新聞雜誌が、個人攻撃に極端の筆法を用ひて淺薄にして一轍なる一部の世人に事實の眞相を誤ら

しめたる事

一　同じく新聞雜誌のある部分がかゝる擧動に向て從來いかにも同情を寄するが如き筆法を弄し、間接に鼓吹し奬勵し挑發したる事

此中特に直接の誘因となりしものは、新聞が反對黨の爲に弄する過褒過貶極端の文字なり、森有禮子を殺したるも新聞なり、大隈伯を傷けたるも新聞なり、此種の新聞今又俠雄星亨氏を刺せり。

## 刺客奬勵主義の新聞

往年板垣伯を倒さんとし、森有禮子を刺し、大隈伯を傷けたるものに對し、頻りに同情の筆を弄したる新聞の感化は、間接に大津露皇太子の變、馬關の李鴻章事件を起こしたるに與つて力無しとせんや

我國一部の記者には今猶刺客奬勵主義を保持せる一系統有り

彼等は今回の星事件に關しても力めて刺客の平生を過褒せんことを計り、麗々しく刺客の蠻風なるを論じて、筆底却て之を稱揚する傾きあり、彼等は今更の如く伊太利や東歐や露西亞の例を引き、歐州の帝王に對する危害に比すれば我國のは弊害少しと說き、特に米國のリンチローまでも引合に出だしかゝる制裁も或る程度までは世道人心に必要なりと云ふ、此種議論の有害なるは極端なる文字を使用するに比して更に恐るべし。

## 公民會の擧動に惜む

一部日本人の血液中には今猶伊庭想太郎の如き行爲を壯とし快とし、或る場合には必要なるが如く誤想せる似非武士道に育てられ、病的教育主義に感化されたるもの尠からずとするも、已に常識有るものは誰れか、其表面の行爲に於てかゝる輩を賛するが如きことを敢てするものあらんや、

堂々の陣相對して雌雄を決するに當り、卑怯の振舞を以て味方の一人が敵將を倒すが如きことあらんか、これ武士道の面目を汚したるもの宜しく其味方の一人を戮すべきなり、然るに此に反して其卑劣漢に感謝し、同情し、渴仰するが如きことあらんか、世はこれを何と評すべき、星事件當日、此武士道の面目をも顧みず、紳士の躰面をも厭はず、最も先きに、而も公然其會の名を以て伊庭に差入物をなしたるは公民會なり、江戶ッ子の中心たる日本橋公民會員なり、吾人之を聞て彼等正義を標榜する帝國首府の紳士團躰の爲に深くこれを

惜む、

## 梅子黄落集

△島田一郎と島田三郎　一は直接に大久保を刺し、一は間接に星を殺す、星亨氏の腐敗市政の中心たりし罪悪は決して少なりとは思はぬ、併し三郎君が極端なる悪德文字を列べて顧みざりしは、慥に今日の結果あるに至りし所以の一である、これ果して謹愼なる政界名士の一人として、敬虔なる基督教信者の一人として公民として紳士としての言動であらうか、

△避暑の時期　再び近づく、箱根や大磯に遊蕩幾百金を費すより、朝鮮に遊べ、西比利亜に遊べ、滿洲に遊べ、北清に遊べ、楊子江を溯ぼれ、香港廣東を觀光せよ、と例に依てお勸めする

△日比谷公園　唐樣和樣天笠流南蠻風と、愚にもつかぬ設計に騒がうより、回向院の相撲を以來同公園に移して壯大なる建築をなし、いよ〳〵相撲を國民遊戲(ナショナルゲーム)となすの實を示して貰ひたい、そして雨天順延などの事無く開場し得らるゝ樣にし、内外の貴賓を請招して差支へなきまでに整頓して貰いたい、一月五月の外は曲馬自轉車花相撲何に使用してもよかろう、

△悪人の無き新聞社　さては一個もあるまいが、悪人の少き比較的人物の高きものが集つて居る新聞社は、時事、讀賣、日本、東京日々、朝日、國民、毎日位であらう、萬朝も此頃大に社員を精撰することを力めて居る

△新聞社の相場附錄　各新聞經濟擔當相場受持の記者に腐敗せぬものは一人もない

△原稿の行方　主筆記者社長の命令にて社員が秘密に一生懸命になりて調べ擧げたる材料、其過半は紙上に出ですして何處か行方知れずなるのが小新聞の常である罪悪も財源もこれから出る

△鼠と蠻風　滿都の鼠族已に痕を絶ふとする今日、人間の鼠賊のます〳〵數を増すのみである、ペスト問題を好機として跣足を嚴禁したは機宜を得た處置である

## 文藝時觀

### 新詩人に與ふ　春湖

新詩人足下、足下は、足下の從事する詩歌が、かつて過去に於て、その姉妹藝術たる繪畫に多大の助力を與へたるを知るか。疑ふらくは、足下は、いまだ、それを知らざるべし。何となれば、足下にして、もし、これを知らば、今の如く區々流派の見を持して、たがひに相鬩ぐことなく、夙に奮ひ起つて、その姉妹藝術を裨補せんとつとめたるべければなり。

足下、詩歌が、過去に於て、その姉妹藝術を裨補したりとは、何ぞや。詩歌が、繪畫に對して、その主題を供したること、これ也。足下、わが過去の作畫家は、自然について、たゞちに、その美を感得せんとはせず

して、他が、一たび、これを感得して、藝術的に示現したる結象。すなはち第二の自然について、セコンダリーに、その美を攝取せんとしたりき。而して、その第二の自然は、實に詩歌にてありし也。足下は、かつて、しば〳〵過去の繪畫に接したることあるべし。しからば、その主題について、一種の固定したる類型、すなはち因襲的圖樣あるを認めざりしか。たとへば、櫻をゑがくに芳野山を添え、紅葉をうつすに龍田川を採り、月に三笠山、燕子花に八橋を撰ぶが如き、因襲的圖樣あるを發見せざりしか。足下、櫻は芳野山にのみ咲くものにあらず、紅葉は龍田の川にのみ散るものにあらず、月は三笠の山にのみ照るものにあらず、燕子花はた八橋にのみ生ふるものにあらざるなり。しかるに、作畫家が、特にこれらの勝地を捕へて、その配景となしたるは何が故ぞ。すなはち詩歌に、その主題を求めたれば也、詩人の感得したる自然の美について、そを畫面に示現せんとしたれば也。足下は詩人也。これらの圖樣が、何人の咏に本づけるかは、吾人の言を須たずして、すでに識る所なるべし。すなはち、芳野の櫻花は、友則の「みよしのゝ山べにさける櫻花、雪かとのみぞあやまたれける」に、龍田の紅葉は、業平の「ちはやふる神代もきかず、たつた川から紅に水くゝるとは」に、三笠の月は、仲麻呂の「あまの原ふりさけ見ればかすがなる三笠の山に出でし月かも」に、而して、八橋の燕子花は、また、業平の「から衣きつゝ馴れにしつましあれば、はる〳〵きぬる旅をしぞ思ふ」に出づるものにあらずや。足下、これらの例は、吾人が、今記臆に從つて、亂次列擧したるもの、繪畫が詩歌に負ふ所の主題は、決して、かくの如く僅かなるものにあらず。しかれども、足下、足下は、これによつて、足下の從事する詩歌が、過去に於て、その姉妹藝術を裨補したることを知りたるべきなり。

新詩人足下、足下の祖先は、實にかくの如く、多大の助力を、姉妹藝術に與へたり。顧みて、足下及び足下の同輩は如何。足下は、現代の繪畫に對して、その主題を供すること、なほ、その祖先の如くなるを得るか。足下、吾人は、實にこれを疑はざるを得ざるなり。けだし、吾人といふとも、現代の詩歌が、過去に比して凌駕したる所あるを知らざるにあらず。しかり、和歌、俳句、今樣、片歌の外、新体詩といふ新詩形は出でたり、五七、七五の外、八六、八四の諸調は試みられたり、月は星となり、雪は潮となり、花は菫となりたり。

されど、たゞこれのみ。足下、あゝ、たゞこれのみ。吾人は、これを外にして別に稱すべき所あるを知らざるなり。況んや、また、繪畫に向つて、その主題を供したることをや。

新詩人足下、絕東の繪畫は、今や、まさに新日本的繪畫を創成せんとして、淸新なる主題を求めつゝあり。しかるに、足下の吟咏する所を見るに、その採つて主題となすに足らざるや、すなはち前にいふ所の如し。かくの如くして、足下は、なほ、足下の祖先に慚ぢずといふを得るか。奮はん哉、足下。美術院一派をして、音曲畫題を撰ばしめ、美術協會をして、先人の畫題を反覆せしむるは、畫壇のため、決して慶すべきことにあらず。吾人は、足下が、その天職を盡すの側、畫家をして、主題を足下に仰ぐに至らしめんことを望む。而して、この希望を實現せしめんには、實に足下の奮勵に待たざるべからず。しらず、足下は、能く奮つて、吾人の希望を滿たすべきか。

## 劇界漫語

薇陽

○吾東都を出てゝ、劇界を覗かざること茲に半歲、漸く前月再び京に皈りて、團十が「酒井の太鼓」、菊五が「魚屋茶碗」及び曾我公會の勸進芝居を見物しぬ。團十が噂の如く衰へたると、福助が芝翫と改名したる外、歌舞伎座は依然たる歌舞伎座にして、俳優も、狂言も、觀客もまた更にことなるなきが如し。

○勸進芝居の狂言と、觀客が少しく平日に異りしは會の性質に據りしにて、劇其物の特に更りしにあらねば、梨園にとりて些の値あるにはあらざるなり。

○退歩したるにもあらぬ代り、進歩をもなし得ざりし梨園、重に俳優と作者とのみを無能なりとし、その藝と作とを陳腐なりとて無下に咎むる能はざることあり、そは同じく劇界に進歩せざる、陳腐なることの一二にして足らざればなり。

○就中、梨園の指導者、劇界の羅針盤として自ら許せる、劇評家なる人の批判を聽かば、その如何に能く俳優の技と、作者の作とに似たるかを知るべし。彼等が十年一日の如しと難じ、陳腐時世に投ぜずと責むる俳優と作者との如く、彼等の批評は年々歲々相等しく、進歩せざる技藝と脚本が僅に藝題と人名の變化にて觀客の目を眩ますが如く、彼等の批評は狂言と事實との變化を以て讀者に對する生命となせるが如し。されば甲新聞の批評、は十年前と、今日とに於て其想の著じるき進歩を見出せず、乙劇評家の說はまた甚だ固定したるの感あり。

○然り而して、技藝家に對する批評家、技藝、著作に對する批評、兩々相待て始めて劇界は進歩するとせば、技藝家と批評家と其責任に於て殆んど輕重の差あらざるに似たり。尤も批評の時代と、製作の時代と、各自其期を異にすることなきにはあらねど、時間以外に於ては恐らく其責任の大小を別にすることあらざるべし。

○俳優の進歩せざるを以て忠實ならずとせば、評家の進歩せざるも忠實

ならざる結果なるべく、狂言の陳腐なるを以て無能なりと難ぜば、批判の陳腐もまた無能を示すものと咎めらるべし。而して、俳優の不熱心も、作者の不才も、評家の不熱心と不才と其責に於て徑庭するさころなからん。

○所謂腐敗の劇界なるものは單に俳優さ作者の雜子方さのみあるにあらずして、半面に指導者たる批評家を含む。即ち劇界の進歩せざるは俳優と作者と其他の者さのみ進歩せざるにあらで、一方批評家の進歩せざるなり。己が責任を忘れて他の半面を攻擊するは、腹を撫て背を打つ者といはんか。

○されご批評家をのみ多く責むるの要もなし。彼等が謂ふ如く、技藝家の責任まことに大なり、唯吾は評家が一言己れの責任に及ばざるを憾とするのみ、口に筆に指導者なりと許しながら。

○更に甚だしき一派の評家あり。前に陳べたる俳優さ作者さを離じて、已れの似たるに氣付ざるは明なきなり、智に乏しきなり、此輩は寧ろ憐むべく、救ゆべし。然れども筆を批判に籍つて、濫りに俳優の辯護士たらんとする者あり、彼等は奴婢となり、、幇間となりて、巧みに俳優と世間さに諂ぶるもの、奸なり、黠なり、惡むべく、除くべきなり。

○世人の劇を論ずる者多くは俳優を中心さし、狂言を副として、未だ嘗て批評家に及ばず、妄もまた甚しき哉。作者の天才を待て大作を得るこさ、之を得て巧みに演ずべき名優の出んことは劇の進歩に於ける自動的要素なるさ共に、一面其俳優さ作者さを教へ、一面これを歡迎し、玩味すべき社會の觀客を導くべき批評家は進歩の他動的要素たるなり、されば劇の進歩に於て決して劇評家あるを忘るべからず。

○吾は日本演劇の刷新改良に於て俳優と作者の天才を待つと共に、大なる評家の天才を望む。僅に俳優の辯護士を以て天職となせる者、さらぬもまた明を缺ぎ、智に乏しきもの丶多かる間は、希望に伴ふ技藝家の天才出づるとするも、猫に投じたる小判、豚に與へたる眞珠の如くして、社會は彼等を迎ふるなるべし。嗚賴母敷からぬ世や。



# 文壇水道のくち

蛭が出るか、蚯蚓が出るか、それとも金時がおたんか、ほい！ベストなら大學だ

醉倒子《投》

▲あつい〳〵、いや是はツイ氣が附かなかつたが今日は既にはや七月だ、是では熱い筈、さ、筆を捨つて雲の峯を見て居る處へ、先生今日は、ほ、是は文館の人君が大分熱くなつたが今年は避暑文學の出版は未だかれ、『白砂青松』さいつたやうな切拔は？　あれは先生、今年はダメです、ダメ！では如何だれ、西洋の切拔は？　夫は倚ほいけません、とは又何故？何故つて先生日本て賣れますものか、ぢや鬪ふこさない西洋へ賣ろさ

▲星亭！　いかに夬が悲劇の主人公に適するであらうかよ　と、透谷が居たらいひさうだ、

▲日く多讀、日く多做、日く多商量、日く文源、日く布置、日く修辭、

是が「言文一致作文法」であるのであるのださいかさま日本の横濱南京町へ行つて見ると其服を洋にした支那人が大分居るからぬ

▲『帝國文學』の五文士とやらは皆豪いのか、の尋れに「文壇の珍」とある通りいかにも豪いといへば、通り四丁目の方から、ない〳〵僕の所の文士肖像にはまだ出ないのがある

▲ちりん〳〵一枚五厘、二枚で一錢の新聞賣子、京橋の角にこぼして曰く、如何いふものか、讀賣が月曜の外、さつぱり賣れない、三の面は大和新聞だといふ評があるが如何いふ譯かしらぬ

▲柳塘の諷刺に金升の狂句、あすこの相撲通はどつちに團扇をあげるだろう

▲「吾人は美妙氏がよく其天職を自覺し、猛然起て半生を言文一致の建立に擲ち、以て文運に一大貢獻を爲さむことを跂望して已まざる也」チツチツ〳〵！　いゝ命もいゝ入られえ！　さは、たしか飛影の小說にあつたやうだ

▲先生さう厠の臭ひをかいで如何遊ばす？　何さ、田園生活の下ごしらへをしやうと思つて

▲彼方で曰く文壇の怪事なり、此方で曰く僕一家の事なり、お宅に火事が出たら私とこも險呑です、と合長屋の嬶衆がいふに、いや、火元は私の所ではありません

▲歌舞伎、演藝世界、演劇新報、たのしみ、雜誌がいろ〳〵出るが劇界は是から多事だれと、菱帽の金鈕が喜へば、自轉車の鼻眼鏡は反身になり、オホン、水道から蛭の出る世の中でげす、

▲演藝改良株式會社起る、ホーカイ節の親分曰く、改良がお好きなら劍舞もありやす

▲『紺暖簾』の葦子、欠伸して曰く、若旦那が待ち遠いわ、と、若旦那は蓋し『金色夜叉』の誤植だろう

▲文事あるもの必ず武備あり、日本の文壇あなどるべからず、君は文士相撲といふのものを見たか、いや未だ見ない、そんなもの何處にある、相州の「江の島道」にある、して木戸は何處で賣る、本町の厄文館さ、

▲起死回生の術を書いたものはありませんか、さ、五月の末の日、上野圖書館に尋ね出たものがあるので、出入係の先生、吃驚仰天、此處は醫者でないから、そんなものはありませんといふに、列仙傳にも書いてありませんか、と問ふ、ありません、そんなもを何ふなさろ、さ聞けば、はて乙羽君を地下に起さうと思つて

# 教育時論

## 新文相を迎ふ

警醒子

濱尾氏が、大學總長から文部大臣に榮進してから、文部省と大學との關係は、次第々々に親密になつて來て、外山氏も大學總長から文部大臣となり、今度は、菊池氏がまた大學總長から文部大臣となられた。菊池氏が、果して大臣としての器であるかどうかは、今問ふべきことでない。たゞ文部省の方針は、いつも煮え切れないし、文部省の事業は、いつも捗取らないから、我等の菊池氏に望むのは、此の煮え切れない方針を煮え切らし、此の捗取ない事業を捗取らし、以て無能と

いふ文部省の痼疾を癒やし、自らは伴食の汚名を雪らないやうに働いて貰ひたいのである。大學及び高等學校增設、國語調査會及び學制調査會の設置、悉くこれ、菊池氏が手腕を天下に示すべき好事業ではあるまいか。

## 新文相と中學校令と大學增設

前内閣の文部省が、中學校令を改正した時に、極力その非を擧げて攻擊したものは、時の東京帝國大學總長今の文相菊池氏である。殊に、その數學の時間を減し、程度を輕くしたのを、攻擊した勢の凄しさは、實に非常なるものであッた。然るに、今や氏自ら文相の椅子に倚ることゝなッて、さて此の中學校令をどうする考だらう。

又菊池氏は、大學增設のことに關しては、新に大學を設立するよりは、寧ろ既設の大學を完備させる方がよいと主張して居た人である。然るに、今や氏自ら文相の椅子に倚ることゝなッて、さて大學增設をどうする考だらう。

## 賞杯の下賜について

人の美事善行を褒賞し表彰して、他を勸めてまたこれに學ばしめやうとする方法の中に、賞杯下賜といふことのあるのは我等の甚だ了解に苦しむところである。

我等は、酒が人の身心の上に及ぼす害毒の多大なことを認めて、これが飲用を嚴禁し、世人もまた絕えてこれを用ゐるといふことのないやうにしたいといふ考で、幾歲霜の間、筆に口に、此の大主義を唱道し皷吹し來ッたのである。若し甲者が、乙者の美事善行を賞するのであると號して此の害毒多き酒の飲用を强ひたとしたらどうであらう、我等は、甲者の處置の無法なのに驚くよりは、寧ろ乙者の不幸を悲しまずには居られない、美事善行者の前に盛るに毒を以てするのは、蓋しこれ一種の刑罰であッて、決してこれを褒賞とは言はれない。又これによッて、勸善の效を收めるといふやうなことは、斷じて求められないと思ふ。極端に言へば、此くの如きは、これ人をして、善行美事をなからしめやうとする方法である。

杯は酒を飲む器である、苟も人に酒を飲む器を與ふるは、即ち人をして酒を飲ましめやうと强ふるものであ

る。夫の教主の遺戒を奉じて、杯も手にせずと誓ッて居る宗教家や、禁酒を主義として立ッて居る個人或は團體の美事善行に對してまで、無理にも此の賞杯を下賜しやうといふのは、未成年者に向ッて、喫烟の具を賞與するものと一般で、餘りに滑稽ではなからうか。殊に最も恐るべきは、學校に對して賞杯を下賜するといふことである、無邪氣な年少子弟は、常に修身書によッて、酒と烟草の衛生に害あることを學びつゝあるところへ、賞杯が下賜せられたと聞いたなら、縱令その杯で酒を飲ませられなくとも、少くとも彼等が酒に對する善惡の判斷は、紊されて仕舞ふに違ひはない。

褒賞彰善の方法はいくらもある、我等は、まづ世人が、賞杯を下賜せむといふ命に接した時は、頑として之れを辭退するの勇氣あらむことを勸告し、遂に褒賞彰善の方法中より、此の賞杯下賜といふことが、除かれてしまふやうにしたいと思ふのである。

## 實業を賤しむ弊

算盤を持つことを嫌ひ、勘定の出來ないやうな風を裝ひ、商工を侮蔑し、官人を尊敬す。アヽ、官尊民卑、今もなほ日本人の通弊である。商工にして、若し己の利をのみ貪ッて、社會萬衆の便を計るの意がなかッたら、それは實に賤しむべきものである。官人にして、若し己の名をのみ求めて、これに適ふ程の實を擧げる考がなかッたら、それは實に尊むべきものでない。これに反して、官人能くその職に忠實に、商工能くその業に勤勉であッて、以て民衆の幸福便益を計り、社會の進歩發達を助けるなら、共にこれを尊ぶべく敬ふべきものである。即ち、我等の考では、卑しいとか尊いとかいふことは、商工業や官職そのものにくッついて居る價値ではなくッて、たゞその人々の働き方如何によるのである。

商工本來卑しむべきものでなく、官職本來尊ぶべきものでないのに、一般世人、殊に青年學生の輩が、商工の業に就かうとはしないで、官報の片隅でも汚さうと焦ッて居るのは、誠に氣の毒なやうにも思はれる。勿論、今日の青年學生が、悉く實業の方面に志を轉ずるやうになッては、それこそ恰も天下の青年學生を、擧げて官途に就かしむるのが、社會の最大不幸であるのと同じことである。

要するに、我等の特にこゝに此の事を云々するのは、極めて手近いところにも、身を立て家を修め、社會に

對して大に貢献し得るの道があるにも拘らず、官報の片隅に戀々し、或は判撿事の試驗にまごつき、或は辯護士試驗に躓づき、或は高等文官試驗に失敗し、貴重の光陰を徒消して、四十未だ家を成さず、下宿屋樓上に蟄伏のみ獨り堂々たるをかこつもののみ多きを以て社會のために、頗る慶賀すべからざるものと信ずるからである。

## 帝國大學と薄志弱行

文部省と言へば、無能を思ひ、帝國大學と言へば、薄志弱行を想ふ。然り、無能が文部省の痼疾であるやうに、薄志弱行は帝國大學の特産物である。彼等は頭がよからうが悪からうが、腕が利かうが利かなからうが、兎にも角にも、試驗にさへ及第すれば、それで虚仮威しの肩書がつく、さしあたッて肩書さへあれば、まあ幾何金かにありつくことが出來る、官報の片隅を汚すことも難事ではないといふところからして、彼等の多くは、氣魄なく精神なき土偶木像に外ならないのである。土偶木像、縦令幾千百万あッても、社會はこれがために秋毫の益をも得ることは出來ない、否、却ッて此等土偶木像の釀出のために、社會はその保護と管理とに、尠からざる手數を要するのである。

多くの教室を建て列ね、多くの人間を雇ひ入れ、多くの財貨を撒き散らし、多くの時間を徒消して、そして結局此くの如き多くの土偶木像を造り出すに了るが如くば、帝國大學の存在は、寧ろ社會のために最大不幸である。今や夏七月東西兩大學より出で來る土偶木像正に幾百新調の服に醜骸を包み、意氣揚々として大道を飛び廻り、無邪氣なる年少子弟の間に、土偶木像の種子を植ゑつけはしなからうかと、それが心配でたまらない。

## 馬博士の遺書

前號の本誌に報じてあッた通り、マクスミユラア博士の遺書全部は、加藤高明氏高楠順次郎氏の斡旋で、岩崎家が之れを購入し、更に岩崎家から、東京帝國大學へ寄贈することゝなッたさうだ、洵に日本學界の慶事と謂ふべきである。私財を投じて學藝のために盡すといふことは、歐米の富豪間には殆んど常事のやうであるが、我國では、大倉氏の商業學校に於ける、三井氏の女子大學敷地に於ける、大橋氏の圖書館建設に於ける、其他辛うじて五指を屈し得る位しかない。然る

に岩崎家が、今この義擧を敢てしたのは、たゞ學界の慶事といふばかりでなく、又實に世の富豪に好模範を示したものである。

我等は元來、大學圖書館の公開を希望して止まないものであッて、從來しば〳〵、學問は大學の專賣品でないといふ理由を以て、その公會を催したのであるが、今此の馬博士の遺書が、大學に寄贈せらるゝといふことを聞き、更にこゝに大學圖書館の公開を促すのである。若しそれ事情の許さゞるものがあるなら、まづその一部を公開することゝして、せめて馬博士の遺書だけでも、汎く世人に繙讀の益を分つやうにして貰ひたい。

## 倫理教育の無効

我等は、甚だ忌まはしい事實を聞き込んだ。都下の中學校その數十餘、その近傍には、必ず學校用品を賣捌く商店がある、朝登校の節、午後放課の歸途、こゝに立寄つて必用品を購求する生徒、一時は店頭に山をなすことと、日々變ることがない。その生徒の中には、混雜に紛れて、代金を支拂はずに立ち去るものもあるし、最初から惡意を以てあッちこッちと搔き廻はし、店員の目を偷んで文具をくすねるものもあるし、誤ッて多く出した釣錢を、承知でポッケットへねじ込んで、雲を霞と駈け出す者もある、、何年級の某たと出鱈目の姓名を名乘ッて店員を胡麻化し、巧みに物品を借り倒すものもあるし、甚しきに至ッては、確に盜み取ッたのを、店員に認められ、追究されたのを殘念がり、ポッケットを押へながら、「苟も中學の何年生である、そんな不都合なことは斷じてしない、僕は疑はれても辛棒するが、實に學校の體面に關する、學校に對して濟まない、サアどうして呉れる」など、逆捻を喰はすものさへあるといふことである。ア、我等は倫理教育の無効を叫ばざるを得ない。

中學校は、竊盜や詐欺師の養成所ではない。倫理だの公徳だのと八釜しいことを言ひながら、一體何を語り何を敎へて居るのであらう。敎育勅語の暗記を強ひたり、その解釋を責めたりして、それで倫理敎育の能事が了ッたとでも思つて居るのではなからうか、蓋し或はさうかも知れない。言ふまでもなく敎育は、形式的では何の効もなく、殊に道義的品性の淘冶をしやうといふ倫理敎育は、勿論飽くまで精神的でなければならぬ。敎室では從順であるから、それで善良な子弟だとは言

はれないし、又學校でさへ無闇にあばれ廻るから、家庭では定めて亂暴するだらうと速斷することの出來ないものもある。自ら敎育家を以て任じて居る人々は、少しく眼界を廣ふして、敎場以外の生徒を監視しなければならぬ。

## ●ちりづか（明治三十四年五月廿四日から六月廿三日まで）（全）

●新內閣組織　隨分難產であつたが、とう〱桂子が大命を奉じた新內閣を組織せられた、これが此の一月間の重な出來事である。

●菊池大麓氏　六月二日、新內閣成立し、東京帝國大學總長であつた同氏は、文部大臣に任ぜられた。

●山川健次郎氏　菊池大麓氏に代つて、東京帝國大學總長となられた。

●梅謙次郎氏　文部省總務長官を辭し、

●岡田良平氏　これに代られた。

●高山林次郎氏　久しぶりで『太陽』紙上に一文を揭げられた、「姉崎嘲風に與ふる書」といふのである。中に今の敎育者倫理學者を罵倒せられたところ、頗る痛快である。

●川田鐵彌氏　府下大久保村に地を相して、高千穗小學校といふを建設し、來る明治三十六年から開校するさうだ。大學出身者の中にも、かやうに賴もしい人があるとは、誠に嬉しいことである。

●中島湘烟女史　三十九歲を一期として、去る五月廿五日病死せられた、女史は、女權家、女詩人、女政治家、女演說家として、有名な人であつたが、誠に惜しいことである。

●星亨氏　六月廿一日、刺客のために暗殺せられた、誠に氣の毒である。

●京北中學校　井上圓了博士の設立せられた京北中學校では、去る六月八日、文部大臣を始め朝野の貴紳を招聘して、第一回卒業證書授與式を擧行した。

●佛敎高等中學　本派本願寺の同學は、移轉工事落成したので、去る六月九日開校式を擧行した。法主の祝詞、文部大臣の祝詞等あつて非常に盛なものであつた。

●第七高等學校　造士館に大學豫科を設置し、明治三十四年九月十一日から授業を開始することゝなつた。

●夏期講習會　夏期講習會といふものが、年々盛ンになツて來るのは、決して惡い現象ではないが、殊に今年はまた非常な勢で、どこでもかしこでも、講習會を開かないところはない位である。地方のものなどは、もとより一々擧げて盡すことは出來ないし、宗敎家の方面も略すとして、

師範學校中學校高等女學校敎員夏期講習會、帝國敎育會夏期講習會、東京府敎育會夏期講習會、育成會夏期講習會、明治義會夏期講習會、哲學館夏期講習會、國語傳習所夏期講習會、

この外にもまだ澤山あるであらう。

●佛語文法の改正　佛國文部大臣は、本年三月九日、省令千四百五十八號を以て、佛語文法省畧に關する告示を發布した。その要點は、名詞、單複數、兩性、冠詞、形容詞、指定、不定代名詞、動詞、分詞、副詞等に關し、四十餘點の改正若くは省畧であつて、小學校に於ける敎授に、便利を與ふること尠くないとのことである。

# 宗教時言

## 我國學界の名譽

芝郊

（邦人の著述初めて歐州大學の教科書となる）

帝國文學大學教科書として編纂せられし高楠博士の巴利講本（金港堂發行）は、此度獨逸ストラスブルフ大學の教科書として採用せられ、今春の學期より實行することゝなれり、我國學者の著述にして外國大學の教科用書となれるは蓋しこれを以て嚆矢となす、世界に對する我學術界は爲に一大光輝を添へたりと云ふべし、今同大學在渡邊海旭氏より高楠氏に宛てたる書信を見るに左の如き言あり

（前略）高著巴利講本は大に當國東洋學者の注意を惹き好評嘖々、當大學に於ても本學期巴利語の講本として貴書を採用することゝ相成候、アンデルセン氏の講本（本年出版四折の美本にて紙質印刷は多く見ざる美本なるも原本と語彙を別に出版し且つ飜譯を挿入せず學者の不便不尠）あるに拘はらず、高著を採るに至ては假令尊台の爲に高を加ふるに足らずとするも、邦人の著書が歐洲大學の講本となりしは今回を嚆矢とすべく、事小と雖母國文化の爲に祝すべく、餘光延て小生迄に及び、意氣自ら壯なるを覺え候、ロイマン教授も高著に對し大に同情を表し、別本の如く知己梵學者に推薦の勞をとられ候、追々各地の大學にも用ゐらるべく喜ばしき次第に候、既に萊府ハラソーウィッツ書店に着し候分は、悉く賣り切れ、小生等も目下日本より着荷迄一本にて三人使用致し居候（後略）

## 東都の宗教雜誌

左の十二種を其重なるものとして讀者に紹介す、曰く六合雜誌、新佛教、精神界、警世、佛教、聖書の研究、新人、通俗佛教新聞、東京每週新誌、普通佛教、護教、基督教週報

六合雜誌と新佛教好一對の雜誌なり、一はユニテリアン、一は清徒同志會の機關、其主義に於て、これに關係せる人物に於て、何となく相近し、只六合雜誌の方は其誌面評論的にして社會的材料に富み、新佛教は研究的にして世を導くよりは世に問はんとする材料を以て滿つ、六合雜誌のヲトナシキと新佛教の生氣當るべからざるは全然異るが如きも宗教に對

して自由不羈の見地に立てる共に一なり、六合雜誌は宗敎雜誌中の古株にして曾てヲルソドックス派の持物たりしこともあり、現今は豐崎善之助安部磯雄の諸氏重に筆を採り、岸本、村井、佐治の諸氏之を扶く、新佛敎は境野黄洋、杉村縱横諸氏を初め田中、安藤、高島、加藤、融等の諸氏あり

精神界と警世とも能く相似たる雜誌なり、一は清澤滿之氏の主幹、一は松村介石氏の主筆、共に一種の見地に立て世を救ひ導かんとするもの、精神界は穩健着實、警世は字々風霜を帶び、時に個人を罵りて車夫馬丁的言辭を弄することあり、共に主筆者の品格を想見すべし、然れども多數學生の喜んで讀むは寧ろ後者に屬す

東京毎週新誌(基督敎)と通俗佛敎新聞は、共に週刊にて共に布敎傳道の機關、共に他數の讀者を有すと稱せらる、其他護敎、基督敎週報、普通佛敎、共に信仰の皷吹を主とす

聖書の研究は舊獨立雜誌の變躰、内村鑑三氏の手に成り、新人は海老名彈正氏の機關、共に多く學生に讀まる、「佛敎」は再誕後日淺し特質を知らず、

此他淨土宗の淨土敎報、眞言の加持世界、目白僧園の十善寶窟、眞宗の三寶叢誌、希臘敎の正敎新報、新敎の新世紀等幾多の雜誌有り、然れども敎界の大勢思想の潮流を知るは、先に擧げたる十二種の宗敎雜誌にて盡きたり、只憾むらくは、これ等は悉く重きを宗敎界になすも、一般社會に對しては其一二を除非して何等の影響もなく、何等の貫目も無きことなり、種類の雜多なるに拘はらず勢力の少く讀者の少きは、雜誌界中宗敎雜誌を以て第一とすべし、

## 大學傳道と大學集財

佛敎には基督敎徒の如く敎會の活氣を新たにし、以て新らしき信者を作るの機會を作りたることあらず、佛敎のは常に大學傳道にあらずして大學集財なり、如何にして新信仰者を作らんかと云ふに非ずして如何にして舊信仰を永續せしめ勸財をつゞかしめんかと云ふにあり、基督敎の大學傳道に就ては幾多の非難あり、次項に採錄せる芳涯生なる人の投書にも云へる如き弊害も無きに非ざるべしと云へども、よし形式にても、少數にても、新らしき信徒を作らんが爲に、恥も外聞もかまはずして大奮躍せるの狀は、佛敎者の到底學ぶ能はざるの熱心なりと云ふべし、

# 佛耶二教の小觀

神田　芳涯生投

## 寄附に對する正反對

西洋にては教會とか傳道費の寄附には、身分と収入に應じて惜氣もなく寄附し、又自分の子供等にも貯蓄を奬勵する傍、慈善事業などには進んで金を寄附させる風がある、出す時は機嫌能く出すもさて其使途に就ては頗る嚴重なる監督の位置に立つのである、然るに我國にては正反對で、義務として正當に負擔すべき金すら中々容易に出さず、其代り出した以上は其金が何の爲に拂はれ樣が何の目的に使用され樣が一向無頓着である、ツマリ彼に在ては事業の爲に寄附し我に在ては勸財者周旋人に施すつもりにて寄附するなり、

## 報告の弊

然れども事業の爲に出す金錢に關しては、レポートの弊害有り、支那や日本に來て居る宣教師が、眠つて居るか、働ひて居るか、本國にては只報告を信ずるの外はない、爲に報告の材料計りを調へて外面丈の體裁を繕ふ弊害がある、報告と事實に雲泥の差が生ずることもある、ドンナ人物を使はふが、ドンナ信者を得樣が、如何に譯の分らぬ名計りの事業に資金を投ぜられ樣が、それは關することでない、宣教師の報告は神に告ぐるに非ずして人間に示して詐はり誇る報告である

## 大學傳道の内幕

各所に路傍説教などして其熱心を示して居る、往來の妨げをして居る、これを初むる時、秘密會議と云ふものを開いた、米國宣教師コークス某が發議として、海老名彈正氏はキリストの神格を認めぬ人物なれば、此の大學傳道の仲間入を峻拒すべしと論じ、結局妨害されても困るから敬して遠くべしと決議した、二十世紀百科發達の今日、猶キリストの神格とか、三位一體とかを頑信せる「ノロマ連」「オルソドックス派」の、新進の日本にあるはたしかに文明の汚點、精神界の恨事と云ふべしである、一週間何區にて何百の改悔者を得たの、何區にて何十の洗禮者を見たのと云へど、仔細に見來れば皆病的精神のもの計りである、泣ひたりわめいたり、聖書の押賣をして警察へ引張られたり、餘りウルサク勸めるから疫拂ひの爲洗禮を受けてやつたと公言せる信者を得て喜んで見たり、丸で狐憑きの樣である、健康なる宗教は果してコンナものであろーか

### 目白僧園

大學傳道と事代はれども、能く似た話しは同僧園にて今日は何華族何博士が來た、昨日は何大臣何公使が來たと、物々しく數へて十善寶窟などに書き立てる事である、訪問者と參道者とは別である、ヒヤカシ連と信仰者とは一に見てはならぬ、中にも公然と西洋人などが歸後、攻擊嘲笑の筆を弄して居たのがあるではないか、律師たるもの少し此點に氣を付けて貰ひたい

### 受戒と種痘

春秋二季の大菩薩戒を僧園に行ふ、毎年毎期大抵同じ顔のものが受戒する、有効期限を過ぐれば再受を要ずることと種痘と同一であるのか

## 毎月通信

▲東洋學會と錫蘭の有志　スマンカラ僧正を初め月光新聞(サンダラツサ)主筆ペレラ氏、アナンダ學校主事デヤチラカ、其他二人錫蘭の佛教徒學者を代表して、前日我が帝國東洋學會入會賛同を申込み來り候、

▲鹿野苑の新佛教　草原茫々の裡に埋もれ、一片の舊趾僅かに古代の面貌を留め居る印度ベレナスの鹿野苑は、同國西北洲の大守サー、アレトニーマクドンチル氏の發意にて、新に佛殿を興すべきを佛教徒に勸告し、佛蹟興復を以て終世の事業とせる大菩提會のダルマパーラ氏は、卒先奔走し居り候、我國の佛教徒も應分の助勢然るべくと存じ候

▲再び西比利亞の佛教管長に就て　近日日本にも來らんとする前々號に紹介せる同人は、印度の佛蹟殆んど殘りなく參拜し、ニポールのカトマンジーを見舞はんとして、英政府より露國の探偵に非ずやさ大に嫌疑を受け候由、通信有之候

▲英米獨留學　大谷派本願寺の連枝、大谷瑩誠師は英國へ、同瑩亮師は獨逸へ、同勝信師は米國へ各三年の留學期限にて留學の途につかれしは、佛教界近來の目覺ましきことゝ存じ候

▲大學傳道　にて前月市内南部の各教會二日より九日迄八日間にて聽衆一万一千六百六十三名、一夜平均一千四百六十一人、其十三分の一は信仰者と聞き及び候

▲包圍攻擊　前月二三四の三日間、築地本願の陞讃式有之、彼等大學傳道の人々は本願寺への通路要所々々に人を派して書冊を施こし演說をなし、名けて包圍攻擊と申し候

▲ニコライ氏の奇言　駿河臺のニコライ氏は、此大學傳道を見て網を打つより釣れ、我れは多くの雜駁なる信者を一時に獲んより、堅實なる一人の眞信仰者を獲るを樂むと申し候

▲雜誌「佛教」　前月再誕し、如何にして新佛教を破壞すべきやと題して論じ候、自ら舊佛教徒にてありながら偶樣な議論を吐く甚だ意を得ぬ事に御坐候

▲維新當時の宗教界　に一方の立者(たてもの)たりし鴻雪爪翁今年八十八、前月の二十九日紅葉館に米字の壽筵を開き候

▲高輪學院　芝の本願寺派同院は前月九日盛大なる開校式を擧げ申候

▲婦人矯風會の創立者佐々本豈壽女史は去月九日逝去せられ候

▲殖産や軍事に外資を輸入するよりも、外人より宗教上の補助を受くるのが危險なり卑むべしとの議論、再び内村鑑三氏等の一派より唱道せられ候

右の外別に異りたる事も無之候以上

## 雜評

# 二十二日錄

小觀生

○昨日星亨氏の刺れたるは由々敷椿事にして天下人の耳目を聳動したり、星氏は世人より悪魔とまで絶叫せられたる人にして隨分善からざる事も爲したる可し、而れども日本人としては殆んど比類なきまでに意力強くドシ〳〵思ふ所に向て進みたるは頗る快とす可きものあり、氏にして尚世を永ふすることを得、一度總理大臣として或は外務大臣としてか其執拗剛愎の資を樽俎折衝の間に用ひせしめば家國に貢獻する所ありたらんにと今更惜しみても餘あり。

○刺客伊庭想太郎氏は昨夏予か明治女學校に於て見たる人也、其日は恰も同校武藝科の開業式に當り氏は校長岩本氏の依賴に應して武藝の心得に就て一場の講話を爲し、居合拔き、更に他の劍客を相手に仕合を試みたり、其人品骨柄如何にも立派にして面貌温秀、態度沈毅、決して尋常劍客の比に非ず、今回の事、其斬奸書に記したる如く實に國家の爲なりと誤信して決行したるものなるべし。

○星氏の市會議事堂に殺されたるを聞くや吾人は先づシーザルがブルタス等に刺されたる光景を想起す、而してシーザルの死も金曜日にして今回の變も金曜日なりといふ奇と云ふ可し。

○古來名士の刺客に斃るもの何ぞ限らん、吾邦に在ても維新當初に於ける姉小路公義、佐久間象山、横井小楠、廣澤兵助等諸氏の如き近くは大久保利通、森有禮氏の如き皆國家有用の資を抱て横死の難に逢ふ、干戈紛擾世の尚靜治せざる日に在ては知らず、苟も此文光赫々公議輿論の自由自在なる日に於て而も多少地位あり敎育ある人士にして其理由の何たるを問はず、人の不意に乘して之を刺し天下の大罪を犯かして以て得たりとなす邦人思想の不健康を慨せざる可らず。

○政界の大立物星氏已に斃る、次て起るものは何人ぞ伊東男か尾崎行雄氏か佐々友房氏か犬養毅氏か、兎に

角今暫くはドングリの背競べ也、政友會も動かん也、自由黨もゴタ〳〵せん也。

○新内閣は此變に依て一安心を得たるべし、自由黨の操縦とは實に星の機嫌を取るを意味す、而して今や其勞なし其喜知る可し。

○大學にペスト菌を發生し、鼠の買上け頗る昌ん也、一匹五錢中々善き商法也、市民の猾なるペストの恐る可きよりは先づ善きモウケ口の出來たるを喜ぶ、限りなきの鼠、限りあるの資、遂に窮せざるなきか、知らずペストの豫防策としてモハヤ是れ已上に出づる能はざるかサリとは心細き限りならずや。

## 讀者の文壇

# 祭故星亨氏之靈

三奇山人

窮巷の處士某、清酌庶羞の奠を以て、謹んで故星亨君の靈を祭る、惟ふに君の此世に在るや、其辣腕と大膽とを以て、衆人を籠絡し、事に當りて勇猛直進、權謀術數一時の冠たり、滿天下の以て非と爲す所も、君にして一たび手を下せば、必ず行はれ、冠履顛倒、玉石地を換ふるも、人唯腹に誹し口に譏るのみ、進んで之に手を觸るゝ者無し、嗚呼君の勢力實に畏るべきものなりき、然るに匕首一閃、萬事休し、三魂天に還り、六魄地に委し、腥風人を襲ふて、魑魅相悲み、白日慘澹として、空しく一血骸を餘すのみ、

刺客の兇暴固より憎むべし、されども君亦聊か罪戾無き能はず、鞭韃を死屍に加ふるは、無情の甚しき者なれば、余は既往に遡りて、君の罪狀を數ふるを欲せず、唯一言君の靈に告げて、無明の夢を撹醒し、修羅の妄執を霽さしめんとす、君若し知るあらば請ふ余が言ふ所を聽て熟慮せよ、

夫れ利權政權の二者は、大丈夫當世に意ある者の必ず欲する所なり、人にして此二者を欲せざらんか、田園に閑居して、花を栽ゑ竹を移し、以て世を終へんのみ、即ち是れ獨善の君子、物外の閑人にして、國家生民の上より見れば、些の功無く徳無く、麋鹿の林間に優遊すると何ぞ擇ばん、故に功を國家に建て、徳を生民に施すは、大丈夫の當に努力すべき所にして、其利權政權を執る者先づ意を此に致さゞるべからず、然るに獨り利權政權を得るに汲々として、國家生民の利害を顧

みざる者、往々之あり、此の如くんば寧ろ獨善の君子物外の閑人となるに如かず、麋鹿の蠢然爲す無きも、虎狼の殘害を逞ふするに勝れり、

明治維新以來利權政權は藩閥政府の專有に歸し、立憲の制度行はるゝに及ぶも、依然薩長出身者の掌握にありしが、君等夙に天下の有志と呼號唱和して、輿論を喚起し藩閥の根柢を震撼せるより、漸次利權政權を政黨者流に割與するを馴致したり、大丈夫の事業として實に稱贊すべし、然れども其末路一黨の利害を打算して、權謀術數至らざる所無く、終に天下の衆毀を負ひて顧慮せず、一意身を以て利權政權に殉ずるに至れり、

前者の成功は國家生民の爲めに藩閥政府と健鬪せしに由る、然らずんば如何に君の智識を以てするも、君の膽氣を以てするも、君の功名を成すに至らざるべし、利權政權漸く君の意の如くならんとするに及び、却つて功名の基礎たる國家生民を度外に置き、驕傲專私の行ひありしを以て、終に衆譏を蒙り、慘禍に罹れり、思ふて此に至れば何ぞ復怨むる所あらん、

人は云はん、星亨刺客の手に斃れたりと、余を以て觀れば、君を慘禍に陷れしは、君と意見を異にせる天下の新聞紙なり、彼等は君を指して公盜と呼び惡魔と罵りたり、眞の公盜眞の惡魔をして、白日輦轂の下に徘徊せしめば誰か之を其まゝに差置くべき、盜なれば捕へて刑獄に投じ、魔なれば祈禱驅逐するは、至愚の者と雖も躊躇せざる所なり、然るに口徒らに盜と呼び魔と呼ぶのみにて、其跳梁跋扈に任す、咄々怪事と云ふべし、是に於て多數人民の中、誤解を抱く者あり、曰く盜にして誅するを得ざる國法の不備ならん、我能く法の不備を補はん、魔にして除くを得ざるは、邪、正に勝つ所以ならん、我能く正法に敵無きを示さんと、所謂馬鹿正直にして、義に勇む者、身を擲つて顧みざるに至る、是れ君に公盜惡魔の名を付たる者の敎唆煽動して兇行を遂げしむるなり、嗚呼君を魔と呼び盜と呼びしは誰ぞ、其多くは天下の新聞紙なり、故に余は斷じて云はん、君を殺せしは天下の新聞紙なりと、

然るに新聞紙なるものは、君を公盜惡魔と呼びし口を以て、君を殺せし刺客を兇行者と呼び瘋癲者と呼ぶ、盜を殺し魔を除くを以て兇行となし瘋癲となさば、天下の人誰か復盜を殺し魔を除かん、況んや彼先づ君に對して毒言惡罵を放ち、敎唆煽動の責あるをや、然れども君にして自由主義を鼓吹して、立憲政體の建立に

力めたる當時精神を以て始終を貫き、國家生民を基礎として、報効を圖らば、かゝる毒害悪罵を蒙るに至らざるべし、隨つて慘禍に罹ることなかりしならん、さらば君の死は君の自ら招く所といふも、君何ぞ否むを得ん、古人曰く六國を亡す者は六國なり、秦に非るなりと、余も亦君を弔するに當りて、此感慨無くんばあらず、君以て瞑すべし、

嗚呼、君の太く短き體軀は、亦太く短き生涯を以て終れり、**然れども身を匹夫に起して、黨人の領袖となり**一擧手一投足、天下の人をして目を欹てしめ、職大臣に列し、位三位に至る、亦豪傑の士なり、自今以後黨人中に於て、君の如き敏腕辣手と權謀膽力を具備する者を求むるも、決して得べからず、惜むらくは君をして一たび外交の衝に當り、得意の權變を以て、國際上の問題を解決せしめざりしことを、如今東洋多事の日、盤根錯節前途に横はれり、而して九泉漠々、呼べども答へず、遺憾窮り無し、余君に於て些の恩怨無し、唯國家の為めに之を惜み、肺肝を吐露して以て君の靈に告ぐること爾り、尚くは饗けよ、

# 夏期の休業と清國漫遊

穆　翁

故山の緑滴る青葉蔭に親戚故舊と、一年乃至は多年相會はざりし久濶を叙べて、紅塵に汚れたる臟腑を洗除するのもよかろふ、青山白水親友と自炊して、海水浴に登山に、學窓の欝を散ずるもよかろふ、乃至は青山の文學談、海濱の戀愛談、吾輩はなにも人のすることを妨げはしないが、販省して父母を省せざるべからざる義務があるとか、或は時と志はあるが資力の許さゞる所があるとか、特別の事情のある人は致し方がないが、時もあり、資力もあり、事情も許し。便利もある人達、特には有爲の學生諸君が、此二ヶ月を徒らに消費して貰ひたくない、吾輩が特に痛嘆に堪へないのは何もかも備はつて居る人達が、避暑を名として今日は大磯明日は鎌倉、更らに飽けば京都須磨と飛び廻るだけならばまだしも、ひどいのは紅裙に戯れ婦女に伍して、晝は醉狂を白沙青松の間に演じ。夜は弄花骨牌に東の白むも知らないで騒いで居る樣なのが、有力なる官私立の學生間にも少くないとのことであるのだ、それに付て適當なる消夏法、それは少くないが、吾輩が第一に勸めたいのは清國の漫遊だ、前にも云つた志があつても資力がないとか、又は他の事情に束縛されて居るさか、云ふ人達は仕方がないが、大磯や須磨に狂態を盡くして、弄花や骨牌乃至は不埒なる醉狂に棄たる金の半分もあれば、清國漫遊位いはお茶の子であつて、其利益は更らに卑しく考へても、名望を得ることは啻に學校に優等賞を得るの比ではないのだ、日清の國民が東洋の利害のために和衷協同せねばならぬとか、云ふのは、もはや誰れ知らぬ者はないのみならず、財源の共通、資力の融通、これも心あるものは知らぬものはあるまい、これに付て讀賣新聞が有力者の大學渡清を促がしたのは、

吾輩の至極賛成する所で、我輩は更に官私立の有力なる學生の渡清を促すのだ、大陸を跋渉して、平常學び得たる學術を實地に研鑽するも結構だ、大官有志と面接して東洋の安危を談論するも愉快ぢやないか、手段は何でもよい、議論を實際に活用して、他年隣邦の誼を全くするのは、一に今日の志ある有爲の青年學生諸君の雙肩にかゝる責任であるのだ、それに付ては、まづ大陸の風土を視察しておくのも、相手に日本人の信ずべき價値を認めさしておくのさは、目下の急務ではあるまいか、吾輩は切にこれを以て、政治經濟を研究する、帝國大學、慶應義塾、專門學校等の諸君及び實業教育を研鑽する高等師範、高等商業、工業學校等の諸兄、尙實際に國際問題に直接の關係ある東京外國語學校諸君、特に同校の清語科諸兄乃至は臺灣協會學校其他支那語研究の滿天下の學生諸君に希望するのである、

## 混雜次手に大掃除をやるべし

H、N、生

水道から蛭が出た、蚯蚓が出た、塵芥が出た、ペスト菌を植え付けた鼠が飛び出した、やれ水道の大淸潔、やれ鼠の懸賞捕獲、東洋の大都會東京市の出來事としてなんさお恥かしいことではあるまいか、これに付て水道部の失態、大學の粗漏、それはもはや云ふまでもないが、ぐずぐずして要領を得ない當局者の有樣はどうだ、百五十万の人間に毒水を飮ます積りか、東京の市街をペストで黑燒けにする積りかとの攻擊はどうして云ひ開くことが出來る、吾輩は多くは云はない、これを次手に市街の一大掃除をやつて貰ひたい、

道路の一大修繕、

下水道の至急設置附川渠の浚渫

此大都の眞中で、雨がふれば半靴で歩けないとはなさけないではないか、五月の末には蚊帳を釣られば寢られないは困るぢやないか、

市區家屋の整頓

墓地の移轉

東京程分りにくい町はなく、不整頓なる家屋はあるまい、市街の眞中に墓地があつて、共同墓地が青山谷中の二ヶ所に過ぎないとはなんのことだ、更らに一歩を進みては、

市政の改造

飽くまで市政の妨害物たり、市を改惡する汚濁官吏はどんどん追出すべし、天下の輿論に訴へ正義の鋒を以て、大掃除をやつて貰いたい、經濟が許さないと云ふなら、かゝる汚吏の懷肥すゆくえ不明の金銀。賄賂として集る黃金の花正しく整理して公けに取り出させて五年乃至十年の計畫を勵行するに何の難いことがあるぞ、

## 應募 短文 女服の改良に就て

▲女服改良は已に識者の輿論なり、然れどもこれを一般國民に行ふに至るまでに至らしむるは大問題なり、請ふ余をして一言述ぶるところあらしめよ

一、先決問題　我國の家屋が改まらざる以上は、到底完全の改良を望むべからず、則ち座居の習慣の廢せらるゝまでは此問題の理想通り行はるゝ時代無しと知るべし、然れども座して此時代を待つべきにあらず、出來得る限りの範圍に於て改良を斷行せざるべからず

二、先づ小學生徒より始めん　習慣の比較的染まり居らざる幼年より

始むべきは順序なり、巳に東京の一部に於ても小學生徒のこれを實行せるもの多し

三、如何なる服裝が最後の勝利者たる　梶田半古流か、山根正次流か、曰く何、曰く何、其意見、其主張、其圖案も、頗分夥し、今暫くは混雜の時期ならん、要は只日本服と西洋服の短所を省きて、妙齡の處女に最も似合ふものが、公開の席上今の白襟紋付と同じく禮服の一として許さるゝに至て大勢は定まらん、改良論者の熱心なる運動を待つ

四、如何にして一般の歡迎を得べきか　小學生の一部、女學生の一部には行ひ易し、然れども如何にして普通民家、中以下の婦人をして改良服を着くるを欲せしむる傾向を作るべきか、中々容易のことにあらず、今は殘念ながら、今日の流行中心點より察して、藝者の一階級をして先づ此改良を着けしむるにありとなす、此藝者だに征服するを得ば下等社會一半の大勢は自ら改良服に向はん、衛生や便利の一點張りにて弦齋小說の雲岳女史的婦人を以て一般を感化風靡せんとするは斷じて策の得たるものに非ず

以上卑見を述べて女服改良論者の參考とす（美術學校下村庸三）

▲男子のみ洋裝して女子のみ洋裝をせざる理由なし、畏れ多くも皇后陛下を初め宮中の對外的御服裝は純然たる洋服と承はりぬ、女服改良論者は何を苦んで面倒臭き姑息の改良を唱ふるや、二十世紀の世界的服裝は宜しく文明國共通の物なるべし、我は斷じて女子の服裝を純然たる洋服にせざるべからずと主張す（芝、白金生）

▲早く小學生徒の服裝を一樣にし運動會を活潑に擧行して見たい（小學先生）

▲さうです、マア可愛らしいではありませぬか、アノ筒袖の上に、高々としめあげた海老茶の袴の下から、赤い靴下の二三寸も見える工合と言ッたら。（紅リボン）

▲女服改良の魁たる女學生の衣服は今や從來の上着に袴若は筒袖に袴の姿となりたるが、こは遂に純然たる洋服に進むの階梯ならんとは余等の預期せる所なりしが、現今最早輕洋服を着せる我少女をチラホラ見るに至れり、彼のコルセットを以て腰部をしめるの惡弊だになくば、經濟と其の事情の許す限り余輩は結局一般の女服が漸次洋裝に改らんを希望するものなり（ＨＫ）

▲梶田半古の熱心なる女服圖案も世間にとんと贊成者實行者のなゐのは氣の毒なものだ（二分一古）

▲渡邊女學校さかの制服たる筒袖の前方を紐にて結べるは洋裝に近きものとして最も輕便なる者の一ならん（無名）

▲女子の袴に靴はきとなりてより其遊戯する樣、步行する態度等の活潑に氣懸りなく見ゆるに至りしは余程結構なることとなるが是が純洋服となつたら一層無遠慮に活潑となりてよかろう（仝上）

▲彼の歐米婦人が十四五才頃迄は裳を高く揭げて男生兒童と共に尻はれ尾はれして飛び廻る有樣を見れば成長後の彼等が卑屈ならず柔弱ならず勇壯剛氣自己の義務と職分とを充分に盡して家庭の柱となり社會の慈母と呼ばるゝを怪まぬ、本邦一般の風俗も速に斯くなしたいものだ、（堀田生）

▲衣服の改良と共に必要なるは男女交際の奬勵である男女七才にして席を同ふせずと云ふ儒說の最早實行すべからざるは無論だが、成年男女の交際を奬勵する上から云ふても衣服の改良は之と大に關係する、是迄の着物に幅廣の帶〆たる女が略帽和裝の男子と相伴ふすら權衡を失するよふであるのに、まして一方が高帽洋服の紳士であつたら見態から云つても迚も釣合はぬ、それはかりでなく、重れ着の裾サバキやこま下駄の運

びなど到底右の男子と比肩して逍遙し跳踊することは出來ぬ、是は男女の交際が頻繁になるに連れて公會の席上若は私宅の宴席等に於ても其弊が段々現はるゝことであらふが、要するに我邦從來の女服ば只眺きような美を衒ふたので、畢竟藝妓的である舞妓的である、單に世人の注目を惹くよふにせる俳優のそれと其精神は替らなゐ、大躰が徒に他の顧盼を得んために造られて居る、云ひ換ゆれば美をてらはん爲である、極言すれば身を賣らんためである、我輩も亦女子の容装は成る可く美の趣味に富むの必要を認むれども、徒らに之を衒灼して男性の玩弄物たるを以て甘んずるが如きは其品格品位を保つ所以でない、ソレでドーカ満天下の女子が美さ便利と二點を能く調和したる衣服に改めて、彼の袖長き古風の美服は之を紀念さして彼の藝者舞子の一輩間にのみ殘すとしたら、國風保存の點から云つても靑柳氏の所謂交際社會の必要物として藝者を尊重する上から云つても遺憾はあるまい(京都凌空)

▲頭を前方へ三尺計り突き出し足を内股八文字に蹈みふた〳〵歩む京美人には女服改良はさても行はれぬ(京都鴨涯生)

▲女子の服裝は韓國女子の服裝を以て優美第一とすべし我國の今日朝鮮に學ぶべきは此一事のみと思ふなり女服改良論者の採用を望む(韓國生)

▲アノ長いものを腰のあたりへたくりあげ、ヤレ下〆めだ、ソレ帶だ、それからしよひあげ、それから帶留めさ、四本も五本も卷きつけるさへあるに、その裾の厚ぼッたいことゝいッたら、夜具の襟



そッちのけで、又その帶と來た日になるさ、巾が九寸に丈が一丈一尺、ほんに恐ろしい程の長さと廣さ、此の裾で足の自由を奪ひ、此の帶で躰の活動と發達とを妨げる。日本婦人の柔弱なのも、これがため、日本婦人の不活潑なるもこれがため、日本婦人の意氣地の無いのも、これがため、日本婦人の獨立的精神の缺げて居るのも、これがため、日本婦人の位地の高まらないのも、これがため日本現代の青年の薄志弱行なるも、こんな母によつて産まれたからである。アヽ逝け、この蠻服。(文服生)

▲日本服の美的價値は決して捨つべからず、病院の看護婦を見よ、耶蘇學校の女學生を見よ、丸で蝦蟇の跛を引く樣だ(ちか)

▲美人が着れば大原女の服裝も何となくゆかしく、般若の樣な面付きではいくら優美な改良服を着せても一向引き立たない、女服改良の行き惱み此點にあり、扨ても熱心に主張し實行さるゝ女教師連の御面相!!!吁(窘山)

▲自轉車で駈けずり廻るやうになつては、日本婦人の品格も滅茶々々だなんて、あんまり舊弊を言はないもんさ。裳長たらしい着物を曳ずつて、ぞべ〳〵として居るのが、なんて優美だ。僕が若し女なら、海老茶の袴を膝位に穿き、紫色のフロックコートかなんかを羽織り鳥打帽子を被つて、ステッキでも振り廻し、優美派の膽つ玉を叩きつぶしてやるのだが、殘念なことには僕は男だ。(田ノ力)

▲前面から見れば二度びつくりの御婦人も後ろすがたを見るときは我國の女服は隨分優美に見えると申す人もあるが、これは只だ本邦人の目に慣れたゆゑである本邦の女服は帶の如き重きものを腰にまとひ、着用の上中々窮屈だ衛生上にもわるし又活潑に働くとも出來ない、どうしても改良せねばならぬ、人間は裸体の時ほど手足が自由になるとはない、故に筒袖さヅボンといふやうに天然の形体に從つて衣服を着ければ活潑に動くことが出來ぬのである、そこで洋服もいひが矢張り窮屈で不都合の點もあるから、僕は男子にもよいと思つていたが女子にもよからうと思ふのは支那人の服だ、チヤンの服裝はどうも醜いといふ人があるだらうが、あまりブタつかず又窮屈すぎずもつと工夫して改めたらば衛生にも運動にも適した立派の意味に於てのチヤンとした優美な服裝を得らるゝだらうと思ふ一寸見本を示したいが玆には餘白がないから後日の事としやう（莞爾）

▲「オイ熊公、マア見ねエツてことよ、アノ大道臼からつりでも取りたさうなづう躰をしやがツて、改良服もねエもンだやねえか、おいらは自躰、アノ窮屈袋からして氣に食ねエだ」。「ソウよ、なんでも女は、双子か何んかに、襦子とメレンスの晝夜帶でもしめ込んで、小意氣な前掛に襷がけツてな奴が、一番尤もらしいなア八公」。（立聞子）

▲白襟紋付のお鬼ずりで、疊ざわりもしづ〳〵と、歩む姿のしとやかさ、これを改めて、アノ生意氣な、アノ憎ッてらしい、アノ下品な、つつツぽうや袴にしやうなンかツて、一躰どこの何奴のたわごとだ。サア出て來い、己が相手だ。（智迂亮生）

▲女學生が袴の下にメたる帶はなる可く細いのを撰ぶやうだけれども間には結び目の處が高く突き出て見へるから可笑ひ、（肥後の人）

▲女學生の袴は脇の下迄來て居るから可笑ひ、アレでは割合に歩行や遊戯にも不便利に相違ない、是も矢張り從來ツマラヌ虚飾を事としたる習慣が殘り居るからの事であらう、サリトハ半ば便利のための趣意に反するではないか、（仝上）

▲女服の洋裝となるは遂に免れぬことなるべけれど、彼の水々しひ結髪をムザ〳〵束髪か何かにしてしまつて下らぬ帽子を被るやふになるのは惜ひことだ、（青山生）

▲前月の女學雜誌に女服改良の意見有り又これ一種の見解拔ひて投稿諸氏の參考に供す（記者）

女服の改良せざる可らざるとは、一代の輿論さなれり。是れ素より當然なるとなれども、如何にして改良の實を擧んかに關しては、別に一種の略なくんばある可らず。凡そ衣服の新らしきものは、單に其の美なるが故、其の便利なるが故、其の衛生なるが故、其の安價なるが故等、其の唯一の目的に適ふの故によりて能く行はれ得るものにあらず。惣べて此等諸目的に適ひ、而して后ち尚ほ行はるゝさ行はれざるとは、全く只だ勢に由る也。今の改良案を聞くに、單に衛生もしくは便利等の上より着目すれども、凡そ便利不便利の點に關しては、其の慣れたるものほど便利なるはなし、單に推理の說によりて新なる便利を說くさも遂に効力あるとなし。衛生に於ても其の慣れて一二の不衛生なるは、慣れずして全く衛生的なるに優れり、女子には其の慣れたる衣服を以て尤とも衛生なりさすれば也。又袴の說あれども、之は平生の着用として行はれしめんと頗ぶる難し。學生の用もしくは式禮の用としてのみ只一部に行はるゝを以て止まんか。吾人は信ず、其の尤とも行はれ易く且つ行なつて益あるべき小改良の方案は、胴着もしくは蹴出しの仕立を廻りとなすさ、外國のペテコート風とし、脛の露はるゝを防ぐにあるなり、蓋し古の蹴出は元と脛の露はれざる爲に着けた

り、今反つて其實を失ふ。此他の大改良案は、家屋の結構の改まると女子の仕事の大に變ずる迄は、到底行はれ得べからずと信ず。（女學雑誌記者）

▲夏に山根正次氏の演説に依りて女服改良に關する氏の意見をも參考に供せん(記者)

御存知の通りに湯卷に紐が二つ位ある、夏はヘチマの紐があります、それから襦袢に此襟が後ろの方へ下るやうにぬぎ下げが出來るやうに襦袢に紐が着いて居る。或は二枚重に紐が着いて居ることがあります、のみならず長い着物を着ますると腰へ紐を結びます、甚しきになりますとどうです人間の一番發育せにやアならぬ胸を縛つて居ります、胸の部分を緊縮で卷いて居る其上にどうですか大きな板のやうな帶をしめて居る、錢の掛けた帶程不養生な帶、一人位ではしめられない二人位上と下と掛つてしめる、それで漸くしまる其上に三味線の胴の半切みた樣な物を脊負つてさうして前へ結付けるのであります、それからどうであるかと云ふと其上に帶止を以てヒチンと引掛ける、凡そ十二三紐がある、髪の結び方はどうであります、例へば高島田にしたらどうか、今のやうな着物を着て高島田を結ふ、島田の中には小枕が這入つて居るそれで大變引張られて居る、此島田と云ふものは彼の島田の宿の賤女が初めて結つた髪の形でございますげなが、小枕が這入つて居る、他へ行つて坐つて御辭儀をしますと髪が引張られる、それであるから大きな帶は結んで居るなりそれから小枕で引張ると云ふやうなことからして御辭儀もナカ／＼エラい、御辭儀をする程自分が踏んで歩く汚ない所の芥をスウ／＼ハア／＼吸つて居る有樣で大變丁寧なる御辭儀をしまするど翌日はどうであるかと云ふと肩が張つて往かないと云ふ歐洲諸國にあつては肩の張る病氣はない、日本の婦人ばかり色々種類がありまして獨り小枕を入れるのは島田ばかりでありませぬがアヽ云ふとが害になる、それで私はどうしても此着物を改良いたさなければならぬと云ふのであります、隨分幅が廣くつて豐かのようであるけれども重たい幅のある帶をきつと占めるそれが爲めに胸の周圍を強く壓迫されて發育をすることが出來ないとになります、それでありますから丁度害は西洋のコーセットと同じことであります、年を老つた婦人は改良が出來なくつても今から極く惡い習慣に馴染んで居らぬ所の幼年なる即ち學校へ行く所の御孃さん方をして早くからして着物を改良せしめてやりましたならば宜からうと思ひますのである私が一つ拵へた着物がある、此間から中央新聞に出て居りましたが此着物は私の考ですが衞生一點張り便利で靜く歩ける、運動を充分にさせることが出來ると云ふ法、是へ以て行つて美術と云ふことが混らにやアならぬとふことでありまして梶田半古さか色々の方々が朝鮮の服の如きものを拵へられて大變優美のものゝやうに認められますが是は仕立が六ケ敷からうと思ひます、今までの反物で拵らへぬと往かぬと云ふ私の考で私のは唯袖を切る、袖を剝いで筒袖にする、さうして腿の半ば邊で切つて仕舞ふ、今までの長い着物を切つて仕舞ふ、さうしますると袖と縫上げとで袴が出來るのであります、小さいものでありまして十歳位のは五布で宜い、それから下には袴は四布で宜しい、それから十五六歳の人は六布で宜しい唯行燈を拵へてそれへ裏を付けて二づに折つて兩緣を切つて上を疊んで袴にするのであります、此頃立派な袴が出來ましたが矢張いけない、紐を胸の方で結ばなければならぬから袴の裾が長いから立派には見えるが往けない、それで私は今の着物の下には下ズボンを穿いて今の短い袴をはかせる、短い袴でありますから膝坊主から三寸下つて居る、それまでであれば宜いさうして歩く上に

於ては靴をはかせる樣に見易い、誰でも出來る、私でも縫ふことが出來ます、髮は臭い油をつけずに少し洗髮にして束髮でも何でも宜い、後ろへ垂しても宜いから容易なものにしたいのであります、御婦人が二十人も集ひて部屋が閉込めてあると非常に臭氣がします、是は害を爲すものですから斯ふ云ふものは追々に廢して良い匂ひのするやうにしたいのであります、婦人が此運動をなさつてさうして發育すると立派な阿母さんになられてさうして後來良い丈夫なる所の軍人を生むやうになると思ひます、

課題

## 我國の住居に就て

七月十五日まで

## 我國の公園に就て

八月十五日まで

# 前月の出版界

●佛教史要

境野哲氏著　鴻盟社發行

宗教學校に於ける教科用として編纂せるもの、繁多の材料を揃へ來て著者が明快の頭腦を以て消化し、取捨し、其文亦簡潔、教科書としては實に其要を得たり、製本紙質悉く佳し、挿畫は平子鐸嶺氏の手に成る（實價一圓）

●カーネギー

菅綠陰氏著　博文館發兌

著者は曩に成功要錄を著はし青年書生の涵養に於て多年意を致せる人にして本書の如きも其意に外ならず。カーネギー氏は世界富豪家傳中尤も光彩ある歷史を有し、能く積み能く散し世界富財の精神上一革命を起さんとする不世出の人傑也。本書の如きも吾國の青年のみならず、何人も一讀して學ぶ所あらば個人の幸福のみならず抑も國家の幸福と云ふ可き也。（定價二十五錢）

●學生の牛面　猛虎一聲

神田千代田町　博報堂發行

書生必讀の小品文を集めたるもの、所謂學生の牛面は描き出して餘蘊無し、曰く下宿生活の弊風、運動と風紀、文學の衰退を賀す、風雅と滑稽、流行子を戒しむ等は其題目の重なるもの、袖珍の美本なり（十五錢）

●家庭學校

留岡幸助氏著　京橋　警醒社書店發行

著者は感化事業を最も能く研究し又能く經驗せる人なり、此間感化事業の必要より說き起こして自己の管理せる家庭學校の歷史生活教育等十九章に亘り感化事業を說くこと詳にして精なり（二十五錢）

●春夏秋冬（春の卷）

獺祭書屋主人選

神田猿樂町　ほとゝぎす社發行

明治三十年以後の俳句を集めて四季四册に分ちたるもの、選者は獺祭書屋主人正岡子規氏なり氏の序によれば此書は「最近三四年の俳句界を代表したる俳句集となさんと思」ひて選擇したるものにして「俳句の時代」に於て「新俳句」に次ぐ者より「新俳句編纂より今日に至る僅に三四年に過ぎざれども其間俳句上の經歷は一變再變に止まらずしかも一般の俳句

界を概括して言へば蕪村調成功の時機ともいふへきか」と、即ち此書は蕪村調成功時代の俳句にして文學上より見れば俳句一時期の特色を示すものといふべく入門者にとりては好個の指南車と云べし（定價二十五錢）

### ●時代思想の權化（星亨と社會）
正岡藝陽著　新聲社發行

著者は「星亨を知らんとして時代思想を見たるにあらず時代思想を知らんとして星亨を見たり」として篇を十四に分ち、素性、閲歴、性行、家庭等諸種の方面より星亨を解釋せんと試みたり、而して其解釋したる所を見るに星を以て牛頭蛇尾の怪物なりといへり、然らば著者が此怪物によりて知りたる時代思想は如何、換言すれば著者は時代思想を如何に解したるか、之に對して著者は充分に解答する所あらざる也、たゞ第一、第十四の二章に於て時代思想に論究したる所あるも夫は星亨觀察に入るの前提及び余論にして是によりて歸納したる斷案にあらず、時代思想を論ぜるものとしては餘りに無造作に餘りに淺薄に且つ餘りに非學理的也、要するに此書は著者の言の如く「時代思想を知らんとして星亨を見」たるものにあらず、然れども其「誇榮心」を罵り「明なる大膽」を罵り「惡魔の集議所」を罵り「錢神の歸依者」を罵り「日本のカーライル大先生」を罵る所「熱沸々、時としては彼の泰西豫言者の口吻に類するものあり、その卷頭にカーライルの一節を抄出せるを以て見るも著者の眞意は蓋し此處にあるが如し、然らば即ち此書は星亨を借り來りて現代の社會を痛罵せるものとも評すべきか（定價二十五錢）

### ●大福帳
村井弦齋著　春陽堂發行

例の弦齋居士が舊著中の舊著也居士の小説は既に定評あれば今更めていはず評者はたゞ此カビの生えたる骨董物が勿躰らしく四號活字に改刷せられしを見て居士の聲價未だ衰へざるを知り得たるのみ（定價三十錢）

### ●教界新光明
京都法藏館發行

本書は眞宗大學出身舟橋水哉、藤岡了空等十數名の人々が各種の團躰、軍隊又は監獄等に臨みて時勢に適切なる演説、說教、法話等をなしたるを集めて印刷に附したるものなり布教者の良指南たる可し（定價參拾五錢）

### ●靈界之偉人
森江書店發兌

宗教倫理界の偉人東西十二傑の評傳を集めたるもの浩々洞諸氏が各々思ひ付きたる人物に就きて得意の筆を揮ひたるものにて人生理想の果して實現せられ得べきものなるや否やを判明せしめんため彼の理想に順ひ實際に一生の行路を經過したる人物を求めて模範とせしめんために著されたるものなり（定價參拾五錢）

### ●北清觀戰記
坪谷善四郎氏著　博文館發行

本書は坪谷善四郎氏が曩に田口衆議院議員宇佐川陸軍大佐等の人々と北清戰亂地を跋涉して、戰況、地形、風土、習俗并各國軍隊の行動を詳細に筆錄して本國へ通信したるものを纂修したるものにして卷尾に附記するに從來の新聞雜誌に掲載せられざりし北清戰地々誌を以てし又太沽の光景、太沽沖各國軍艦其他戰地并に北清韓國等の風俗等の寫眞畫數十葉を加へたれば當時の事情を知らんと欲する者には好個の讀物なり（定價四拾錢）

### ●村上博士講演集
文明堂發賣

文學博士村上專精氏の佛教界に於ける地位は吾人の贅言を要せざる所、本書は同氏の演説佛教の大意、佛教倫理の要旨等十二種を輯めたるもの

(定價貳拾五錢)

●佛教の家庭　文明堂發賣

佛教と家庭との關係につきて從來詳細に記述したるものなかりしは教界の一缺點なりしに山田文昭、石原宣賢外二三氏の著したる此書は能く此望に叶へるが如し(定價参拾錢)

## 彙報

●○○○○○○○○○
マクスミユラー文庫　既記の如く男爵岩崎久彌氏は故マクス、ミユラー博士の藏書全部を東京帝國大學に寄贈したるが大學にては之を岩崎家寄贈マクス、ミユラー文庫と稱し寄贈者指定の條件に依り永く同大學に保存し學術研究の要に供することゝせり寄贈の顛末左の如し

明治三十三年十月二十九日マクス、ミユラー博士沒す博士の病蓐に在るや自らその起つべからざるを察し外交官として米國に駐在せる其子マクス、ミユラー氏を召還し日夜自傳を口授して之を筆記せしめ旁ら一切の藏書を整理してその目錄を作り之が散逸を防ぐ博士は自ら所藏圖書の內容及その價値に就て自己の意見を記し之を未亡人ジョージヤクス、ミユラーに付屬せるが遺書の處分は之を公用圖書とし總じて之を一括して分散せず遍く學者の需用に應ずるに在りたり

博士沒後夫人は其全圖書を「Max Muller library」と名け一括して學者の閲覽に供せんため希望者に賣却せんと欲し先づ之を博士の舊弟子たる東京帝國大學文科大學教授文學博士高楠順次郎に通じ其圖書の日本に於て最も有用なるべく且つ最も光榮ある紀念を存すべきを信じ殊に全部を日本に讓與せんことを切望せり然るに博士の郷國なる獨逸に於ては夙に其圖書を購入するの希望ありて其意を夫人に通じ其交渉漸く進行せるを以て夫人より更に其旨を報告し來れり東京帝國大學に於ては如何にもして之を請求せんと欲し種々計畫する所ありしも終に經費の許さゞるため之を購入すること能はざりしが時の外務大臣加藤高明は學術上該圖書の地位及其眞價を岩崎男爵に紹介し同男爵は之を購入して東京帝國大學に寄贈するに至れり右購入及寄贈に關しては末松男爵も亦斡旋する所あり該圖書は本年九月中には本邦へ着すべし其運賃、保險料、代價等を通算せる豫定金額は三萬六千圓なりと云ふ

又岩崎男の指定したる寄贈條件は左の如し

第一條　寄贈に係る圖書は之を一括して他の圖書と區別しマクス、ミユラー博士の遺書たるを明にする方法を立てられたきこと

第二條　適宜の方法を設け廣く斯學研究に從事する者の需用に應せられたきこと

第三條　總て圖書を散亂する虞ある措置は之を避けられたきこと

●府下の精神病者、、、、、、　精神病の看護法實施後昨三十三年下半季間府下に於て其手續に及びたる精神病者自宅監置の數は男七十八女二十七人にして其間監置を廢せしもの男五人女一人死亡せしもの男三人なりと

●全國鐵道の賃錢と時間　○○○○○○○○　東京朝日の報に曰く

日本の鐵道も追々延長して三千九百哩、臺灣まで入れてザット四千哩に屆くか屆かぬまでとなつたが其賃錢は割合に廉い、臺灣は別物として內地の鐵道全躰の三等賃金が合せて五十三圓と七十三錢五厘に過ぎない▲即一哩平均一錢三厘三毛强に當るのであるが是れは長距離割引の仕組になつて居るから近距離の賃錢は大抵一錢五厘位から二錢まてゝある▲

全國の鐵道で一番廉いのが山陽鐵道である即ち神戸馬關間の延長約三百哩で三等賃金三圓であるから一哩に割つて一錢にしか當らぬ▲又一番高いので著しいのは七尾鐵道で是れは僅か三十三哩四十五鎖の間に六十八錢を貪る即ち一哩平均二錢二毛五に當る▲二等賃金は私設鐵道では大抵五割增で官線七割五分增である先づ平均六割五分增ぐらゐに當るだらう然れば全國の二等賃錢は八十八圓餘に過ぎない又一等を十二割增さすれは百十八圓餘に過ぎないのである▲但し右は凡て各鐵道規定の賃錢を合算したのであるから愈〻實際に旅行をやるとなれば少くとも其の二倍半を要すると見ればならぬ則ち百三十圓乃至三百圓あれば日本中をあるける勘定である▲日本を縱貫するに何程の時間を要するかといふに先づ長崎一番で出發するとして夫から山陽線に乘次ぎ其日の行程は防州柳井津の少し手前に終るのである第二日目には神戸を經て濱松と靜岡の中間中泉といふ所まで來ることが出來る第三日目には品川赤羽を經て日本線に乘換へるのであるが是は連絡が宜しくないので泊となる第四日目には赤羽を出て陸中一の關まで第五日目に靑森を經て津輕海峽の船中まで第六日目には室蘭に上つて石狩國岩見澤砂川より旭川まで第七日目には旭川より鹿越までと云ふ順序になる此鹿越といふのが日本の鐵道の最東端である▲ソレで右の行程に依ると日本の縱貫に百五十時四十分を要するとなる即ち六日と六時餘である尙滊車の連絡都合に依り多少の伸縮はあるが要するに六日以上七日間はドウしても掛のである▲右の內正味汽車に乘のは何時かといふに九鐵が九時五十五分山陽が十五時五十八分官線が二十時廿七分赤羽線が五十一分日本線が廿三時三十三分津輕海峽の船が十七時間北海道鐵道が合せて十三時四十二分即ち總計百〇一時二十六分是れに門司馬關間の渡船十餘分間を加へて約百〇一時間半である▲スルト差引約五十時間といふもは丸て連絡の爲めに費さるるのである北海道などは兎も角もとして內地の鐵道だけなりとも今少し連絡を甘くすることが必要であらう

**●貧民小學校設置案**　東京市にては今回貧民の子弟にして就學し能はざるもの丶爲め特殊尋常小學校なるものを卅四年度に於て凡そ五校設立の見込にて議案は愈々次期市會に上る筈なるが建築費は一校に付凡一萬四千圓五校合計七萬圓にして市內細民の居住多き地を相して之を設け且就學兒童には敎科書圖書學用品一切を貸與するの規定なりと

**●海城學校落成式**　豫て日比谷公園隣地へ建築中なりし海城學校は既に落成し去月廿二日落成式を擧行

**●大谷派本願寺副管長**　宗制寺法の中に副管長の制を設け內務大臣の認可を得去月廿日同派新法主副管長に就職

**●新敎五大敎派の比較統計**　我國新敎派中最も勢力ある五大敎派の統計左の如し

| | 關係外國傳道會社 | 敎會 | 敎會員 | 信徒寄附金 |
|---|---|---|---|---|
| 日本組合敎會 | 一 | 七二 | 一〇、五七八 | 三一、八〇九 |
| 日本基督敎會 | 七 | 七一 | 一〇、八四七 | 二七、六三三 |
| 日本聖公會 | 五 | 八〇 | 七、九七六 | 一一、二三三 |
| メソヂスト敎會 | 六 | 一二九 | 六、三三〇 | 二二、六四八 |
| 浸禮敎會 | 二 | 二九 | 二、一〇一 | 三、六六五 |

尙ほ右五敎派に關係ある外國宣敎師の人員を擧れば

| | | | |
|---|---|---|---|
| 日本組合敎會 | 六二 | 日本基督敎會 | 一五六 |
| 日本聖公會 | 二五六 | メソヂスト敎會 | 一五二 |
| 浸禮敎會 | 六四 | | |

此統計中說明を要すべきはメソヂスト敎會の分にて、同統計は同敎會六派の合計を揭けたるものなるが、目下敎派合同の協議中なれば、假りに其議の成立したるものと視做したるに由る。又日本基督敎會の會員中には受洗小兒をも加へある由なるが、之を除き去るとき幾分か其實數を減ずるに至るべしと。

●新博士學位授與式　前月末文部省にて行ひ左の通授與せらる

法學博士（博士會詮考）高田早苗
同（同）高木豊三
同（同）中村進午
同（論文提出）松波仁一郎
醫學博士（同）藤波鑒
同（同）三宅速
同（同）三輪徳寛
同（同）桐淵鏡次
同（同）岡村龍彦
同（同）金杉英五郎
同（同）上坂熊勝
同（同）淺川範彦
法學博士（東京大學總長推薦）岡田朝太郎
同（京都大學總長推薦）巖谷孫藏
同（同）井上密
同（同）織田万
同（同）岡松參太郎
同（同）千賀鶴太郎
同（同）高根義人
同（同）田島錦治
同（同）仁井田益太郎
同（同）仁保龜松
同（同）春木一郎
醫學博士（京都大學總長推薦）笠原光興
同（同）鈴木文太郎
工學博士（東京同）寺野精一
同（京都同）大塚要
同（同）小木虎次郎
同（同）横堀治三郎
文學博士（東京同）大塚保治
理學博士、（京都同）山口鋭之助
同（同）織田瀬次郎

●各鐵道會社の割引　山陽、關西、近江、七尾、豆相の各私設鐵道會社に於ては夏季各學校生徒休暇旅行の便を計り左の通り割引の上乘車せしむる由なり

○山陽鐵道會社　京都同志社生徒　二割引（自七月一日至九月十日）大阪高等工業學校　同（自七月一日至九月廿日）東京美術學校　同（同上）東京高等工業學校　金澤醫學專門學校　第六高等學校亦同じ

○關西鐵道會社　帝國大學生徒　三割引（七月一日以降當分）○近江鐵道會社　第三高等學校生徒　二割引（自七月一日至九月三十日）東京工業學校　金澤醫學專門學校　東京美術學校亦同じ○七尾鐵道會社　第四高等學校生徒　二割引（自七月一日至九月十日）○豆相鐵道會社　東京高等工業學校生徒　三割引（自七月一日至九月十日）東京美術學校生徒亦同じ

●臺灣のペスト　臺灣總督府より左の通り内務省に公報あり

六月廿五日　臺南　新患者八人、死者十一人
六月廿六日　臺北　新患者廿四人、死者十人
本年一月一日より六月廿六日迄
累計　新患者三千八百十三人、死者二千九百三人

新刊

濱口翠村著

# 古英雄と宗教

定價金貳拾錢郵稅金貳錢

題して『古英雄と宗教』と云ふ、古來英傑の士が宗教に對する思想及び行爲を叙述したる也、

藤原鎌足あり、和氣清麿あり、坂上田村麿あり、菅原道眞あり、源義家あり、平重盛あり、北條時頼あり、時宗あり、楠正成あり、新田義貞あり、毛利元就あり、太田道灌あり、大石良雄あり、二宮尊徳あり、山岡鉄舟あり、其他數十名の宗教に對する思想、及び行爲を録したるなり、

以て座右の珍となすべく、以て青年及び軍人への贈物となすべく、之れを讀んで妙味津々、英雄と對談するの想あり、之れを携へて修練せば、英雄の域に至る又難きにあらざる也、

發行所　本郷四丁目　文明堂

賣捌所　神田表神保町　東京堂

地方　京都西六條　興教書院

# 帝國東洋學會趣意

本會は、東洋諸國に於ける言語、文學、宗敎、哲學、歷史、地理、神話、俗話、工藝、美術等に關する史實を現存の古文書に依りて研究するを目的とす、

現存の文書中、その材料最豐富にして、曾て學術的講究を經ざるものを一切藏經とす、その卷帙の夥しき實に八千五百三十四卷、加ふるに藏外の諸書を以てすれば、殆萬餘に達せんとす、殊に我國には、本邦選述大藏經の外、宋、元、明、淸、麗の各完本の現存するありて、佛敎典籍の完備殆世界無比と稱すべし、抑漢譯藏の含蓄せる所は、他國現存の諸藏と稍その趣を異にし、獨宗敎、哲學のみならず、諸般の學藝に關する材料網羅して餘さず、學術攻究に資する所亦實に大なり東洋の一大古學叢書と稱するも、亦過言にあらざるなり而して之が對照硏鑽の用に供すべき諸國異譯の經典も亦その數多く、南方佛敎諸國の經藏は、既に印行流布する所となり、暹羅藏藏經全部、及龍動巴利書出版會社にて發行せるものも既に我國に入り、北方佛敎の典籍たる西藏藏經も、近時既にこれを得るの機に達せり、印度ニポール現存の大乘諸典は、夙に歐洲にて出版せるもの、外、現に露西亞帝國大學內大乘書出版部、及印度カルカッタ府佛敎出版會社に於て修成せるものも多く、蒙古滿州亦夥多の譯書を有す、此等の諸書を對校し、その材料を自由に運用し、攻究討尋の結果を世界の學術界に貢献し得るの地に在るもの、獨我國學者あるのみ、故に我輩自ら揣ず、大方諸君の贊同を得て、玆に本會を組織し、內、藏經の內容を攻究し、諸般の材料を查定類聚し、外、異譯の諸聖典と對照考覈し、その結果を編纂大成し、本會の目的を達する第一段となさんと欲す、

本會は藏經調査の事業終るを竢ちて、漸次他の文書の攻究に及ぶものとす、

# 帝國東洋學會規則

一、名稱

第一條　本會を帝國東洋學會と稱す、

二、目的

第二條　本會は東洋諸國に於ける言語、文學、宗敎、哲學、歷史、地理、神話、俗話、工藝、美術等に關する事項を現存の古文によりて研究するを目的とす、

三、事業

第三條　本會は第一着手として左の如き事業の成効を期す

イ 印度學藝叢書編纂
ロ 東洋各國佛敎史編纂
ハ 辭書編纂
ニ 原本調査
ホ 典籍出版
ヘ 原譯比較研究
ト 質疑應答

（右の外機關雜誌を發行することあるべし）

四、會員

第四條 本會々員を分ちて會員、贊助會員、名譽會員の三種とす、

第五條 本會と目的を同うしその平素の研究によりて直接間接に本會の事業に貢獻するものを會員とす、但會員は評議員の決議に依り之を定む

第六條 團体若くは個人にして金圓を寄附し以て本會の事業を助くるものあるときは評議員の決議を經て贊助會員となす、

第七條 名譽會員は評議員の推擧によるものとす、

第八條 各會員は本會の編纂にかゝる叢書、辭書その他の出版物を實費にて購求することを得

五、役員

第九條 本會に左の役員を置く、

會長 一名、 副會長 一名、 評議員 十八名、 幹事 三名、

編輯員 若干名、 書記 若干名、 役員職制は別に之を定む

六、雜則

第十條 臨時學術講演若くは懇話會を催し會務の進行を報告し又は會員相互の親睦を計るべし

第十一條 會計に關する規則は別に之を定む、

第十二條 本會規則は評議員の決議を經るにあらざれば變更することを得ず、

會長 常磐井堯猷

評議員 渡邊國武 渡邊龍聖 高楠順次郎 坪井九馬三 南條文雄
村上專精 上田萬年 井上圓了 大内青巒 前田慧雲
松本源太郎 藤島了穩 澤柳政太郎 三宅雄次郎 三上參次
島地默雷 島田蕃根

東京市本郷四丁目五番地

**帝國東洋學會**假事務所